地質学雑誌　第119巻　第7号（通巻1414号）付録　平成25年7月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.16 No.7 July 2013

第120年 日本地質学会学術大会

2013年9月14日(土)~16日(月)　@仙台・東北大学川内北キャンパスほか

共催：東北大学災害科学国際研究所、東北大学学術資源研究公開センター、東北大学東北アジア研究センター、東北大学大学院理学研究科
後援：全国地質調査業協会、東北地質調査業協会（申請中）　協賛：（公財）仙台観光コンベンション協会

●公開シンポジウム

※参加費無料、申し込み不要

「東日本大震災：あの時、今、これから」

日時：9月15日(日)　14:30～18:00　※開場13:30
会場：東北大学百周年記念会館 川内萩ホール
後援※：宮城県教育委員会、河北新報社、TBC東北放送　※7月12日時点

■日野 亮太（東北大学教授）「2011年東北地方太平洋沖地震の実像に迫る」
■今村 文彦（東北大学教授）「巨大津波の来襲と避難行動」
■木島 明博（東北大学教授）
「東北マリンサイエンス拠点形成事業とこれまでの成果について」
■秋元 和實（熊本大学准教授）
「先端海洋調査機器を用いた沿岸域のガレキ分布調査に関する成果」
■松澤 暢（東北大学教授）
「2011年東北地方太平洋沖地震後の地殻活動について」
■今泉 俊文（東北大学教授）「活断層研究と評価の現状と諸問題」
■島崎 邦彦（東京大学名誉教授）「東日本大震災：科学者と社会への一視点」

「地質情報展2013みやぎ」

宮城県及び周辺の地質現象や地震・津波・地盤災害について紹介します。化石レプリカ作成などの体験学習コーナーも用意しています。

開催日時：　9月14日(土)　13:00～16:45
　　9月15日(日)　9:00～16:45
　　9月16日(月・祝)　9:00～12:30
会場：スリーエム仙台市科学館　※入場料無料
（http://www.kagakukan.sendai-c.ed.jp/）
主催：一般社団法人日本地質学会、産業技術総合研究所地質調査総合センター
共催：スリーエム仙台市科学館　後援※：宮城県教育委員会　※7月12日時点

●市民講演会

**「災害に備える安全な社会とは
～求められる発想の転換と主体性～」**

日時：9月16日(月・祝)　14:30～16:00　※開場13:30
会場：東北大学百周年記念会館 川内萩ホール
講師：柳田邦男（作家・評論家）
参加費無料
申し込み制、先着800名

後援※：仙台市教育委員会、宮城県教育委員会、
河北新報社、TBC東北放送
※7月12日時点

■申し込み方法
往復はがきに住所・氏名・希望人数（1枚4名まで）を明記し、返信の宛名面に住所・氏名を記載の上、下記宛先に送付してください。当選・落選のお知らせを返信いたします。当選者の方は返信はがきが入場整理券となります。

○ハガキ宛先　〒980-8578　仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
東北大学理学部地圏環境科学科内
日本地質学会市民講演会係

○詳しくは　http://dges.es.tohoku.ac.jp/koenkai/

▲東北大学川内北キャンパス周辺地図

一般社団法人日本地質学会　〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F
TEL 03-5823-1150　FAX 03-5823-1156　E-mail main@geosociety.jp　Web http://www.geosociety.jp/

日本地質学会*News*

Vol.16 No.7 July 2013

The Geological Society of Japan *News*
一般社団法人日本地質学会
〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15　井桁ビル ６Ｆ
編集委員長　内藤一樹
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

仙台大会ニュース ……2
事前参加登録受付中です！/講演内容のプレス発表を予定しています/緊急展示の申込のついて

第４・５回津波堆積物ワークショップのお知らせ ……2

一般社団法人日本地質学会2013年度総会記事
総会議事録/選挙規則の改正およびそれに伴う選挙細則の改正/2012年度事業経過報告/会計書類/2013年度事業計画基本方針/2013年度50年会員顕彰者/2013年度各賞受賞理由 ……3

ご案内 ……18
日本水環境学会第22回市民セミナー/第３回学生のヒマラヤ野外実習ツアー参加者募集/第６回国際レルゾライト会議/ IGCP608「白亜紀アジア－西太平洋生態系」の第１回国際研究集会2nd Circular配付のお知らせ/地球にわくわく小・中学生自由研究コンテスト2013/第２回G-EVER国際シンポジウム，第１回IUGS・日本学術会議国際WS

公募 ……19
新潟大学教育研究院自然科学系教員公募/東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻教員の公募/電力中央研究所 地球工学研究所研究職員公募/愛媛大学大学院理工学研究科（理学系）教員公募

各賞・助成 ……20
2013年度「朝日賞」候補者推薦依頼のお知らせ/第35回（平成25年）沖縄研究奨励賞推薦応募/平成25年度東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者推薦

第四紀小委員会，第四紀研究連絡委員会の資料を探しています ……21

紹介 ……22
東日本大震災を分析する　平川　新ほか編著（小嶋　智）

博物館だより ……23
福井県立恐竜博物館：平成25年度特別展　発掘！発見！１億年の時を越えて～福井県恐竜化石発掘25年記念～

TOPIC ……24
鳥が首岬の謎（高山信紀）/福島原発事故に伴う福島県の放射性物質汚染―汚染地域の住民から見た汚染の実態―（その１）（千葉茂樹）

2013年度春季地質の調査研修実施報告（徳橋秀一・辻野　匠）……28

地質の日行事報告 ……30
街中ジオ散歩in Tokyo「石神井川がつくる地形の移り変わりと地質」/北海道支部記念展示「豊平川と共に―その恵みと災い」/近畿支部地球科学講演会「大阪平野の地盤環境と地盤災害」/ 西日本支部市民向けイベント『身近に知る「くまもとの大地」』

支部コーナー ……33
関東支部　第３回関東支部ミニ巡検　房総・三浦研究サミット関連巡検　第１弾『房総半島南東部夷隅地方における正断層群』

院生コーナー ……35
2013年「Project A in 伊豆下田」参加報告（宮本和輝・蓑和雄人）

追悼　鈴木尉元　氏（小玉喜三郎） ……37

CALENDAR ……38

2013年度第１回理事会議事録/2013年度第１回執行理事会議事録/2013年度第２回執行理事会議事録 ……39

会員名簿作成アンケートの実施について ……42

表紙紹介

第４回惑星地球フォトコンテスト入選作品

『1934-35昭和硫黄島』

写真　**池上郁彦**（福岡県）

【撮影場所】鹿児島県三島村薩摩硫黄島．穴之浜海岸より
【撮影者より】鹿児島県三島村にある昭和硫黄島は1934年末から35年にかけて起こった海底噴火により形成された新島である．比高300mの山体は鬼界カルデラの内輪に位置し，その活動は過去100年の日本における最大の火山活動であった．当時海は白煙を上げる軽石で埋め尽くされたと言われるが，現在その痕跡が認められるのは薩摩硫黄島の対岸部に限られる．写真で薩摩硫黄島特有の変色した海の向こうに見えているのが昭和硫黄島である．丸くなった軽石は噴火から70年以上の歳月が経ったことを物語るが，個々の軽石の変色とその背後に広がる赤く染まった海は，この地域が変わらず活動的なカルデラ火山の一部であることを意味している．
【講評】昭和硫黄島は，活発に噴火活動を続ける薩摩硫黄島の東２kmにある新島です．遠景が1934～35年でできた新島，手前はその時の噴火で流れ着いた軽石です．非常にわかりやすい写真で，撮影地の昭和硫黄島は鹿児島港から４時間ですから行きたくなってきます．（審査委員長）

事務局営業カレンダー　お休み

7月 July

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

8月 August

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

※8/14-16：事務局夏期休業

印刷・製本：日本印刷株式会社　東京都文京区湯島３－20－12

事前参加登録受付中です！

＜事前参加登録＞
締切：８月20日（火）17時（郵送８月16日（金）必着）
※巡検のみ締切が異なります
締切：８月９日（金）17時（郵送８月７日（水）必着）
（注意）本年の巡検は，旅行社を通じての手配のため，申込受付の延長は一切行えません。お早めにお申込下さい．

仙台大会HPはこちら
http://www.geosociety.jp/sendai/content0001.html

講演内容のプレス発表を予定しています

７月19日締切：プレス発表の推薦募集
８月：行事委員会・広報委員会で選定
９月初旬：プレス発表（記者会見）

緊急展示の申込について

緊急かつホットなテーマについて議論する場を提供するために，災害調査報告や速報性の高い新技術・成果紹介などの「緊急展示コーナー」を設けます．**ポスター展示を希望する方は，８月30日（金）までに**次の内容を下記申込先にご連絡ください．

１）発表要旨PDF（ニュース誌5月号参照）　２）緊急展示の必要性　３）発表代表者と連絡先　４）希望枚数（１枚：幅90×180cm）　５）展示に関わる要望（２～５の様式は自由）
実行委員会は行事委員会と協議し，可否の判断を致します．希望にはできるだけ応えるようにしますが，展示方法等については実行委員会の指示に従ってください．

申込先：<main@geosociety.jp>
担当：鈴木紀毅（仙台大会実行委員会）・須藤　宏（行事委員会）

第４回，第５回津波堆積物ワークショップのお知らせ

日本地質学会，日本堆積学会では，2011年の東日本大震災後の津波堆積物研究への関心の高まりを受けて，過去３回の津波堆積物ワークショップを実施してまいりました．このたび，９月14-16日の日程で開催される日本地質学会学術大会（仙台大会）に前後し，以下の通り２回のワークショップ（第４回および第５回）を開催することになりました．お誘いあわせの上，ぜひ参加を検討して頂ければと思います．

◆第４回津波堆積物ワークショップ（９月14日）

テーマ：「震災前・震災直後―何がわかっていたのか－」（司会：後藤和久，菅原大助）
会場：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア棟M206号
参加費：無料

9：00－9：30　古津波堆積物の調査法（藤野滋弘：筑波大学）
9：30－10：00　貞観津波堆積物研究のレビュー（菅原大助：東北大学）
10：00－10：30　緊急調査の実施内容と課題（西村裕一：北海道大学）
10：30－11：00　津波被災農地の復旧に向けた現地調査（堆積土砂厚と塩分濃度調査）
（佐々木清美：水土里ネットみやぎ）
11：00－12：00　貞観津波堆積物の剥ぎ取り標本などの観察

◆第５回津波堆積物ワークショップ（９月18日）

テーマ「震災から２年半，津波堆積物研究と社会」（司会：菅原大助，後藤和久）
会場：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア棟M206号
参加費：無料

10：00－10：30　陸上堆積物調査で分かったこと（後藤和久：東北大学）
10：30－11：00　津波起源混濁流－発生機構と条件（成瀬元：京都大学）
11：00－11：30　東北地方北部～北海道の太平洋側に来襲しうる津波（高清水康博：新潟大学）
11：30－12：00　東北地方南部～関東地方の太平洋側に来襲しうる津波（行谷佑一：産業技術総合研究所）
12：00－13：00　昼食
13：00－13：30　古地震・古津波研究の将来－社会での役割と学術的深化－（宍倉正展：産業技術総合研究所）
13：30－14：00　工学的視点からみた津波堆積物研究（吉井匠：電力中央研究所）
14：00－14：30　メディアからみた津波堆積物研究～震災を経て何が変わったのか～
（植田和貴：日本放送協会（NHK））
14：30－15：00　総合討論，閉会
休憩
15：15－16：15　津波堆積物の調査方法，分析方法の紹介
１．定方位不攪乱試料採取法：高清水康博（新潟大学）
２．調査地選定法：藤野滋弘（筑波大学）
３．陸上掘削法・剥ぎ取り法：菅原大助（東北大学）

参加申込方法：以下の地質学会ホームページの専用申し込みフォームからお申し込みください．
http://www.photo.geosociety.jp/tsunami_ws.hyml
申込締切：８月30日（金）17：00

一般社団法人日本地質学会2013年度総会記事

2013年度総会議事録

以下のとおり，2013年度定時社員総会を開催した．

日時　2013年５月18日（土）12：30－14：05
会場　北とぴあ　第２研修室（東京都北区王子１-１）

総会開始にあたり，議長・副議長，書記として本日出席代議員から以下の方々を選出した．
議長：大友幸子，副議長：西岡芳晴，書記：針金由美子・細井　淳
議長は本日の出席者数を確認し，総会定足数 67名をこえる出席者があるので成立している旨宣言し，議事に入った．

代議員（＝社員）総数　133名
　議決権総数　133個
出席者数（委任状，議決権行使者含む）
　105名　　この議決権総数　105個
出席役員　代表理事（会長）：石渡　明
　理事：ウォリス サイモン（副会長）
　渡部芳夫（副会長）　天野一男　安藤寿男　市川八州夫　井龍康文　永広昌之　小山内康人　笠間友博　狩野彰宏　川端清司　川辺文久　清川昌一　斎藤眞　坂口有人　佐々木和彦　柴　正博　高木秀雄　高橋正樹　竹内　誠　田村嘉之　内藤一樹　中澤　努　西　弘嗣　久田健一郎　平田大二　星　博幸　松田達生　松田博貴　向山　栄　山田泰広　山本高司
監事：青野道夫　以上
理事33名，監事１名

１号議案　2012年度事業報告
齋藤常務理事から資料にもとづき2012年度の事業報告があり，本年度の学術大会（東北大会）から巡検全般を旅行業者に委託すること，Island Arcの名称は変更しない方向で決まったことなど重要と思われることについて説明が付された．
また，2012年度内および総会開催の本日までに逝去された会員13名（うち名誉会員４名）に対し，黙祷を捧げた．本議案についてはとくに質疑応答はなく，全会一致で本議案は承認された．

２号議案　2012年度決算報告
会計担当の西理事から報告と説明があった．決算額は予算額より収支共に増額したこと，前年度より大きく収支が異なる内容について説明された．
続いて，青野監事より，2011年度の会計については，適切に処理されていることを確認した旨の会計監査報告があった．本議案についての質疑応答は以下のようであった．
2012年度の決算額がわずかにマイナスになっていることについて質問があり，現状では誤差の範囲と見なしており，会計上は問題ないとの説明がなされた．出版費に関する質問（予算超過）に対して，地質学雑誌の震災関係特集号印刷のためであることが説明された．また，資産管理のリスク分散について質問があり，今後検討を要するとの応えがあった．質疑応答の後，全会一致で本議案は承認された．

３号議案　選挙規則の改正
齋藤常務理事より，選挙規則の改正についての概要および，それに伴う選挙細則の改正点について説明された．本議案については全会一致で承認された．

４号議案　2013年度事業計画
齋藤常務理事より，2012年度の本学会の事業成果について説明があり，それらを踏まえた2013年度の事業計画の方針が示された．本議案について特に質疑応答はなく，本議案は全会一致で承認された．

５号議案　2013年度予算案
西理事より2013年度の予算案について説明された．この内，総目録刊行引当金について，既に目録の刊行は行わないことが決まっていることから，同引当金を「125周年記念事業引当金」とする名目変更が提案された．名目変更が承認された場合は，予算案の収入科目「総目録刊行引当金繰入収入」を「125周年記念事業引当金繰入収入」とする．

質疑応答ではバックナンバーの売上について在庫管理と経理上の扱いについて質問があり，会計委員の佐々木理事より毎年在庫分は計上しておらず，売れた分だけ収入として計上しているとの説明があった．引当金の名目変更を含む予算案についての本議案は，全会一致で承認された．

以上をもって審議を終了し，議長は閉会を宣言した．

2013年５月18日

以上，決議を明確にするためこの議事録を作成し，議長，副議長および出席理事がこれに記名，押印する．

一般社団法人日本地質学会2013年度総会
総会議長　　大友幸子
総会副議長　西岡芳晴
代表理事　　石渡　明
理　　事　　齋藤　眞

選挙規則の改正および それに伴う選挙細則の改正

【改正の概要】
・地方支部区選出理事は，各地方支部区選出の代議員で理事に立候補した者のうちから各支部の代議員の投票で決める．
・地方支部区選出理事は，理事のいない支部をなくすという趣旨で，各１名のままとする．
・選挙規則５条３項・４項，６条１項・２項の改正，新７条の追加，現７条は繰り下げ８条とする．選挙細則13条の改正．

《選挙規則現行》
（役員選挙）
第５条３　理事の定員のうち，各代議員地方支部区から，代議員選挙得票数上位１名を地方支部区選出理事とする．
第５条４　理事候補者はその年度に選出された全国区代議員とし，候補者は別途定める選挙細則に則り，参考事項を記した候補者届けを所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．
（無投票選挙の指定）
第６条　代議員の選挙にあたり，立候補者数が定数を超えない場合でも選挙を実施し，投票は行うものとする．
　２　役員選挙にあたり，立候補者数が定数を超えない場合には無投票当選とする．
（選挙実施細目）
第７条　定款ならびに本規則に定められたもの以外の，選挙の実施手続き等において

は別途定める選挙細則および選挙管理委員会規則によるものとする．

《選挙規則改正》

（役員選挙）

第５条３　理事50名の選出は，各地方支部区代議員の中からそれぞれ１名を支部区代表理事として選出し，それらを除く数を全国区代議員から選出する．

第５条４　理事立候補者は別途定める選挙細則に則り，参考事項を記した立候補届けを所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．

（無投票選挙の指定）

第６条　代議員および役員選挙において，立候補者数が定数を超えない場合には，無投票当選とする．

（得票数同数の取り扱い）

第７条　代議員および役員選挙において，得票数が同数で順位をつける必要がある場合は，くじ引きにより順位を決める．くじ引きの方法は，当該の選挙管理委員会が定めるものとする．

（選挙実施細目）

第８条　定款ならびに本規則に定められたもの以外の・・・・以下略

《選挙細則現行》

（理事の立候補届）

13条　理事の選挙は，理事の定数50名から選挙規則第５条第３項に定める地方支部選出理事を除いた数を，全国区の代議員から選出するものとする．

《選挙細則改正》

（理事の立候補届）

13条　理事選挙は，地方支部区選出理事の場合，被選挙人は当該支部区選出代議員の立候補者とし，選挙人は当該支部区選出の代議員とする．全国区理事の被選挙人は全国区選出代議員の立候補者とし，選挙人は，地方支部区ならびに全国区選出の全代議員とする．

以上

2012年度事業経過報告

※本報告の氏名の敬称は省略しています．

１．報告事項

１）会員の動静

2013年4月末現在の会員は，賛助会員26社，名誉会員69名，正会員3781名（うち院生割引98名，学部割引1名），会員総数3876名，2012年４月末と比べて108名の減少であり，その内訳は次のとおりである．

入会者 135（賛助　１社，正会員 134名〔うち院生割引 89名，学部割引 ８名〕）

退会者 134（賛助　１社，正会員 133名〔うち院生割引 12名，学部割引 ０名〕）

除籍者 97（正会員 97名）

逝去者 12（名誉会員 ４名，正会員 ８名）

名誉会員：橋本光男（2012/８/16），飯山敏道（９/15），森本良平（11/19），増田孝一郎（2013/１/８）

正会員：有田忠雄（2008/11/25），黄敦友（2010/12/８），熊崎憲次（2012/５/２），福田登志郎（５/４），河野通弘（９/11），遠藤秀正（11/29），三谷　豊（12/５），樽良平（2013/２/27）

２）学会運営に関する諸集会及び委員会等の活動

＜2012年度定時総会＞

日時：2012年５月19日　14:30 ～16:00

会場：北とぴあ　第２研修室

議決権のある社員総数 125名（定足数：63名），議決権の数 125個

出席社員数（委任状および議決権行使書提出者を含む）89名，

議決権の総数 89個，出席理事 32名，出席監事 ２名

審議事項：1）2011年度理事会報告，2）2011年度事業・決算報告，3）定款改正，4）役員辞任，5）代議員および理事・監事選挙報告，6）2012年度事業計画，7）2012年度予算案，8）名誉会員の選出

いずれの議案も承認された．

＜委員会等の開催＞

・執行理事会（11回）議事内容，報告等については，随時HP，ニュース誌に掲載

・理事会（４回）議事内容，報告等については，随時HP，ニュース誌に掲載

・その他委員会（メールによる会議を含め，随時開催）

３）学会の行事・事業

１．日本地質学会第119年学術大会

会期：2012年９月15日～17日

会場：大阪府立大学

参加者：852名（会員713名，非会員139名）

・一般発表：532件（口頭312件，ポスター220件）

・公開シンポジウム：２件（15講演）

・国際ワークショップ：10件（口頭８件，ポスター２件）

・アウトリーチセッション：ポスター11件

・優秀ポスター賞の授与：８件（ポスター発表のみ）

・見学旅行：実施９コース（悪天候のため１コース中止）

・ランチョン：専門部会を中心に８件

・夜間小集会：９件

・就職支援プログラム：2012年９月16日参加企業・団体：８社

＜日本地質学会各賞の授与式・記念講演会＞

日時：９月15日（土），会場：大阪府立大学中百舌鳥キャンパスUホール白鷺

・来賓挨拶　兪　剛民（大韓地質学会会長），奥野武俊（大阪府立大学学長）

一般社団法人日本地質学会2013年度総会

・日本地質学会小澤儀明賞受賞スピーチ　山本伸次（東京大学）「とことんやってみる－変態科学と私－」

・日本地質学会賞受賞記念講演　木村　学（東京大学）「地質学の自然観」

＜年会関連行事＞

・地質情報展2012おおさか―過去から学ぼう大地のしくみ― 2012年９月15日～17日．参加者：4,681名

・市民講演会「地震・津波・地盤災害～知ること，伝えること～」2012年９月16日．参加者：270名．講師：金田義行，飯尾能久，三田村宗樹

・震災復旧・復興プラン（2011年度公募）ポスター発表会：2012年９月15日～17日．展示ポスター６件（各日，２件ずつ掲示）

・地学教育委員会

小さなEarth Scientistのつどい～第10回小・中・高校生徒地学研究発表会：2012年９月16日，参加校13校，16件，優秀賞４件，奨励賞３件を授与．

理科・地学教科書展示解説（ポスター会場にて展示）

第11回理科教員対象見学旅行：2012年９月17日，「J班：大阪の津波碑と地盤沈下対策」案内者：三田村宗樹

２．地質の日　本部イベント

・街中ジオ散歩in Tokyo「身近な地層や岩石を知ろう」徒歩見学会：2012年５月13日，参加者32名．共催：一般社団法人日本応用地質学会，見学コース：東京都千代田区界隈（丸の内，日比谷，三宅坂，永田町，一番町），案内者：中山俊雄，奥村興平

・第３回惑星地球フォトコンテストの講評・表彰式：2012年５月19日，北とぴあ，講師：白尾元理

・惑星地球フォトコンテスト入賞作品展示

第２回（2011年）入賞作品展示：４月28日～５月13日，共催：東海大学自然史博物館

第３回（2012年）入賞作品展示：４月21日～６月３日，共催：千葉県立中央博物館

３．地質の調査研修

・研修地域「千葉県君津市と房総半島中部域」：2012年10月29日～11月２日，参加者６名．後援：産業技術総合研究所地質調査総合センター，協力：日本地質学会関東支部．講師：徳橋秀一，中島　礼（産業技術総合研究所）．

４）出版物の刊行

＜地質学雑誌＞

・118巻４号（2012年４月）～119巻３号（2013年３月）を刊行した．総ページ数は860ページ．

・地質学雑誌補遺（８月号に同封）：大阪大会見学旅行案内書CD-ROM版

＜日本地質学会ニュース＞

・15巻４号（2012年４月）～16巻３号（2013

年３月）を発行した．総ページ数は379ページ．

＜Island Arc＞

・Island Arc編集委員会の編集により，Wiley社よりVol.21, Issue 2 ～Issue 4，Vol.22, Issue 1を刊行した．総ページ数は436ページ．

＜ジオルジュ＞

・創刊号（2012年５月），後期号（11月）を発行した．

＜その他＞

・フィールドジオロジーシリーズ（共立出版）：８巻「火成作用」，９巻「第四紀」，2012年９月に刊行され，シリーズは完結した．

５）関連外部委員会への協力

下記の関連外部委員会等に対して本学会から選出された委員を通じて，これまでに引き続きそれぞれの活動，関連学会の発展と連携に協力した．

日本地球惑星科学連合：評議員（石渡明），連絡委員（西　弘嗣），プログラム委員（大坪誠，星　博幸），キャリアパス支援小委員会委員（佐々木和彦），環境・災害対応委員会-災害の委員（横山俊治），環境・災害対応委員会-環境の委員（小荒井衛），学術出版委員会委員（井龍康文），教育問題検討委員会（矢島道子，芝川明義，中井睦美，渡邉正人），地質科学関連学協会連合（天野一男），自然史学会連合（斎木健一），土質・地質技術者生涯学習協議会（CPD，吉田孝紀），日本技術者教育認定機構（JABEE，天野一男），地質の日事業推進委員会（委員，中澤　努），原子力総合シンポジウム（運営委員，高橋正樹），アイソトープ・放射線研究発表会運営委員会（運営委員，山口耕生），富士学会：富士山科学看板設置調整委員会（専門委員，高橋正樹），日本ジオパーク委員会（委員高木秀雄），地質図に関するJISの原案作成委員会（産総研）（学会委員，斎藤靖二），（NPO）地学オリンピック日本委員会広報小委員会（坂口有人），地質地盤情報活用協議会（委員，小嶋　智）など．

６）その他報告事項（主に他学協会との共催・後援，協賛行事など，そのほかはNews誌，HPに掲載の執行理事会議事録，理事会議事録参照）

＜他学協会などからの依頼＞

・朝永振一郎記念第７回「科学の芽」賞（筑波大学）の後援．

・三浦半島活断層調査会，地質の日記念観察会「深海から生まれた城ヶ島」（2012年５/12日）の後援．

・近畿地方環境事務所，第５回地質の日フィールドワーク「熊野のジオサイト　潮岬のジオ散歩」の後援．

・「地質情報展2012おおさか」：産業技術総合研究所，大阪市立自然史博物館との共催．

・日本科学技術財団，青少年のための科学の祭典2012（2012年５/12-2013年３/31日）への協賛．

・岡山理科大学地球惑星環境研究センター（担当応用物理学科：豊田　新），国際会議「3rd Asia PacificConference on Luminescence and Electron Spin Resonance dating : including non-datingapplications of Luminescence and ESR」への協賛．

・日本原子力学会，「原子力総合シンポジウム2012」の共催．

・国際火山学地球内部化学協会2013年学術総会「IAVCEI2013 Scientific Assembly」（2013年７月，鹿児島）の後援．

・第28回 ゼオライト研究発表会（2012年11/29-30日）への協賛．

・日本第四紀学会2012年大会テーマセッション「テフラ・年代測定」（2012年８/20-21日，立正大）の共催．

・日本地球化学会，2012年度年会（2012年９/11-13日，九州大学）の共催．

・新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館企画展示「佐渡の海洋生物展」（2012/７/14-8/31）の後援．

・埼玉県高等学校理化研究会野外巡検研修会「宮城県仙台市周辺」（2012年８/９-10日）の後援．

・第10回高校生科学技術チャレンジJSEC 2012の後援（2012年４/１-2013年３/31日）．

・科学教育研究協議会，第59回全国研究大会（2012年８/３-５日，鳥取県米子市）の後援．

・蒲郡市生命の海科学館，地質学会の惑星地球フォトコンテスト入賞作品展開催の共催（2012年９/29-11/４日）．第１回～３回までの入賞作品の貸出し依頼も承諾．

・第38回リモートセンシングシンポジウム（2012年11/２日）への協賛．

・第６回地殻応力国際シンポジウム，RS 2013の後援．

・「津波堆積物ワークショップ」堆積学会と共催（2012年10/６-８日，三重，和歌山地域）．

・土壌環境センター，日刊工業新聞より，2012土壌・地下水環境展（2012年10/17-19日）への協賛．

・第３回日本ジオパーク室戸大会組織委員会（2012年11/２-11/５日）の後援．

・ひょうご恐竜化石国際シンポジウム実行委員会，国際シンポジウム「白亜紀前期の恐竜研究最前線」ほか関連行事（2013年３月16日-17日）の後援．

・21世紀の地学教育を考えるフォーラム実行委員会，第13回子供のためのジオカーニバル（2012年11/13-14日，大阪市立科学館）の後援．

・三浦半島活断層調査会（会長：茅野教幸），第２回城ヶ島観察会「深海から生まれた城ヶ島」（2012年11/４日）の後援．

・アイソトープ協会，「第50回アイソトープ研究発表会」（2013年７月開催予定）の共催．

・日本堆積学会，台湾地質学会主催，「Western Pacific Sedimentology Meeting［2013年西太平洋堆積学会議（2013 WPSM）］（2013年５/13-14日，Longtan Aspire Resort, Taoyuan, northern Taiwan）の共催．

・地質汚染－医療地質－社会地質学会主催「第22回環境地質学シンポジウム」（2012年12/７-８日，産業技術総合研究所共用講堂）に対し，環境地質部会が共催．

・日本学術会議主催，学術フォーラム「自然災害国際ネットワークの構築にむけて：固体地球科学と市民との対話（2013年２/１日，日本学術会議講堂）の後援．

・「変成岩などシンポジウム」（世話人：竹下徹，2013年３/15-17日，北海道定山渓温泉ホテル鹿の湯）に対し，岩石部会が後援．

・「2012年度古海洋学シンポジウム」（世話人：西　弘嗣・高嶋礼詩，2013年１/７日，東大大気海洋研究所）に対し，環境変動史部会が後援．

・光記念館企画展「飛騨地方の火山」展（2013年２/27-12/10日）の後援．

・東北大学災害科学国際研究所主催「International Workshop on the 2011 Tohoku-oki tsunami deposits」（2013年３/18日）の共催（津波ワークショップ第３回の位置づけ）．

・東京大学地震研究所主催「立川断層メガトレンチ」一般見学会（2013年２/８-９日）に対し，関東支部が後援．

・G-EVER国際シンポジウム（2013年10/19-21日，仙台）の共催．

・海洋研究開発機構「ちきゅう」10年計画国際ワークショップ－ＣＨＩＫＹＵ＋10 International Workshop－（2013年４/21-23日）の後援．

＜他学協会などへ依頼＞

・第120年学術大会（2013年９/14-17開催予定）について，東北大学災害科学国際研究所，理学研究科，東北アジア研究センター，学術資源研究公開センターあて共催を依頼し承諾された．

・「2013年度春季地質の調査研修」（2013年５/27-31日実施予定，講師：徳橋秀一・辻野　匠（産総研））について，産業技術総合研究所あて共催を依頼し承諾された．

７）支部の活動

＜北海道支部＞

１．2012年度「地質の日」記念展示（2012年４月24日～5月27日）

・北海道大学総合博物館企画展示「私たちの生活を支える金属鉱床―札幌周辺の鉱山を例に―」．北海道大学総合博物館・日本地質学会北海道支部・（地独）北海道立総合研究機構地質研究所・（独）産総研地質調査総合センター・札幌市博物館活動センター・北海道地質調査業協会との共催，豊羽鉱山株式会社・地図と鉱石の山の手博物館・札幌市立手稲西小学校などの協力．

・定山渓温泉・豊羽鉱山周辺の地質巡検（４月30日），豊羽鉱山株式会社　協力．

参加者45名.
・土曜市民セミナー：「私たちの生活を支える金属資源：マグマからの贈り物」（5月12日），講師：渡辺　寧（産総研），北海道大学総合博物館.
2．北海道支部総会・招待講演会（2013年2月16日）於北海道大学理学部
・総会（14:30-15:30）出席者24名，委任状6名，計30名
・招待講演会：「北海道白亜系研究の最前線」（16:00-18:00），講演者：安藤寿男（茨城大学理学部），中村英人（北海道大学理学研究院），参加者38名.
※支部総会と支部例会（個人講演会）を分けて開催．支部例会は2013年4月27日に開催.
3．北海道地質百選検討
・ウェブ運用：公開済みジオサイト数は387カ所（2013年2月1日現在）に達した．豊平川，札幌西方の山々，積丹，礼文島，支笏カルデラの5ヶ所のオンライン北海道ジオパーク（OHG）を公開中.
・「北海道地質百選（仮称）」の出版：2012年8月に北大出版会と打ち合わせを行い，2014年出版を目指して準備.「北海道地質百選（仮称）」出版編集委員会を立ち上げた.
4．ジオパーク支援活動
・洞爺湖有珠山をはじめ，道内ジオパークからの要望へ対応（技術的部分，再審査対応，ユネスコイニシアティブ化に向けた準備）.
・三笠など2013年度に日本ジオパークネットワーク（JGN）加盟申請を予定している地域への情報提供とアドバイス.
＜東北支部＞
1．東北支部活動報告
2．東北支部幹事県は福島大学から山形大学に移行した.
3．2013年9月の仙台大会に向けて，東北大学を中心に，東北支部メンバーも加わって準備を開始.
4．2013年度末に総会，個人講演会を山形で開催することとした.
＜関東支部＞
1．地質技術伝承講演会（4月8日，会場：北とぴあ）
「地形情報から見た地質の理解」（講師：古谷尊彦，（株）日さく顧問）共催：関東地質調査業協会 参加者：71名
2．地質見学会
・銚子巡検（10月27日，28日）参加者：25名，案内者：高橋雅紀（産総研），鈴木毅彦（首都大）
・第一回ミニ巡検　御坂・櫛形山地黒鉱（10月6日，7日）参加者：9名，案内者：浦辺徹郎（東大）
・第二回ミニ巡検　八ッ場ダム（12月1日，2日）参加者：8名，案内者：中村庄八
・立川断層トレンチ見学会（1月26日）参加者：34名，案内者：石山達也（東大地震研）
3．シンポジウム
第一回地質研究サミット　房総三浦地質研究サミット（3月9日，10日）参加者：211名
共催：千葉県立立中央博物館，協力：横須賀市立自然人文博物館
4．支部活動
・支部総会（4月13日，会場：北とぴあ）：活動報告，会計報告，活動計画，予算案
・支部功労賞授与（1団体・3個人）：下仁田自然学校，加瀬靖之，神戸信和，松島義章
・幹事会：10回開催（1回/月程度）
・2016年大会会場
・フィールド教育見学：東大・千葉大清澄実習（8月31日），地質調査研修会（10月30日，31日）
・立川断層トレンチ一般公開支援（2月8日，9日）
・新規事業の模索：首都高速大橋ジャンクション視察（9月4日），那須野が原博物館視察（1月29日）
＜中部支部＞
1．地質の日イベント（6月3日，地質の日サイエンスファスティバル in 五十嵐キャンパス，新潟大学）
2．中部支部総会（6月16日，岐阜大学，参加者17名，委任状45名）
3．シンポジウム「中部地方の活断層に関わる最新の知見」（6月16日，岐阜大学，参加者38名）
4．個人講演（ポスター）（6月16日，岐阜大学）
5．地質見学会「根尾谷断層にかかわる新知見」（6月17日，案内者：金田平太郎，大谷具幸，小井戸由光，参加者20名）
＜近畿支部＞
1．2012年度支部体制
支部長：宮田隆夫（神戸大学），代表幹事：奥平敬元（大阪市大），行事：小林文夫（兵庫県立人と自然の博物館），会計：大串健一（神戸大学），庶務：竹村静夫（兵庫教育大学），幹事：里口保文（滋賀県立博物館），和田穣隆（奈良教育大学），田中里志（京都教育大学），三田村宗樹（大阪市大），此松昌彦（和歌山大学）
2．行事報告
・地質の日イベント
第29回地球科学講演会「恐竜研究の最前線」（2012年5月13日（日），場所大阪市立自然史博物館講堂，講師：柴田正輝（福井県立恐竜博物館研究員）），主催：地球団体研究会大阪支部，日本地質学会近畿支部，大阪市立自然史博物館
・日本地質学会第119年学術大会（2012年9月15日（土）～17日（月），大阪府立大学中百舌鳥キャンパス）および巡検（9月14日（金），9月17日（月）～19日（水））
＜四国支部＞
1．2012年度支部体制
支部長：臼井　朗，幹事：榊原正幸（事務局長），村田明広，西山賢一，寺林　優，近藤康生，奈良正和，佐野　栄
2．行事報告
・後援：讃岐ジオパークをめざすシンポジウム（2012年3月3日（土）），場所：高松テルサ大会議室
・第12回日本地質学会四国支部総会・講演会（2012年12月15日（土）），場所：愛媛大学理学部講義棟1階S11講義室，講演件数：口頭発表13件，ポスター発表11件
＜西日本支部＞
1．2012年度の支部体制
支部長：小林哲夫，幹事：早坂康隆・Hafiz ur Rehman・磯部博志・酒井哲弥・永尾隆志・石原与四郎・清川昌一・太田泰弘・木戸道男・福田泰英・宮本知治（事務局・庶務），監事：中野伸彦
2．行事報告
・第163回西日本支部例会・2012年度総会
日時：平成25年2月23日（土），場所：島根大学総合理工学部（松江キャンパス）
講演件数：口頭講演 20件，ポスター発表4件
・後援行事等『2012年「地質の日」くまもと』企画，日時：平成24年5月26日（土）

2．執行理事会および理事会議決・承認事項
1）理事会議長・副議長の選出.
議長：安藤寿男，副議長：松田博貴
2）会長および副会長の選出
会長：代表理事　石渡　明
副会長（2名）：ウォリス サイモン（名誉会員推薦委員会担当），渡部芳夫（支部長連絡会担当）
3）執行理事15名の選出．その他オブザーバなど.
常務理事：斎藤　眞，副常務理事：坂口有人
運営財政部会：部会長　西　弘嗣（会計担当），山本高司（会員担当）
広報部会：部会長　内藤一樹，松田達生
学術研究部会：部会長　井龍康文（国際担当），星　博幸（行事担当）
編集出版部会：部会長　山路　敦（地質学雑誌担当），伊藤　慎（Island Arc担当），山口耕生（企画出版担当）
社会貢献部会：部会長　高木秀雄（ジオパーク担当），平田大二（生涯教育担当），中澤　努，保柳康一（連携事業担当）
その他　125周年事業担当：矢島道子，地学教育担当：中井均（～2012/9月まで），三次徳二（2012/10月～）
4）各賞選考委員会委員の選出．任期2年.
・理事の互選（10名）：星　博幸，清川昌一，向山　栄，竹下　徹（委員長），村田明広，西　弘嗣，川辺文久，永広昌之，川端清司，田村嘉之，
・役職指定委員（7名）：（前・現地質学雑誌編集長・副編集長）小嶋　智，岩森　光，

山路　敦，（前・現Island Arc編集長）井龍康文，前川寛和，伊藤　慎，海野　進．

5）レギュラーセッション，トピックセッションと並ぶ，アウトリーチセッション「名称：日本地質学会アウトリーチセッション（市民向けポスター展示会）」の新設を承認．

6）特集号早期公開原稿の非会員著者への対応：特集号掲載論文は，受理後直ちに学会HP会員ページで会員に対しPDFを早期公開している．非会員著者は会員ページにアクセスできないので，寄稿していただいた論文のみ，早期公開のタイミングにあわせて，PDFファイルを著者に無償提供することを了承．

7）国際地学オリンピック委員会より，国内大会の問題作成が委嘱され，問題作成者は地学オリンピック支援委員会に一任した．

8）来年度の巡検から旅行業者に委託することに関して，最小遂行人数や経費等の詳細を行事委員会と会計にて検討することを了承．

9）日本地球惑星科学連合の新ジャーナル発行のための編集委員会委員ならびに編集運営会議委員として，井龍康文（編集委員），ウォリス サイモン（運営会議委員）を推薦．

10）Island Arc誌の完全オンライン化とともに誌名の変更を了承．来年5月の総会までに共同運営他学会との協議および規則変更手続きを進める．

11）今年度の震災復興事業プランとして1件を採択した．

川辺孝幸ほか：仙台平野海岸部における津波被害と液状化被害の識別

12）地質学会謝金細則ならびに国内旅費細則の一部改正を了承．

対象を受託研究に限定していた〔日本地質学会受託研究謝金規則〕を，他事業の謝金・旅費も対象になるよう，規則名称および文言を一部改正．

一般社団法人日本地質学会受託研究謝金細則 → 一般社団法人日本地質学会謝金細則 に変更

一般社団法人日本地質学会受託研究国内旅費細則 → 一般社団法人日本地質学会国内旅費細則 に変更

※国内旅費細則の条文修正箇所は次の通り．

（目的）第1条　一般社団法人日本地質学会（以下「学会」という．）が実施する調査研究，研修，講演会等（以下「業務」という．）に伴い，当該業務の担当者および協力者が国内を旅行する場合の国内旅費の支払い基準を定めるものである．

（適用の範囲）第3条　旅費の支払いはとくに発注者の定めるものによる場合を除き，この規定による．

（日当・宿泊費）第5条　日当および宿泊費は，別表―1に定める額を基準額として実費を支給する．ただし，宿泊費は，学会が業務上必要と認める場合のみ支給することができる．

13）理事会の下に「名誉会員のあり方の検討WG（仮称）」を設置することを了承．WGメンバーを選出した．WGメンバー：ウォリス サイモン，伊藤谷生，佐々木和彦，久田健一郎の各理事

14）理事会の下に「財政及びシニア会員制度の検討WG（仮称）」を設置し，人選は財務担当理事に一任．

15）環境変動史部会の設立について：学術研究部会より黒田潤一郎を部会長とする「環境変動史部会」の設立提案があり，了承した．2012年10月1日から活動を開始し，2013年学術大会にてセッションを設ける．

16）編集出版規則のC章3項では査読後の再提出期限を3ヶ月としているが，より厳密に90日とすることを了承．

C．原稿の審査と採否

3．編集委員会は投稿原稿について，著者に修正を求めることがある．修正を求めた原稿が90日以上たって編集委員会に返ってきたときは新規投稿としてとりあつかう．

17）野外調査安全指針　附記1）の文言「見学旅行」を「巡検」に改正することを了承．

附記1）学術大会，支部等における巡検の実施についても，当指針を援用して-----（略）----．

18）大韓地質学会との学術交流協定を更新した．

19）JSTの事業区分および搭載基準の変更などにより，一部の「口絵」，110巻1号（04年1月）～118巻9号（12年9月）が公開されていないことが判明した．口絵も掲載論文であり，欠損期間の口絵全てを公開することとした．公開に必要なデータ処理費用の支出を了承．

20）原子力規制委員会より，原発敷地内の破砕帯調査の調査団員候補者の推薦依頼あり．下記10名の会員を候補として推薦した．調査団メンバーの最終決定は原子力規制委員会による．

粟田泰夫（産総研），石山達也（東大地震研），大谷具幸（岐阜大），岡田篤正（立命館大），佐藤比呂志（東大地震研），重松紀生（産総研），竹内　章（富山大），堤　浩之（京都大），藤本光一郎（学芸大），吉岡敏和（産総研）

21）大学評価学位授与機構にたいし，25年度，26年度実施分機関別認証評価委員会専門委員候補者として，下記の5名を推薦．

石渡　明，ウォリス サイモン，木村学，宮下純夫，渡部芳夫

22）地質の日事業推進委員会の委員に中澤努を選出．

23）IUGSと共催の津波関係国際シンポジウムの開催：2013年10月19日CCOP総会とタイアップしたG-EVER国際シンポジウムに日本地質学会が参加，共催することとした．

24）2012年度名誉会員推薦委員会委員の選出：委員長；ウォリス サイモン

・階層別委員（4名）：大学：竹内　誠（名大），官公庁：栗本史雄（産総研），小中高教員：小尾　靖（相模原青陵高），会社　松浦一樹（（株）ダイヤコンサルタント）

・職責委員（7名）：支部長；竹下　徹，川辺孝幸，伊藤谷生，原山　智，宮田隆夫，石田啓祐，小林哲夫

・理事会推薦委員（1名）：宮下純夫

25）地方支部区理事の選出方法の検討，選挙規則・選挙細則の改正：地方支部区選出理事は代議員選挙地方支部区の最高得点者としていたのを，当該地方支部区選出代議員による選挙とする．また，得票数が同数で，順位付けをする必要がある場合は，くじ引きにより順位を決めることとし，これを選挙規則に明示することとした．関連する選挙規則（第5条3・4項，第6条1・2項，新7条追加，旧7条繰り下げ8条）ならびに選挙細則（13条）の改正を承認．【3号議案】

26）地質学雑誌編集出版規則の規則名称変更：「地質学雑誌編集出版規則」を「地質学雑誌投稿編集出版規則」とする．この変更に伴い，運営規則13条（1）号および（3）号，編集委員会規則3項（1）の同名称も修正する．ほかに同名称を用いている規則類があれば同様とすることを承認．

27）地質学雑誌通常号掲載論文のPDF早期公開については，特集号と同様に学会HP上（会員のページ）で早期公開とすることを承認．

28）2013年度総会開催日程：2013年5月18日（土），北とぴあにて開催することを承認．

29）学術会議報告書「高レベル放射性廃棄物の処分について」に対する地質環境長期安定性研究委員会ほかによるコメントについて内容を審議．会員への周知とプレスリリースをおこなった．

30）イタリア，L'Aquilaの被害地震についての裁判への声明：会員への周知，プレスリリース，現地研究機関へのサポートレターを送付．

31）「福井県おおい町大島の県道法面工事における露頭保全」の要望書提出に関する審議をしたが，提出前に保存が決定された．

32）各賞選考委員会（竹下委員長）は各賞選考検討委員会を設置し，日本地質学会賞，小澤賞・柵山賞選考の諮問をした．

・指定委員：宮下純夫，石渡　明，岩森光，木村　学，小嶋　智，山路　敦，井龍康文，前川寛和（委員長），伊藤　慎，海野　進，執行理事会の推薦者：斎藤文紀．

・Island Arc賞については，Island Arc編集委員会に選考を諮問した．

33）自然史連合による一般向け自然史書籍出版に関する編集委員1名の推薦要請があり，矢島道子を推薦．

34）一般財団法人自然公園財団の依頼により，専門誌「国立公園」（隔月刊，2013年５月号）に，地質学会の国立公園リーフレットシリーズ（たんけんマップ）の紹介記事を執筆した．執筆者：斎藤眞．

35）関連学協会（16団体）に仙台大会の巡検協賛を依頼することとした．

36）豊中市内，上町断層（仏念寺断層）の撓曲露頭の保全及び調査に関する元会員（廣野哲朗）からの要請に対し，学会としては対応可能な範囲で保全活動をサポートすることとした．

37）日本学術会議の提言「地質地盤情報の共有化に向けて」に対し，賛同声明をHPおよびニュース誌に公開した．

38）山田科学振興財団研究助成へ2件の推薦を承認．

39）タイ地質学会との学術交流協定を更新した．

40）国際年代スケールの日本語版を学会HPに公開．

41）全地連より「（仮称）地質地盤情報活用協議会」の設立参加要請があり，参画することとし，委員は小嶋智を推薦した．

42）第４回フォトコンテストの審査結果：最優秀賞１件，優秀賞３件・ジオパーク賞（＊）１件，入選７件を選出した．（＊）ジオパーク地域を対象とした応募が増加のため，優秀賞の枠で「ジオパーク賞」を設けることを選考委員会で了承．

43）仙台大会から，一部トピックセッションのレギュラーセッション化，既存レギュラーセッションの統合（学際的レギュラーセッションの新設）を承認．レギュラーセッションでも他学協会との共催や招待講演（トピックセッションと同じルールを適用すること）を認めることとした．

44）2013年度地質の日イベント：応用地質学会との合同行事，深田地質研究所共催「街中ジオ散歩 in Tokyo―石神井川がつくる地形の移り変わりと地質」（５月12日）を実施．講師：池田　宏．

45）2012年度事業報告案を承認した．【１号議案】

46）2012年度決算案を承認した．【２号議案】

47）本年度は名誉会員候補者の推薦がなかったため，総会への提案はないこととなった．

48）次の17名の会員を50年会員として顕彰することとした．

飯泉　滋，宇井啓高，蛯子貞二，大口健志，小河靖男，小林治朗，近藤　務，戸野　聡，平野英雄，平野昌繁，藤原嘉樹，丸山孝彦，室井　晋，矢内桂三，柳　哮，吉田　勝，米山正次

49）2013年度事業計画および2013年度予算案を承認した．【４号議案，５号議案】

50）各賞選考委員会より提案された下記の各賞受賞者を承認した．（推薦文は１号議案資料２　参照）

・日本地質学会賞（２件）

井龍康文（東北大学大学院理学研究科）
対象研究テーマ：琉球弧の第四紀石灰岩と海洋炭酸塩堆積物の堆積学的・地球化学的研究

乙藤洋一郎（神戸大学大学院理学研究科）
対象研究テーマ：日本列島と大陸の変形を古地磁気学から探る

・日本地質学会小澤儀明賞（１件）

尾上哲治（熊本大学大学院自然科学研究科）
対象研究テーマ：付加体の海洋性岩石を用いた地球環境変動に関する研究

・日本地質学会柵山雅則賞（１件）

岡本　敦（東北大学大学院環境科学研究科）
対象研究テーマ：沈み込み帯における流体移動と水―岩石相互作用に関する岩石学的実験的研究

・日本地質学会 Island Arc 賞（１件）

授賞論文：Hattori Keiko, Wallis Simon, Enami Masaki and Mizukami Tomoyuki, 2010.
Subduction of mantle wedge peridotites: Evidence from the Higashi-akaishi ultramafic body in the Sanbagawa metamorphic belt. Island Arc, 19, 192-207.

・日本地質学会小藤文次郎賞（１件）

森田澄人（産業技術総合研究所）・中嶋　健（同）・花村泰明（JX日鉱日石開発（株））
森田澄人・中嶋　健・花村泰明，2011，海底スランプ堆積層とそれに関わる脱水構造：下北沖陸棚斜面の三次元地震探査データから．地質学雑誌，117，95-98.

・日本地質学会表彰（２件）

岡村　眞（高知大学総合研究センター）
表彰業績：地震・津波研究の新分野開拓と普及教育活動

静岡県袋井市（代表者 市長　原田英之）
表彰業績：地層保全を活かす市民公園の先駆的取り組み

51）中期ビジョンの改定のため，坂口有人を担当とするWGの設置を承認した．

52）125周年事業についての方針を承認し，準備委員会委員長に矢島道子を選出した．

53）地質学雑誌編集委員会規則の改正案と編集委員選出案を承認した．

54）支部独自の表彰を行えるよう，運営規則「第４章支部」（支部の運営）第11条に４項の追加を承認．

４支部は，支部の表彰規則を定め，当該支部区の会員・非会員の個人および団体を表彰することができる．表彰に際しては，学会本部の表彰と重複しないよう考慮する．

55）５月18日開催の総会議案を承認．

収 支 計 算 書

（自 2012年 4 月 1 日 至 2013年 3 月 31 日）

（単位：円）

科　　目	予 算 額	決 算 額	差　異	備　考
Ⅰ. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	20,000	7,190	12,810	
特定資産運用収入	14,000	6,523	7,477	
会費収入	43,970,000	44,740,350	△ 770,350	
事業収入				
出版事業収入	9,130,000	13,601,418	△ 4,471,418	
年会開催事業収入	9,835,000	8,776,632	1,058,368	
普及事業収入	200,000	488,905	△ 288,905	
支部・部会等活動事業収入	270,000	845,550	△ 575,550	
受託事業収入	1,000,000	0	1,000,000	
地質調査研修事業収入	780,000	720,000	60,000	
事業収入計	21,215,000	24,432,505	△ 3,217,505	
補助金・寄付金等収入	1,300,000	1,736,882	△ 436,882	
雑収入	366,000	229,530	136,470	
事業活動収入計	66,885,000	71,152,980	△ 4,267,980	
2. 事業活動支出				
事業費支出				
出版事業費	16,250,000	19,703,620	△ 3,453,620	
年会開催事業費	9,385,000	9,411,541	△ 26,541	
普及事業費	1,340,000	1,204,994	135,006	
支部・部会等活動事業費	1,900,000	1,946,811	△ 46,811	
研究奨励事業費	550,000	456,240	93,760	
特別事業費	1,000,000	299,950	700,050	
受託事業費	710,000	0	710,000	
地質調査研修事業支出	670,000	507,335	162,665	
事業管理費	22,434,000	23,365,919	△ 931,919	
事業費支出計	54,239,000	56,896,410	△ 2,657,410	
管理費支出				
人件費	8,496,000	8,081,101	414,899	
旅費交通費	960,000	735,796	224,204	
事務所賃借料	2,500,000	2,610,373	△ 110,373	
事務諸費	4,350,000	2,892,716	1,457,284	
雑費	750,000	507,569	242,431	
法人税等支出	70,000	70,000	0	
管理費支出計	17,126,000	14,897,555	2,228,445	
事業活動支出計	71,365,000	71,793,965	△ 428,965	
事業活動収支差額額	△ 4,480,000	△ 640,985	△ 3,839,015	
Ⅱ. 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
事業準備引当預金取崩収入	1,500,000	0	1,500,000	
年会開催費引当預金取崩収入	1,000,000	0	1,000,000	
普及書出版引当預金取崩収入	1,200,000	0	1,200,000	
構造地質部会特別引当預金取崩収入	780,000	300,000	480,000	
投資活動収入計	4,480,000	300,000	4,180,000	
2. 投資活動支出				
退職手当引当預金繰入支出	0	2,017	△ 2,017	
年会開催補助費引当預金繰入支出	0	1,222	△ 1,222	
普及書出版引当預金繰入支出	0	235,615	△ 235,615	
総目録刊行引当預金繰入支出	0	527	△ 527	
研究奨励引当預金繰入支出	0	368	△ 368	
投資活動支出計	0	239,749	△ 239,749	
投資活動収支差額	4,480,000	60,251	4,419,749	
Ⅲ. 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
当期収支差額	0	△ 580,734	580,734	
前期繰越収支差額	25,790,228	25,790,228	0	
次期繰越収支差額	25,790,228	25,209,494	580,734	

（注） 1. 各事業ごとの「事業管理費」を、抜き出して一括して表示している。

正味財産増減計算書

（自 2012年 4月 1日　至 2013年 3月 31日）

（単位：円）

科目	当年度	前年度	増減	備考
Ⅰ. 一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
(1)経常収益				
基本財産運用収入	7,190	11,218	△ 4,028	
特定資産運用収入	6,523	11,017	△ 4,494	
会費収入	44,740,350	45,156,850	△ 416,500	
事業収入				
出版事業収入	13,601,418	10,564,605	3,036,813	
年会開催事業収入	8,776,632	10,447,093	△ 1,670,461	
普及事業収入	488,905	242,500	246,405	
支部・部会等活動事業収入	845,550	136,000	709,550	
受託事業収入	0	975,282	△ 975,282	
地質調査研修事業収入	720,000	0	720,000	
事業収入計	24,432,505	22,365,480	2,067,025	
補助金・寄付金等収入	1,736,882	1,991,830	△ 254,948	
雑収入	229,530	506,232	△ 276,702	
経常収益計	71,152,980	70,042,627	1,110,353	
(2)経常費用				
事業費				
出版事業費	19,703,620	19,499,095	204,525	
年会開催事業費	9,411,541	10,421,351	△ 1,009,810	
普及事業費	1,204,994	1,396,170	△ 191,176	
支部・部会等活動事業費	1,946,811	790,474	1,156,337	
研究奨励事業費	456,240	2,060,620	△ 1,604,380	
特別事業費	299,950	1,769,870	△ 1,469,920	
受託事業費	0	706,030	△ 706,030	
地質調査研修事業費	507,335	0	507,335	
事業管理費	23,365,919	20,598,885	2,767,034	
事業費計	56,896,410	57,242,495	△ 346,085	
管理費				
人件費	8,081,101	6,760,054	1,321,047	
旅費交通費	735,796	774,836	△ 39,040	
事務所賃借料	2,610,373	2,629,220	△ 18,847	
事務諸費	2,892,716	4,519,847	△ 1,627,131	
雑費	577,569	482,333	95,236	
管理費計	14,897,555	15,166,290	△ 268,735	
経常費用計	71,793,965	72,408,785	△ 614,820	
当期経常増減額	△ 640,985	△ 2,366,158	1,725,173	
2. 経常外増減の部				
(1)経常外収益				
事業準備引当金取崩額	0	2,700,000	△ 2,700,000	
研究奨励引当金取崩額	0	700,000	△ 700,000	
構造地質部会特別引当金取崩額	300,000	160,000	140,000	
経常外収益計	300,000	3,560,000	△ 3,260,000	
(2)経常外費用				
退職手当引当金繰入額	2,017	3,122	△ 1,105	
年会開催補助費引当金繰入額	1,222	1,467	△ 245	
普及書出版引当金繰入額	235,615	489,353	△ 253,738	
総目録刊行引当金繰入額	527	634	△ 107	
研究奨励引当金繰入額	368	695	△ 327	
経常外費用計	239,749	495,271	△ 255,522	
当期経常外増減額	60,251	3,064,729	△ 3,004,478	
当期一般正味財産増減額	△ 580,734	698,571	△ 1,279,305	
一般正味財産期首残高	57,790,228	57,091,657	698,571	
一般正味財産期末残高	57,209,494	57,790,228	△ 580,734	
Ⅱ. 指定正味財産増減の部				
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
Ⅲ. 正味財産期末残高	57,209,494	57,790,228	△ 580,734	

貸　借　対　照　表

2013年3月31日現在

（単位:円）

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現　金	189,187	153,909	35,278
預　金	57,092,869	56,711,246	381,623
未収金	158,000	2,436,303	△ 2,278,303
立替金	0	1,750	△ 1,750
仮払金	188,561	327,653	△ 139,092
流動資産合計	57,628,617	59,630,861	△ 2,002,244
2．固定資産			
（1）基本財産			
預　金	30,000,000	30,000,000	0
基本財産合計	30,000,000	30,000,000	0
(2) その他の固定資産			
敷金・保証金	2,000,000	2,000,000	0
特定資産	32,547,275	32,607,526	△ 60,251
事業準備引当預金	7,600,000	7,600,000	0
退職手当引当預金	8,667,859	8,665,842	2,017
年会開催補助費引当預金	6,112,496	6,111,274	1,222
普及書出版引当預金	5,200,841	4,965,226	235,615
総目録刊行引当預金	2,640,568	2,640,041	527
研究奨励引当預金	1,845,511	1,845,143	368
構造地質部会特別引当預金	480,000	780,000	△ 300,000
その他の固定資産合計	34,547,275	34,607,526	△ 60,251
固定資産合計	64,547,275	64,607,526	△ 60,251
資産合計	122,175,892	124,238,387	△ 2,062,495
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
預り金	419,623	1,453,228	△ 1,033,605
未払金	0	564,265	△ 564,265
前受金	31,999,500	31,823,140	176,360
流動負債合計	32,419,123	33,840,633	△ 1,421,510
2．固定負債			
引当金			
事業準備引当金	7,600,000	7,600,000	0
退職手当引当金	8,667,859	8,665,842	2,017
年会開催補助費引当金	6,112,496	6,111,274	1,222
普及書出版引当金	5,200,841	4,965,226	235,615
総目録刊行引当金	2,640,568	2,640,041	527
研究奨励引当金	1,845,511	1,845,143	368
構造地質部会特別引当金	480,000	780,000	△ 300,000
固定負債合計	32,547,275	32,607,526	△ 60,251
負債合計	64,966,398	66,448,159	△ 1,481,761
Ⅲ　正味財産の部			
1.　指定正味財産	0	0	0
2.　一般正味財産	57,209,494	57,790,228	△ 580,734
正味財産合計	57,209,494	57,790,228	△ 580,734
負債及び正味財産合計	122,175,892	124,238,387	△ 2,062,495

財　産　目　録

2013年3月31日現在

（単位:円）

科　　目	金　額		
Ⅰ　資産の部			
1. 流動資産			
現金（現金:160,530円、切手28,657円）	189,187		
預貯金	57,092,869		
三井住友銀行神田駅前支店1711424(普通)	29,934,681		
みずほ銀行神田駅前2229416(普通)	17,813,463		
三菱UFJ銀行神田駅前1134781(普通)	698,358		
ゆうちょ銀行振替貯金8-28067	5,201,076		
ゆうちょ銀行62073562(普通)	3,445,291		
未収金(アイランドアーク購読料未収分)	158,000		
立替金	0		
仮払金(労働保険料2012年度概算払い)	188,561		
流動資産合計		57,628,617	
2. 固定資産			
(1)基本財産			
預金（みずほ銀行神田駅前支店(定期)6558120-1,2,5,6)	30,000,000		
基本財産合計	30,000,000		
(2)その他の固定資産			
敷金・保証金(井桁ビル預け)	2,000,000		
特定資産	(32,547,275)		
事業準備引当預金（みずほ銀行神田駅前支店(定期)6558120-9)	7,600,000		
退職手当引当預金（三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期)0022615-1,6,7)	8,667,859		
年会開催補助費引当預金（三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期)0022615-2)	6,112,496		
普及書出版引当預金（三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期)0022615-3,9)	5,200,841		
総目録刊行引当預金（三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期)0022615-4)	2,640,568		
研究奨励引当預金（三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期)0022615-8)	1,845,511		
構造地質部会特別引当預金（みずほ銀行神田駅前支店(定期)6558120-10)	480,000		
その他の固定資産合計	34,547,275		
固定資産合計		64,547,275	
資産合計			122,175,892
Ⅱ　負債の部			
1. 流動負債			
預り金(社保料2カ月分)	419,623		
未払金	0		
前受金(2013年4月以降の会費)	31,999,500		
流動負債合計		32,419,123	
2. 固定負債			
引当金	(32,547,275)		
事業準備引当金	7,600,000		
退職手当引当金	8,667,859		
年会開催補助費引当金	6,112,496		
普及書出版引当金	5,200,841		
総目録刊行引当金	2,640,568		
研究奨励引当金	1,845,511		
構造地質部会特別引当金	480,000		
固定負債合計		32,547,275	
負債合計			64,966,398
正味財産			57,209,494

計算書類に対する注記(2012年度)

1. 重要な会計方針
公益法人会計基準(平成16年10月)を採用している.

1)引当金の計上について
・事業準備引当金:将来的な事業, 前年度未完事業, 会員名簿出版, 大規模災害調査・研究などのために引当.
・年会開催補助費引当金:年会事業収支の余剰金を不足が生じた場合に備え引当.
・退職手当引当金:期末要支給額を見込んで引当.
・普及書出版引当金:地質学会名で出版社から刊行した出版物の著者からの印税寄付金を以後の普及書出版に備え引当.
・総目録刊行費引当金:目録刊行に備えて引当.
・研究奨励引当金:会員の研究奨励のために会員からの寄付金および必要に応じて引当.
・構造地質部会特別引当金:旧構造地質研究会の残余金を暫定的に引当.

2)消費税等の会計処理
税込方式によっている.

2. 基本財産の残高状況は次のとおりである.

(単位円)

科　目	期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
預　金	30,000,000	0	0	30,000,000
合計(基本財産)	30,000,000	0	0	30,000,000

収支計算書に対する注記(2012年度)

1. 資金の範囲について
資金の範囲には現金, 預金, 未収金, 立替金, 仮払金, 預り金, 未払金, 前受金を含める.
期末残高は下記に示すとおりである.

2. 次期繰り越し収支差額の内容は, 次のとおりである.

(単位円)

科　目	前期末残高	当期末残高
現金(切手残高含)	153,909	189,187
預　金	56,711,246	57,092,869
未収金	2,436,303	158,000
立替金	1,750	0
仮払金	327,653	188,561
合　計	59,630,861	57,628,617
預り金	1,453,228	419,623
未払金	564,265	0
前受金	31,823,140	31,999,500
合　計	33,840,633	32,419,123
次期繰越収支差額	25,790,228	25,209,494

2012年度一般社団法人日本地質学会会計監査報告書

一般社団法人日本地質学会
会　長　　石渡　明　　殿

監事　山本正司　印
監事　青野道夫　印

2012年度(2012年4月1日～2013年3月31日)、一般社団法人日本地質学会会計について、諸帳簿、収支決算書、預金通帳および関係書類に基づき監査した結果、その内容が適正かつ経理事務が正確であることを証明します。

1.　監査期日

平成25年　5月15日

2.　監査対象

2012年度一般社団法人日本地質学会会計

収　支　予　算　書

（自　2013年　4月　1日
至　2014年　3月　31日）

（単位：円）

科　　目	予　算　額	前年度予算額	増　減	備　考
Ⅰ. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	10,000	20,000	△ 10,000	
特定資産運用収入	10,000	14,000	△ 4,000	
会費収入	44,020,000	43,970,000	50,000	
事業収入				
出版事業収入	10,050,000	9,130,000	920,000	
年会開催事業収入	9,250,000	9,835,000	△ 585,000	
普及事業収入	600,000	200,000	400,000	
支部・部会等活動事業収入	800,000	270,000	530,000	
受託事業収入	0	1,000,000	△ 1,000,000	
地質調査研修事業収入	1,200,000	780,000	420,000	
事業収入計	21,900,000	21,215,000	685,000	
補助金・寄付金等収入	1,550,000	1,300,000	250,000	
雑収入	240,000	366,000	△ 126,000	
事業活動収入計	67,730,000	66,885,000	845,000	
2. 事業活動支出				
事業費支出				
出版事業費	17,150,000	16,250,000	900,000	
年会開催事業費	9,250,000	9,385,000	△ 135,000	
普及事業費	1,555,000	1,340,000	215,000	
支部・部会等活動事業費	1,760,000	1,900,000	△ 140,000	
研究奨励事業費	600,000	550,000	50,000	
特別事業費	1,000,000	1,000,000	0	
受託事業費	0	710,000	△ 710,000	
地質調査研修事業支出	1,000,000	670,000	330,000	
事業管理費	22,561,000	22,434,000	127,000	注）1
事業費支出計	54,876,000	54,239,000	637,000	
管理費支出				
人件費	8,544,000	8,496,000	48,000	
旅費交通費	900,000	960,000	△ 60,000	
事務所賃借料	2,375,000	2,500,000	△ 125,000	
事務諸費	5,035,000	4,350,000	685,000	
雑費	710,000	750,000	△ 40,000	
法人税等支出	70,000	70,000	0	
管理費支出計	17,634,000	17,126,000	508,000	
事業活動支出計	72,510,000	71,365,000	1,145,000	
事業活動収支差額額	△ 4,780,000	△ 4,480,000	△ 300,000	
Ⅱ. 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
事業準備引当預金取崩収入	1,500,000	1,500,000	0	
年会開催費引当預金取崩収入	1,500,000	1,000,000	500,000	
普及書出版引当預金取崩収入	1,000,000	1,200,000	△ 200,000	
125周年記念事業引当預金取崩収入*	300,000	0	300,000	
構造地質部会特別引当預金取崩収入	480,000	780,000	△ 300,000	
投資活動収入計	4,780,000	4,480,000	300,000	
2. 投資活動支出				
退職手当引当預金繰入支出	0	0	0	
年会開催補助費引当預金繰入支出	0	0	0	
普及書出版引当預金繰入支出	0	0	0	
125周年記念事業引当預金繰入支出	0	0	0	
研究奨励引当預金繰入支出	0	0	0	
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	4,780,000	4,480,000	300,000	
Ⅲ. 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
当期収支差額	0	0	0	
前期繰越収支差額	25,209,494	25,790,228	△ 580,734	
次期繰越収支差額	25,209,494	25,790,228	△ 580,734	

（注）1. 各事業ごとの「事業管理費」を、抜き出して一括して表示している。
＊ 旧総目録刊行引当金の名目変更が総会で承認され，125周年記念事業引当金とする．

2013年度事業計画基本方針

2011年３月11日に発生した東日本大震災は日本社会に深刻な影響を与えた．被災地はいまだ復興途上にあるが，国の政治の混乱もあって再建はなかなか進まない．そのような状況の2012年度にあって，本学会は会員各位と各支部・部会などの努力により，以下に要約するような成果をあげることができた．

東日本大震災に関しては，2012年度事業計画にも震災復興にかかわる事業費を計上し，被災地域の博物館や研究機関への支援，震災に関する研究の促進に取り組んだ．大震災以後の地質学への社会的関心の高まりとともに，福島第一原子力発電所の事故を踏まえて新たに発足した原子力規制委員会から，本学会など関連４学会に対して，全国各地の発電所敷地内の活断層を評価する有識者会議の委員を推薦するよう依頼があり，本学会が推薦した委員は国民注視の中で現地調査などの職務を行っている．また，日本学術会議が出した報告書「高レベル放射性廃棄物の処分について」に対し，応用地質学会と共同で，「これまで我が国が培ってきた処分技術の長期的な継承・改良とその重要性の社会的共有化が重要」とするコメントを公表した．

大阪での学術大会は，「都市から発信する地質学」のテーマのもとに，予想される南海トラフ巨大地震・津波関連の一般公開シンポジウム，市民講演会，市民に向けたアウトリーチセッション（ポスター展示）など，社会的関心に応えるとともに地質学の意義や役割を提起する場となり，本学会が共催する地質情報展も盛況で，悪天候で中止になった巡検があったものの，大会は成功だった．本学会がサポートし英国地質学会が発行する「Geology of Japan」の執筆に向けて，英語での国際ワークショップが行われた．

地質学雑誌は本学会の根幹をなす月刊学術誌であり，今年の第119巻もほぼ順調に発行されている．最近は多彩な特集号や総説が続々と掲載されており，特に３号にわたって組まれた地質学雑誌の東日本大震災特集は幅広い分野からの論文を集め，非常にインパクトのあるものとなった．Island Arcも順調に発行され，2013年１号から完全電子化された（紙媒体廃止）．また，同誌の飛躍的発展をめざして新名称の公募を行い，現在選考中である．

普及活動に関しては，ジオパーク活動がさらに前進し，最初の認定から４年で国内の世界ジオパークは５地域，国内ジオパーク総数は25となり，着実に増加しつつある．2012年５月には第５回ジオパーク国際ユネスコ会議が島原半島ジオパークで開催され，ジオパークの国際化に弾みがついた．３会共催の地震・火山こどもサマースクールも糸魚川ジオパークで開催された．地学オリンピックも参加者が着実に増加しており，今年度も世界大会で金メダルを獲得した．リーフレットの超年代表や電子書籍などの新しい企画が着実に進行している．書籍出版では，フィールドジオロジー・シリーズが完結し，地方地質誌も東北・四国を残すのみとなった．また，地質の日の取り組みや惑星地球フォトコンテストが定着し，「友の会」や若手会員を主な対象とした情報交換サービス（SNS）「ちーとも」の利用が増加しつつある．本学会が一般に販売する広報誌「ジオルジュ」が創刊され，第２号も発行されて，高い評価を得ている地質学的に重要な露頭の保全にも取り組み，法面工事の仕様を変更させるなどの成果があった．

国内の関連業界や社会への対応としては，まず外部から本学会への業務の依頼や委託に対応できる体制が確立し，取り組みが充実しつつある．また，地質情報の共有化に関する学術会議の提言を支持するコメントを発表した．

地学教育に関しては昨年度からの新指導要領実施に伴い，地学教員採用が増加しつつある．

国際対応としては，大阪大会に大韓地質学会の兪剛民会長をお迎えして同学会との学術交流協定をさらに５年間延長した．タイ国地質学会との学術交流協定も更新した．イタリアのラクイラ地震に関連する裁判で，地質学者を含む科学者らに過失致死罪で禁錮刑と罰金を科す判決が出たことに対して，これを憂慮する旨の声明を世界に向けて発表した．

2013年度は以上の成果を踏まえて，特に以下に力点をおく．

１．東日本大震災を踏まえた防災・減災に対する取り組み
　１）地質学的観点からの調査・研究の推進
　２）災害に関する地質学的知識や情報の提供・発信
　３）自然災害に関する地学教育の推進

２．仙台における学術大会を成功させるとともに，大規模自然災害や地学教育・アウトリーチなど，関連学協会との連携・協力を促進する場とする．国際地質科学連合（IUGS）などと協力し，仙台で別途開催される大規模自然災害に関する国際シンポジウムを共催する．

３．日本地質学の成果を世界に向けて効果的に発信するための書籍の刊行と英語ホームページの充実．完全電子化されたIsland Arcのさらなる国際化と質の向上をめざす．東アジアなどの各国の学会との連携・交流強化を図る．

４．2012年６月に改正された地質図の記号等に関する日本標準規格（JIS A0204），ベクトル数値地質図に関するJIS A0205 ならびに国際標準の整備に対応して，それらの普及と地層名登録の仕組みや日本語の地質学用語標準の整備を図る．

５．地学教員および地学の科目を設置する学校の大幅増を目指し，関係機関への要望活動をおこなうとともに，地学教材の提供など，地学教員への支援を強化する．また，地学オリンピックへの支援を強める．さらに，日本学術会議等が検討している大学における地球科学教育の参照基準の策定に，積極的に関与する．

６．一般人の地学リテラシー向上のため，本学会のホームページ（HP），ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）「ちーとも」，広報誌「ジオルジュ」，リーフレット，フォトコンテスト，講演会などを通じ，社会への情報発信を強化する．また，ジオパーク運動への支援強化，重要な露頭の保全などに取り組む．

７．JABEE を含めた地質技術者教育の充実に向けて，関連学会と協力・共同した取組を強化する，本年度には，支部や他学会・機関と連携し，国内での地質技術者にむけた研修事業等を企画，実施する．

８．学会の組織活動を全般的に強化する．支部や専門部会の活動の活発化，理事の役割の強化，会員サービスの強化（就職支援，地質技術者の継続的な専門教育（CPD）など）を図る．若手の人材育成とシニア人材の活躍の場を広げる．

９．５年後の本学会設立125周年に向け，記念事業の計画を策定するなど，準備を本格的に始める．

10．本学会の新しい中期ビジョン策定に向けて，委員会を設け議論を開始する．

11．新会員の積極的勧誘，会費納入の督促，学会出版物の販売促進などにより，本学会の財政基盤を強化する．

以上

2013年度50年会員顕彰者（17名）
1963年入会

飯泉　滋会員　宇井啓高会員　蛯子貞二会員

大口健志会員　小林治朗会員　近藤　務会員

戸野　聡会員　藤原嘉樹会員　丸山孝彦会員

室井　晋会員　矢内桂三会員　吉田　勝会員

小河靖男会員　平野英雄会員　平野昌繁会員

米山正次会員（お写真の掲載なし）

柳　哮会員
※順不同

2013年度
日本地質学会各賞受賞理由

一般社団法人日本地質学会
各賞選考委員会委員長　竹下　徹

2013年度各賞に関して，授賞者と受賞理由を報告致します．

【日本地質学会賞】（２件）

受賞者：井龍康文（東北大学大学院理学研究科）
対象研究テーマ：琉球弧の第四紀石灰岩と海洋炭酸塩堆積物の堆積学的・地球化学的研究

井龍康文会員は，炭酸塩堆積物に関する堆積学的研究，造礁生物に関する古生物学的研究，炭酸塩生物骨格・殻に関する地球化学的研究において優れた業績を挙げてきた．井龍会員の代表的な研究成果として，琉球列島の第四紀サンゴ礁堆積物（琉球層群）に関する研究がある．井龍会員は，現在の琉球列島の現世サンゴ礁の生物相・堆積相についてフィールド調査と室内での精密な記載に基づく研究を行った上で，琉球層群を構成する石灰岩の岩相区分を確立し，堆積環境を決定した．それによって沖縄本島等の島々に分布する琉球層群の層序が確立され，サンゴ礁が汎世界的海水準変動と第四紀造構運動に規制されながら形成されてきた過程が詳細に復元された．これらの成果は国際的に高く評価され，国際陸上科学掘削計画（ICDP）による掘削が予定され，さらなる発展が期待されている．井龍会員は，環礁性堆積物の堆積・続成史に関する研究でも卓越した業績を挙げている．

特に，結晶学的手法と同位体地球化学的手法を組み合わせた独自の手法で，ドロマイトの晶出履歴と母液の化学組成・同位体組成を明らかにした成果は特筆に値する．井龍会員は，炭酸塩生物骨格・殻の炭素・酸素・ホウ素同位体組成および金属元素濃度を用いて，過去の表層海水温，塩分，pH等を高分解能で復元する研究にいち早く取り組み，現生・化石サンゴや現生シャコガイ殻から，後氷期の海水温や過去200年間のENSO（エルニーニョ・南方振動）を復元するなどの優れた業績をあげた．近年は，顕生代全般をカバーする優れたプロキシとされてきた腕足動物殻の炭素・酸素同位体組成に関する研究で，従来の研究を覆す結果を示し，世界的に注目されている．

以上の研究成果の多くが学生・院生の筆頭論文として公表されていることからわかるように，井龍会員は教育にも熱心に取り組み，多くの指導学生・院生が大学や地質学関連企業に勤務している．井龍会員は，統合国際深海掘削計画（IODP）やICDPに対して，学術面（IODP第310次航海共同主席研究者等）のみならず，運営面でも国内外の委員を歴任し，世界の地球掘削科学を牽引してきた．また，Island ArcやPaleontological Researchの編集委員長としての功績も大である．さらに，地質学会では執行理事等として学会に貢献してきた．

以上のような地球科学に対する大きな貢献に鑑み，井龍康文会員を日本地質学会賞に推薦する．

受賞者：乙藤洋一郎（神戸大学大学院理学研究科）
対象研究テーマ：日本列島と大陸の変形を古地磁気学から探る

乙藤洋一郎氏の研究はアジア大陸が形を変える現象について年代学を加味し古地磁気学を用いて可視化したことにある．日本列島，ロシア沿海州，琉球弧，チベット高原，インドシナ半島，インドネシア島弧と研究領域は5000 kmに及ぶ．これまでの古地磁気研究では，花崗岩が研究対象であったが，それでは変動による傾きの補正ができない．この欠点を克服するため，乙藤氏は水平面が補正できる溶結凝灰岩に着目し，熱消磁を施すことで溶結凝灰岩生成時の古地磁気データを手にいれることに成功した．乙藤氏は主として中国地方および東北地方に露出する古第三紀以降の溶結凝灰岩を対象にして古地磁気研究を行い，プレートテクトニクスも取り入れ，嘗てアジア大陸東縁部にあった日本が中新世に背弧海盆を開きながら現在の日本弧に至ったモデルを提案した．背弧海盆の急激な開きは15 Maであり，西南日本弧と東北日本弧は二つの独立したブロックであったとし，日本列島では西南日本が時計回りに，東北日本が反時計回りに回転した可能性を指摘した．日本海の掘削データや動物地理学からもモデルの妥当性が追認された．岩石学・同位体地質学的情報から日本海の拡大を引き起こした原動力はアジア大陸東縁部に流入したアセノスフェアにあるとした．ロシア沿海州での古地磁気調査研究から背弧海盆拡大を伴うアセノスフェアの流入は後期白亜紀にも生じたとした．さらにチベット・インドシナ半島の研究から東チベットの40度時計回り運動を世界に先駆けて発見した．現在のインドシナ半島はアジアから押し出されながら時計回りに回転したこと，半径700 kmの曲率をもつメコン川の曲りは現在のオロクライナル屈曲であることを示した．古地磁気学から求めたチベットの回転運動とGPS から推測される回転運動の比較研究から，回転する変動域が南東に移動している現象を見出し，アジア大陸の変形変遷史を明らかにした．大陸が衝突すると大陸が形を変えるのはプレートテクトニクスの理論が及ばない現象である．乙藤氏の研究は，地球表層の３割を支配する大陸のテクトニクス研究への登竜門と言える．彼は堆積物の磁化獲得機構や地球磁場変動研究などから地質科学一般の発展にも

貢献している．彼がこれまでに公表した多数の原著論文は多くの論文に引用されており，特に日本列島形成のモデルについての論文は被引用回数が多い．以上のように，乙藤洋一郎氏の業績は日本地質学会賞に十分に値するものであり，ここに推薦する．

【日本地質学会小澤儀明賞】（１件）

受賞者：尾上哲治（熊本大学大学院自然科学研究科）

対象研究テーマ：付加体の海洋性岩石を用いた地球環境変動に関する研究

尾上哲治会員は，陸上付加体のフィールドワークを基軸とし，これに古生物学的，堆積学的，および地球化学的手法を取り入れ，多角的な視点から地球史の解明に挑戦してきた．彼がこれまで研究を進めてきた三畳紀という時代は，95%以上の生物種が絶滅した古生代末の全球的環境変動の直後にあたり，大絶滅の後の生物界の再編過程を知り，地球進化史を包括的に理解する上で重要な時代である．彼は九州大学の博士課程在学中，三畳紀の大洋パンサラサ海の古海洋環境復元に着目し，三宝山帯付加体の海洋性岩石の起源・形成過程の解明を目指して研究を進め，2005年に地質学会奨励賞を受賞した．具体的には，九州～四国の三宝山帯の詳細な地質図を完成させ，三畳紀における浮遊性生物の進化史と遠洋性堆積作用のリンクやパンサラサ海での二枚貝・サンゴ化石群集の古生物地理，遠洋性堆積岩の古地磁気層序など，幅広い研究成果をあげた．彼は上記の研究過程で，付加体中の深海底堆積岩中には大気圏突入時に溶融した宇宙塵が普遍的に含まれることを見出し，これを回収することに成功した．また放散虫化石層序から三畳紀の地球に降下した宇宙塵の組成と降下量を明らかにした．過去の地球に流入した宇宙物質の組成や降下量の時間変化を解明した研究例はこれまでなく，現在は宇宙塵から三畳紀の大気酸素に関する情報を得る研究を進めている．最近の尾上会員の特筆すべき成果として，後期三畳紀の天体衝突事件の発見がある．彼は美濃帯の上部三畳系チャートに挟まれた粘土層から，隕石衝突に起源をもつ球状粒子や白金族元素異常を発見し，これがカナダのマニコーガンクレーターに由来する可能性を示した．さらに，この隕石衝突が当時の生物にどのような影響を与えたかについて詳細に検討している．米国科学アカデミー紀要に掲載されたこの成果は，多くのメディアに取り上げられた．また，この研究の契機となった三畳紀隕石起源スピネルについての短報（佐藤・尾上，2010）が2012年に小藤賞を受賞した．

尾上会員は，これまで一貫して野外調査を基礎に据えており，その能力は第一級である．さらに，様々な分野の研究者を巻き込んで研究を進める能力を有し，国際的に活躍する優れた地質学者になることが期待される．近年細分化が進む地球科学分野にあって，彼が展開してきた幅広い分野にまたがる包括的研究は高く評価されるものである．以上の実績から，尾上哲治会員を小澤儀明賞に推薦する．

【日本地質学会柵山雅則賞】（１件）

受賞者：岡本　敦（東北大学大学院環境科学研究科）

対象研究テーマ：沈み込み帯における流体移動と水―岩石相互作用に関する岩石学的実験的研究

岡本　敦氏は，沈み込み帯における水循環とそれに伴う水－岩石相互作用を理解するために，特に変成岩について変成反応の進行度・不均質性の評価法を確立した．東京大学大学院生時代に発表した四国中央部別子地域に分布する三波川変成帯塩基性片岩中の角閃石の組成累帯構造にギブス法（微分熱力学法）を適用した研究は，それまでの断続的な温度圧力経路の推定から確固とした連続的な温度圧力経路を天然の岩石で定量的に示した点で画期的であった．岡本氏の研究以降，天然系における鉱物の化学組成から温度，圧力，反応量，そして物質の移動量などの逐次変化を逆問題として解くことが可能になり，海洋地殻の沈み込み帯における脱水，吸水量の時間的変化が求められるようになった．さらに静岡大学博士研究員時代に，東南極リュッツォーホルム岩体の高変成度珪岩のざくろ石の粒径と形態分布が変形ステージとやきなましステージの２段階で説明できることを定量的に明らかにした．この研究では，不完全であった鉱物包有物の変形機構を記述する従来の二次元モデルを三次元モデルまで拡張し，鉱物包有物の変形機構が細粒な包有物では拡散過程の効果が高くなるのに対して粗粒な包有物では転位クリープが大きく効くことを発見した．この業績は，鉱物の粒径と形態という地質学的に観測しやすい指標を用いて天然の岩石のレオロジーを理解する道筋を与えた点で秀逸であった．さらに，鉱物包有物研究から地球内部レオロジーを推定する方法を開拓したことによって，岡本氏の研究対象である地殻内部だけでなくマントル研究にもインパクトを与えるほど応用範囲は広い．また，本研究は岡本氏の専門の岩石学ではない岩石のレオロジー研究であったにもかかわらず，静岡大学在任中の短期間で仕上げた高い力量と柔軟な発想力そして展開力は，その後現在まで随所で発揮されている．東北大学に研究拠点を移してからの岡本氏は，地殻内部の流体移動経路として変成岩に残されている石英脈に着目し，その組織から小脈中を上昇した流体の速度を求めることに成功した．この研究以前は地殻深部における流体の挙動については定性的な推論が主流であったが，岡本氏の研究によって流体と岩石の相互作用に関して定量的な考察が可能になった．最近では，海洋リソスフェアにおける蛇紋岩化作用の研究に取り組んでおり，地球深部に持ち込まれる水の貯蔵プロセスの解明が期待されている．

以上のように，岡本敦氏はその初期の研究から現在までいずれの研究においても優れた理論的考察と鋭い洞察力が遺憾無く発揮されており，優秀な業績をあげている若手研究者として柵山雅則賞に推薦する．

【日本地質学会 Island Arc 賞】（１件）

受賞論文：Hattori Keiko, Wallis Simon, Enami Masaki and Mizukami Tomoyuki, 2010. Subduction of mantle wedge peridotites: Evidence from the Higashi-akaishi ultramaficbody in the Sanbagawa metamorphic belt. Island Arc, 19, 192-207.

The Higashi-akaishi ultramafic body is the largest garnet-bearing peridotites in the SambagawaMetamorphic Belt. Through mineral chemistry of coexisting phases and coupled thermobarometriccomputations, the authors have clearly and unambiguously documented the hanging-wall, i.e.,mantle wedge origin of the Higashi-akaishi peridotite; they have further chronicled its subsequenttectonic decoupling from the stable overlying plate and descent attending high-pressurerecrystallization along the subduction channel in traction with the downgoing paleo-Pacific oceaniclithosphere. This paper provides a good constraint to consider the genesis of the Sambagawametamorphic belt and an important insight into the not-well understood melting and tectonicprocesses in the wedge mantle, for which the article is highly evaluated. It will benefit not only theHP-UHP metamorphic petrologists but also a much broader scientific community involved insubduction zone research.

The paper received one of the highest number of citations－ based on the Thomson Science Indexfor the year 2012－ amongst the entire candidate Island Arc papers published in 2010. The firstauthor has been active in the research of the behaviour of redox-sensitive metals and volatiles in avariety of settings such as subduction zones and the Archean Canadian shield, for more than 35 years. This paper adds to her many contributions and is a worthy recipient of the 2012 Island Arc award.

【日本地質学会小藤文次郎賞】（１件）
受賞者：森田澄人（産業技術総合研究所）・中嶋 健（同）・花村泰明（JX日鉱日石開発（株））
受賞論文：森田澄人・中嶋　健・花村泰明，2011，海底スランプ堆積層とそれに関わる脱水構造：下北沖陸棚斜面の三次元地震探査データから．地質学雑誌, 117, 95-98.

本論文は，下北沖において三次元地震探査で発見された，巨大なスランプ層に関する報告である．陸棚斜面を構成する新第三系鮮新統・第四系中には，見事な覆瓦状構造と平行砂層岩脈群が，差し渡し10 kmを越える広大な領域に形成されていることに驚かされる．これほど大規模なスランプ層は，これまで我が国の陸上地質に見いだされていない．同様の大規模なスランプ層は，大陸縁などですでに発見されているとのことだが，日本近海で発見されたということは，我が国の陸上に露出する地質時代の地層の構造の解釈においても同様の構造が存在する可能性を考慮すべきであることが，本論文で明確に示されたことになる．また，マップスケールで発達する断層などの規則的構造が１°足らずの緩斜面で形成されたことは，海底地すべりは必ずしも安息角を超える急斜面に形成されるわけではないという最近の説を裏付ける新しい発見である．このことは，陸上の地域地質から広域テクトニクスを考える難しさを示している．以上，本論文はこれまでの地質学的常識を覆すような新発見であり，革新的な事実をもたらした論文に授与されるという小藤文次郎賞の趣旨に良く合致することから，同論文を受賞対象論文として推薦する．

【日本地質学会表彰】（２件）

岡村　眞（高知大学総合研究センター）
表彰業績：地震・津波研究の新分野開拓と普及教育活動

岡村眞氏は，活断層および津波堆積物の新しい試料採取システムを独自に開発して，地震地質学を切り開いてきたパイオニアであり，またその研究の成果を基にした防災教育を熱心かつ長年に渡って実施してきた．活断層研究においては，従来の陸上トレンチ調査よりも海底調査の方が地層記録の連続性において優位であることを見抜き，深海の地質試料採取に用いられてきたピストンコアラーが浅海活断層調査に有用であると考え，国内最長級の21m連続試料が採取可能な改良型ピストンコアラーを自ら製作して，これを浅海域の中央構造線活断層系の調査に活用し，高時間分解能の断層活動履歴研究の分野に道を開いた．また，太平洋沿岸域の淡水から汽水の湖沼に，南海トラフ沿いの巨大津波堆積物が保存されているであろうと考え，従来は採取が難しかった泥質および砂質の互層を乱さずに採取するためのバイブロコアラーを独自に開発した．これを小型ボートによる浮体式の櫓に設置し，大型船が入れない小さな湖沼でも調査できるサンプリングシステムを確立し，津波堆積物を次々に発見してきた．その成果は政府の津波防災計画に反映されるものとなった．これらの研究における着眼点，手法開発，その成果はいずれもユニークでまさに地質学の新しい地平を切り開いたパイオニアと言えよう．その先見性と調査システムとして優れた研究成果は，世界からも注目されており，これまでにも米国西海岸，トルコ，ベトナム，ネパールなど７ヶ国に上記の調査システムを持ち込んで，共同研究を実施してきている．さらに，同氏は地震・津波防災における普及教育活動にもたいへん熱心であり，この10年間に地元の高知県を始め16都道府県において995回もの普及講演会を実施している．小規模なものであれば十数人程度の集会から，大規模なものであれば数百人のものまで，集会の大小を問わず懸命に津波防災の重要性を説いて回っており，将来の津波災害の被害低減のために尽力している．

以上，斬新な研究手法の開発と献身的な防災教育活動は日本地質学会表彰に相応しく，ここに推薦する．

静岡県袋井市（代表者　市長　原田英之）
表彰業績：地層保全を活かす市民公園の先駆的取り組み

静岡県西部の丘陵を構成する鮮新－更新統掛川層群は，貝化石を多産し，浅海～深海までの層相が連続的に分布することから，地質学的・古生物学的研究が数多くなされてきた．その貝化石群は掛川動物群と呼称され，当時の古黒潮流域に繁栄した暖流系動物群の模式として有名である．しかしながら，開発による露頭消滅などで，市民がそのような地質遺産を実感できる機会は失われつつあった．ジオパーク設立の勢いに象徴されるように，露頭の保護や整備は日本各地で進行中であるが，新第三系や第四系からなる丘陵地の場合，風化や植生被覆，露頭の小規模性など，行政がその意義を意識しなければ，露頭はありふれたものとして失われやすい状況にある．

袋井市は，このような露頭を保全・活用した宇刈里山公園を整備し，2012年５月にオープンさせた．公園では地層断面をはじめ，生の自然を展示・活用して，市民が里山の自然史を意識できるよう工夫がこらされている．公園入口には，宇刈層の断面が保全され，足元の地下の様子を実感しながら，貝化石や生痕化石，ハンモック状斜交層理，断層などから，大地の成り立ちを学べるよう観察ポイントが示されている．公園内に設置された貝化石密集層のブロック標本では，化石産状の観察を通して200万年前の温暖化した海の様子を推定させ，メタセコイアの植樹コーナーでは産出した植物化石もあわせて解説し，当時の陸上の様子を思い描けるようストーリー性ある構成となっている．市民の憩いの場であると同時に，学校や市民団体も見学に訪れ地学教材としても大いに活用されている．静岡県の丘陵地には，古刹をはじめとする歴史遺産や風習，なだらかな地形を利用した茶畑など，自然と文化・生活とが融合した日本独自の里山環境が成立している．このような身近な丘陵地の地質学的な成り立ちを深く知ることは，日本人の自然観を育む上で重要な鍵となる．袋井市は，公園整備に至る過程で地元自治会とワークショップを繰り返し，地域の地質遺産を住民とともに再発見していったが，この点でも地質学を社会に浸透させる一つのモデルケースを提示している．我々は得てして雄大な自然景観や，貴重で珍しいという価値に目を奪われがちであるが，今回の袋井市の地道な活動は身近で小規模な露頭を保全することの大切さを示した先駆的な取り組みとして高く評価され，今後の波及効果は大きいと予想される．以上の理由により，日本地質学会表彰に値すると考え，ここに推薦する．

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します．

日本水環境学会 第22回市民セミナー

「身近な水環境，池・沼・湖の保全を考える－ため池から琵琶湖まで－」

池や湖沼は，漁業，水道水源，レジャー利用など人の生活に欠かせないものですが，生きものの生育・生息の場としても重要です．全国に約21万あるため池の中には農業の灌漑用としての役割を終えたものも多くありますが，豊かな自然環境とのふれあい・やすらぎ，環境教育など多様な役割の可能性もあります．

しかし，全国の湖沼のCOD（化学的酸素要求量）から見た環境基準達成率は約50%で，水質が年々良くなっているとは言えません．また農業者の減少，高齢化の中で管理が難しくなり水質悪化が問題になっているため池も少なくありません．

多くの池や湖沼で水質改善が進まない理由は，規模の大小にかかわらず「池・沼・湖」が閉鎖的な環境であることが要因と言えます．

本市民セミナーでは，身近な水環境である「池・沼・湖」において生じている諸問題や，保全のための住民や行政のさまざまな努力，技術的対応策，貴重な生態系などに関する最新の情報を解説していただき，保全活動で行動する際に原動力となる知見を提供することを目的としています．

なお，テレビ会議方式により，通信ケーブルで繋いで東京と大阪で同時に開催します．

主催：（公社）日本水環境学会
期日：2013年８月２日（金）10:00～16:30
場所：東京会場：地球環境カレッジホール（いであ（株）内）（東京都世田谷区駒沢）
http://www.gecollege.or.jp/gec/gec.htm#02
大阪会場：いであ（株）大阪支社　ホール（大阪市住之江区南港北）
http://www.ideacon.jp/contents/company/osaka_new.htm

参加費：一般：3,000円，大学生：1,000円，高校生以下無料（テキスト代含む）
定員：250名（東京会場150，大阪会場100）
申込方法：FAX，E-mailまたはハガキに，①参加者氏名（フリガナ），②会員・非会員の別，③会員の場合は会員番号，④希望受講会場，⑤連絡先（所属団体名，住所および電話・FAX番号）をご記入の上，下記宛お申し込み下さい．入金を確認後，参加証（ハガキ）をお送りいたします．

申し込み・問い合わせ先：
（公社）日本水環境学会 セミナー係　戸川
〒135-0006　東京都江東区常盤２-９-７　グリーンプラザ深川常盤201号
Tel．03-3632-5351　　Fax．03-3632-5352
E-mail：togawa@jswe.or.jp
参加費振込先：三菱東京UFJ銀行 市ヶ谷支店（普通）0754950
（公社）日本水環境学会セミナー口シャ）ニホンミズカンキョウガッカイセミナーグチ

第３回学生のヒマラヤ野外実習ツアー参加者募集

日本地質学会・地学団体研究会・日本応用地質学会・ネパール地質学会・ネパール地すべり学会・国際ゴンドワナ研究連合推薦

ヒマラヤを研究してきた日本とネパールの大学教員，元教員や技術者らがボランティアで，日本の学生に素晴らしいヒマラヤの地学と自然環境を実地で実習指導します．航空運賃その他必要経費一切込みで参加費学生１人20万円以内，実施主体の利益なし完全ボランティアのプログラムです．参加者募集情報は全国60の地学関係教室に配信しましたが，詳細は「第３回学生のヒマラヤ野外実習ツアー実施要項」（下記URL）をご覧下さい．島根大学や山形大学など，11教室・学科では参加学生に対して実習単位の付与が可能になり，或いはその方向を検討中です．なお，本実習ツアーには高校生，中・高校教員や関係分野企業の新人社員等もご参加頂けます．本実習ツアーの第１回目と第２回目はそれぞれ2012年と2013年に実施されました（日本地質学会NEWS15巻5号；16巻５号）．詳しい報告書は２冊のE-bookとして発行され，下記URLでご覧頂けます．
https://www.data-box.jp/pdir/94c9ab2a9e684a47ac574befe960d871

＜参加申込み締切＞11月30日
＜実習実施時期＞2014年３月５日出発19日帰国，出国から帰国まで15日間
＜実習コース＞カトマンズ－ポカラ－ムクチナート－タンセン－ルンビニ
＜参加費用＞学生・大学院生20万円以内，その他の個人参加者：25万円以内，大学・企業などの組織派遣教員／社員：30万円以内
＜実施のための最小～最大参加人数＞３～20人（１チーム）

お問い合わせ
ゴンドワナ地質環境研究所　吉田　勝
http://www:geocities.jp/gondwanainst/

E-mail：gondwana@oregano.ocn.ne.jp

第６回国際レルゾライト会議

6th International Orogenic Lherzolite Conference
開催場所：Marrakech, Morocco
開催期間：2014年５月４日－５月14日

オプション巡検：
Pre-conference
場所：Beni Bousera Orogenic Peridotite
期間：2014年５月４日－５月７日
Post-conference 1
場所：Middle-Atlas（Volcanics and Mantle Xenoliths）
期間：2014年５月11日－５月13日
11-13 May - Middle-Atlas
Post-conference 2
場所：Anti-Atlas（Pan-African Ophiolites）
期間：2014年５月11日－５月14日

http://www.gm.univ-montp2.fr/Lherzolite/

IGCP608「白亜紀アジア－西太平洋生態系」の第１回国際研究集会 2nd Circular配付のお知らせ

先月号の本誌でお知らせした，IGCP608 Asia-Pacific Cretaceous Ecosystems（地質科学国際研究計画608「白亜紀アジア－西太平洋生態系」）の，第１回国際研究集会の詳細を案内する2nd Circularが発表されましたので，皆様にご案内します．

IGCP608 第１回　国際シンポジウム
・開催日時：2013年12月20-22日
・開催場所：インド・ラクナウ（Lucknow）バーバル・サーニー古植物研究所（Birbal Sahni Institute of Palaeobotany：http://www.bsip.res.in/）
・開催中心者：Sunil Bajpai 所長（教授）IGCP608の共同リーダーの一人
・巡検：12月23-27日の５日間
インド半島中西部の非海成－浅海成白亜系：1）浅海成化石を豊富に産するBagh Beds　2）恐竜化石を含むマストリヒシアンのLameta層　3）デカントラップ（洪水玄武岩）中に挟在するK-Pg境界層

バーバル・サーニー古植物研究所は，インドの古植物学者Birbal Sahni（1891-1949）の業績をたたえて1946年に設立された研究施設です．インド科学技術局のもとにある独立研究所で，先カンブリア時代以降の植物・花粉・有機物化石研究の牙城です．

Second Circular には，シンポジウムや巡検の参加費，宿泊等の情報が掲載されていますが，以下に重要な日程を抜粋します．

重要な日程：
2013年７月31日　参加登録　締切
2013年９月30日　宿泊　申込
2013年10月31日　発表要旨　締切
2013年10月31日　参加支援申込　締切
2013年11月30日　シンポジウムプログラム発表

Second Circular は，IGCP608やバーバル・サーニー古植物研究所のHPからダウンロードできます．
IGCP608のホームページ
http://igcp608.sci.ibaraki.ac.jp/

なおIGCP608のWebsiteではインドの地質図２種類をダウンロードできますので，是非ご覧ください．白亜系を対象とする研究推進・発表の場として，多くの方の積極的な参加をお願いします．

連絡先：IGCP608リーダー
安藤寿男（茨城大学理学部）
E-Mail：ando@mx.ibaraki.ac.jp

地球にわくわく小・中学生自由研究コンテスト2013

主催：NPO法人地学オリンピック日本委員会
共催：公益社団法人日本地球惑星科学連合・公益財団法人つくば科学万博記念財団

募集期間：2013年８月１日（木）～10月31日（木）

応募資格・部門：小学生２部門（３・４年，５・６年），中学生１部門
研究テーマ：地球や宇宙，環境に関する自由研究（例：天気調べ，流星群の観察，河原の石くらべなど）

応募方法：Ａ４サイズの用紙10枚以内で作成し，別途Webサイトより印刷した表紙を添付して，下記の地学オリンピック事務局に郵送

参加料：無料

郵送先：〒113-0032　東京都文京区弥生２－４－16　学会センタービル内
NPO法人地学オリンピック日本委員会事務局　宛

結果発表：2014年３月１日．地学オリンピックWebサイト< http://jeso.jp/>に掲載

表彰式：2014年３月25日．各部門の最優秀賞受賞者を表彰

問い合わせ先：wakuwaku@jeso.jp

第２回G-EVER国際シンポジウム，第１回IUGS・日本学術会議国際ワークショップ

アジア太平洋地域の災害とリスクマネジメント：沈み込み帯の地震・津波・火山噴火・地すべり
期間：2013年10月19日（土）・20日（日）（２日間）
場所：仙台市情報・産業プラザ
主催：G-EVERコンソーシアム，産業技術総合研究所地質調査総合センター，国際地質科学連合（IUGS），日本学術会議
共催：日本地質学会，東・東南アジア地球科学計画調整委員会（CCOP）（予定）

開催の経緯：アジア太平洋地域は地震・津波・火山噴火の大規模自然災害のリスクが高い．一旦災害が発生すれば，高度に発達した国際経済社会では，被災国のみならず，国際的な問題に発展し得る．大規模自然災害への対策は人間の安全保障として，経済の持続的発展のためにも重要である．今，国際的な枠組みを作って協力し，我が国も含めたアジア太平洋諸国のリスク軽減のために情報収集メカニズムを構築することが望まれる．

開催の目的：2011年３月11日の東北地方太平洋沖地震から２年半が経過し，世界各地で，地震・津波・火山噴火・地すべりを始めとする自然災害に対する防災，リスク対策が進められている．G-EVERコンソーシアムでは，海外及び国内の研究機関と協力して，下記の活動を推進している．
１．アジア太平洋地域の地震及び火山防災関連の研究機関及び関連組織の協力体制の確立
２．各種地震及び火山関連の防災情報の提供と共有化の推進
３．データベース構築・データ交換・災害リスクの低減のための国際標準化

第２回G-EVER国際シンポジウム，第１回IUGS・日本学術会議国際ワークショップでは，アジア太平洋地域の地震，津波，火山，地すべり等の自然災害に関する研究の現状と課題について広く議論を行うとともに，(1) 災害に強い社会に変えていくために必要な今後の研究テーマや優先順位，(2) 今後社会に必要とされるハザードマップのあり方およびアジア太平洋スケールでの取り組み，(3) 固体地球科学からの貢献の重要性等について，今後10年間の将来展望を見すえた討論を行う．

地質巡検：10月21日（月）
「2011年東北地方太平洋沖地震津波と869年貞観地震津波の浸水域と堆積物」（日帰り，先着40名，招待講演者，関係者優先）
講演要旨（招待講演及びポスター発表）投稿締切：８月20日（火）
参加登録（登録料無料，先着70名）：締切：９月15日（日）

連絡先：G-EVER推進チーム；g-ever-ml@aist.go.jp

申込，日程の詳細や招待講演者などの情報は，以下のサイトよりご確認下さい．
http://g-ever.org/en/symposium/symposium2.html

公募　教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

新潟大学教育研究院自然科学系教員公募

１．所属　新潟大学教育研究院自然科学系環境科学系列
２．担当学部・研究科　理学部　地質科学科　大学院自然科学研究科　環境科学専攻　地球科学コース
３．担当予定科目
学部：岩石・鉱物学，構造地質学，堆積・古生物学に関する何れかの専門科目，野外調査を基本とする実習科目，地学に関する基礎科目
大学院：地圏環境進化学に関わる地質科学分野の専門科目など
４．職種・人員　准教授　１名
５．採用予定日　平成25年12月１日以降のなるべく早い時期
６．給与　国立大学法人新潟大学職員給与規程による
７．職務内容・条件（1）理学部地質科学科及び大学院自然科学研究科環境科学専攻地球科学コースの教育目標と教育内容，伝統を理解し，野外調査を基本とする地質科学の教育及び研究に情熱を持って取り組むこと．（2）野外実習を含む地質科学の基礎科目の教育を行うこと．（3）新潟大学自然科学系附置コア・ステーション「地球環境・地球物質研究センター」の活動に参画すること．（4）日本技術者教育認定機構（JABEE）に認定されている教育プログラムに参画すること．
８．応募資格　（1）博士の学位を有すること．（2）上記職務内容に関して優れた教育研究業績を有し，地質科学分野の教員と協力して教育研究を担える能力と熱意があること．
９．応募書類（各１部）　（1）履歴書（写真を貼付し，連絡先の電話番号と電子メー

ルアドレスを明記のこと．書式は自由）(2) 著書，学術論文（学位論文，レフェリー付きの原著論文，総説に区分）及びその他の論文（レフェリーなしの原著論文，国際会議発表論文など）を分けた研究業績のリスト．それぞれに，著者名，論文名，雑誌名，巻，最初と最後のページ，発表年（西暦）を記載し，Science Citation Indexに登録されている雑誌には，リストの番号にマーク（*）を付けること．(3) レフェリー付きの原著論文のうち，代表的なもの10編以内の別刷あるいはコピー．(4) これまでの研究と教育についての概要と採用された場合の研究と教育についての抱負を2000字程度にまとめた文書．(5) 過去10年間における，科研費等の外部資金の獲得状況（代表者，分担者の区別および課題名を明記すること），特許，受賞，社会的活動状況をまとめた文書．(6) 応募者について意見を聞くことのできる方２名の氏名と連絡先（勤務先，電話番号，電子メールアドレス）．

（注）応募書類の形式は自由です．応募書類は選考以外の目的には使用しません．応募に関する秘密は厳守します．本公募手続きにより本学が取得した応募者の個人情報は，「独立行政法人等の所有する個人情報の保護に関する法律」に基づいて適正に管理します．また，上記の応募書類は返却しません．

10. **応募の締切　平成25年８月16日（金）必着**

11. 選考方法　応募書類による選考を行います．面接による最終選考を行うことがあります．ただし，旅費は支給しません．

12. 提出書類の送付及び問合せ先

(1) 送付先：〒950-2181　新潟市西区五十嵐２の町8050番地
新潟大学自然科学系総務課学系庶務係

(2) 問合せ先：〒950-2181　新潟市西区五十嵐２の町8050番地
新潟大学理学部地質科学科
教授　サティッシュ・クマール
電話　025-262-6327（直通）
E-mail： satish@geo.sc.niigata-u.ac.jp

東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻教員の公募

１．公募人員：准教授１名

２．公募分野：地球表層環境進化を地質記録に基づいて研究する分野．

３．応募資格：博士の学位を有し，大学院および学部での講義，演習および野外調査・実習を担当できる方．

４．着任時期：決定後，できるだけ早い時期．

５．応募方法：自薦または他薦（他薦の場合は，ご本人が了解されていること）．

６．提出書類：

a）略歴書（学歴および職歴）　b）これまでの研究教育業績の概要（1500 字程度）　c）研究業績目録（査読論文とそれ以外の総説，著書などに分類）　d）主要な原著論文５編以内の別刷（コピーでも可）　e）今後の研究計画および抱負（1500 字程度）　f）大学院および学部における教育への抱負（1500 字程度）　g）自薦の場合には，応募者に関する所見を伺える方２名の氏名および連絡先（住所，電話番号，電子メールアドレス）　h）他薦の場合は，推薦書および上記 a）から d）までの概要がわかる書類

７．**応募締切：平成25年８月30日（金）（消印有効）**

８．書類送付先：
〒113-0033　東京都文京区本郷７-３-１
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻事務室
電話：03-5841-1978　FAX：03-5841-8791
（封筒の表に「地球表層環境進化教員応募」と朱書し，郵便・宅配便の場合には，配達記録の残る方法で送付して下さい．なお，特に要望がない限り，応募書類は返却いたしません．）

９．問い合わせ先：
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻　遠藤一佳
電話：03-5841-4553　FAX：03-5841-4555
電子メール：endo@eps.s.u-tokyo.ac.jp

なお，本専攻全般に関するより詳しい情報はhttp://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp/をご覧下さい．

電力中央研究所 地球工学研究所研究職員公募

募集分野・職種・人員：変動地形学研究職（任期なし）１名

応募資格：修士または博士課程修了者（新卒・既卒いずれも可）

研究内容　大学等において，空中写真などによる地形判読に関する基本的な手法を習得しており，活構造に関連した地形・地質学的なフィールド調査，研究の経験を有する方．入所後は，地形・地質・地震学などの専門家で構成される当研究所の研究チームに協力して，次の研究に取り組んで頂ける方を募集します．

１．変動地形学的手法を用いて活断層を研究し，調査結果から当該活断層の活動性・地震規模を明らかにする．

２．地形解析および津波堆積物解析等から津波ハザード評価の高精度化を図る．

社会への貢献を意識し，地震・津波などの自然災害から重要構造物を守るための調査・研究に，意欲的に取り組んで頂ける方の応募を期待します．

着任時期：平成26年４月１日（採用決定後，できるだけ早い時期）

締切：平成25年８月30日（金）（決定次第締切）

応募先：https://recruit.denken.jp/entry/

詳細：http://recruit.denken.jp/info/kadai/#post-1376

愛媛大学大学院理工学研究科（理学系）教員公募

１．募集人員　教授又は准教授　１名

２．所属部門　大学院理工学研究科数理物質科学専攻地球進化学講座

３．専門分野　地質学

４．応募資格

(1) フィールド実習や実験等の地球科学の専門教育科目を担当できる方

(2) 優れた研究業績をあげている方

(3) 教育や研究活動並びに大学の運営に熱意をもって取り組める方

(4) 博士の学位を有している方

５．着任時期　平成26年４月１日（予定）

６．任　　期　なし

７．提出書類

(1) 履歴書（写真貼付，賞罰，所属学会を含むこと）

(2) 研究業績リスト（原著論文，総説，著書，研究費取得状況，その他）

(3) 主要論文５編程度の別刷（コピー可）

(4) これまでの研究概要とこれからの研究計画（それぞれＡ４紙１枚程度）

(5) これまでの教育経験と今後の教育に関する抱負（Ａ４紙１枚程度）

(6) 応募者について照会可能な方２名の氏名と連絡先

８．**公募締切　平成25年９月13日（金）必着**

９．提出先　〒790-8577　松山市文京町２－５　愛媛大学大学院理工学研究科（理学系）人事委員会委員長　　宇野　英満

10. 問合せ先　愛媛大学大学院理工学研究科数理物質科学専攻地球進化学コース
コース長　　皆川　鉄雄
電話：089-927-9650　　Fax：089-927-9550
（理学部事務課）
E-mail：minagawa@sci.ehime-u.ac.jp

11. その他　封筒に「地球科学教員応募書類在中」と朱書し，簡易書留で郵送して下さい．

選考の過程で，講演をお願いし，面接を行うことがあります．ただし，旅費は応募者の負担とします．また，応募書類に記載された個人情報は，本人事のみに使用し，応募書類は原則として返却いたしません．なお，採用予定者の氏名は，本学ホームページで公表させていただきます．

愛媛大学では，男女共同参画を積極的に推進しています．

地球進化学コースホームページ：http://earth.sci.ehime-u.ac.jp/

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は，執行理事会までお申し込み下さい．

2013年度「朝日賞」候補者推薦依頼のお知らせ

朝日新聞文化財団より，2013年度「朝日賞」候補者推薦の依頼がありました．朝日新聞文化財団は，朝日新聞社が文化活動支援を公益的な立場から行うため，1992年に設立され，朝日賞の受賞事業を継承しております．この賞は，1929年（昭和４年）に朝日新聞社が，創立50周年を記念して創設したもので，人文や自然科学など，我が国のさまざまな分野において，傑出した業績をあげ，文化・社会の発展，向上に多大な貢献をされた個人または団体に贈られています．

推薦書は８月31日（土）までに，所定様式送付となりますので，**推薦を希望される方は８月９日（金）までに，執行理事会宛にご連絡下さい．**

推薦票は下記URLからダウンロードできますが，パスワードが必要です．希望される方は学会事務局までお問い合わせ下さい．
http://www.asahi.com/shimbun/award/asahi/suisen

問い合わせ先：
朝日新聞社CSR推進部「朝日賞」事務局
〒104-8001　東京都中央区築地５-３-２
TEL（直通）03-5540-7453
FAX　03-3541-8999
http://www.asahi.com/shimbun/award/asahi/

第35回（平成25年）沖縄研究奨励賞推薦応募

沖縄研究奨励賞は，沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し，育成することを目的として，昭和54年に創設されました．本奨励賞は，沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究（自然科学，人文科学，社会科学）を行っている新進研究者（又はグループ）の中から，受賞者３名以内を選考し，奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰するものです．

応募資格：**学協会・研究機関若しくは実績のある研究者から推薦を受けた50歳以下の者**で，平成25年７月15日現在で50歳以下の者

応募方法
(1)「沖縄研究奨励賞推薦応募用紙」
(2) 研究成果物（論文３点以内，著書がある場合は１冊），
(3) 研究成果物の要旨（Ａ４判横書き各1,000字以内），
(4) 研究業績リスト（著書，論文等30点以内．Ａ４横書き）

応募書類の提出先
〒112-0004　東京都文京区後楽１-２-９
エー・ゼットキュウブビル５Ｆ
公益財団法人沖縄協会　沖縄研究奨励賞係

応募期間：**平成25年９月30日（学会締切：８月30日）**

推薦応募用紙は，<http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/index.htm>からダウンロードして下さい．

お問い合わせ
財団法人沖縄協会
〒112-0004東京都文京区後楽１-２-９　５Ｆ
「沖縄研究奨励賞」担当・山岸
e-mail：okinawakyoukai@nifty.com
TEL：03-5803-2341　FAX：03-5803-2581

平成25年度 東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者推薦

１．東レ科学技術賞
(1) 対象：学会に関する分野で，学術上の業績が顕著な方，学術上重要な発見をした方，効果が大きい重要な発明をした方，あるいは技術上重要な問題を解決して，技術の進歩に大きく貢献した方．２件．
(2) 賞：１件につき金メダルおよび副賞賞金500万円
(3) 締切：**平成25年10月10日（木）必着（学会締切：８月30日）**

２．東レ科学技術研究助成
(1) 対象：学会に関する分野で自らのアイディアで萌芽的研究に従事しており　かつ今後の研究の成果が科学技術の進歩，発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者（原則として推薦時45才以下）．本助成が重要な研究費と位置づけられ，これにより申請研究が格段に進展すると期待されることが要件．
(2) 助成金額：総額１億３千万円．１件最高３千万円程度まで，計10件程度．
(3) 締切：**平成25年10月10日（木）必着（学会締切：８月30日）**

＊各推薦書要旨は，ホームページからもダウンロードできます．
http://www.toray.co.jp/tsf/index.html

問い合わせ先
公益財団法人東レ科学振興会
〒279-8555　千葉県浦安市美浜１-８-１
Tel：047-350-6103　Fax：047-350-6082

お願い：第四紀小委員会，第四紀研究連絡委員会の資料を探しています

名古屋国際会議場で2015年の夏に国際第四紀学連合（INQUA）の大会が初めて日本で開催するのに際し，日本におけるINQUA対応の歴史に関する資料を探しています．日本学術会議の地質学研究連絡委員会に1950年11月17日に第４紀小委員会が設けられました．更に日本学術会議第５期において，1960年１月に第四紀研究連絡委員会が新設されます．それ以降，INQUA対応の委員会が継続して存続しており，現在は，日本学術会議の国際対応分科会のINQUA分科会がその任を担っています．1956年の日本第四紀学会の設立に際し，第四紀小委員会は矢部長克委員長の下，15名の委員からなる新生の小委員会となります．この時のメンバー構成に関する資料を探しています．また第四紀研究連絡委員会が設置されて以降，第６期（1963-1966）の研連委員構成に関する資料も探しています．多田文男委員長、宮地伝三郎（会員），渡辺光（会員），以上の３名が委員であったことは分かっていますが他の委員構成がわかりません．以上の情報をお持ちの方は，第19回第四紀国際第四紀学連合大会組織委員会までご一報頂けると幸いです．

連絡先：305-8567　つくば市東１－１－１中央第７
産業技術総合研究所地質情報研究部門　斎藤文紀
メール：yoshiki.saito@aist.go.jp

紹　介

東日本大震災を分析する
第１巻
地震・津波のメカニズムと被害の実態
第２巻
震災と人間・まち・記録

平川　新・今村文彦・東北大学災害科学国際研究所　編著

明石書店　2013年６月発行　Ａ５版，第１巻　280ページ　ISBN978-4-7503-3823-1，第２巻　258ページ　ISBN978-4-7503-3824-8，定価　両巻それぞれ3,800円＋税

「東日本大震災を分析する」という本書のタイトルから，この本はこの震災を引き起こした地震や津波の地球物理学的な解析結果や，災害の特徴・救援および復興活動などの諸相を分析した結果を述べた専門書であると考えられた方も多いのではないだろうか．内容は確かにその通りであるが，本書は，そういった難しい内容を一般向けに解説したものである．本書は，その目的を見事に達成している．その証拠に，医療やまちづくりを専門としない評者でも，苦労することなく本書を読み通すことができた．

東日本大震災で被害を被った地域の中心に位置する東北大学が，この未曾有の災害に無関心でいられるはずがないことは想像に難くない．本書は，東北大学の，主として教員の，東日本大震災に対する諸活動の集大成であり，今後も続くであろう活動の中間報告でもある．東北大学は東日本大震災の発生から１ヶ月後，３ヶ月後，６ヶ月後，１年後の４回にわたり，大震災に関する報告会を開催している．その報告会の内容を，一般向けにまとめたのが本書なのである．この報告会は，大震災前から発生が予測されていた宮城県沖地震に備えて組織された，東北大学防災科学研究拠点が主催したものであるが，同拠点は，大震災後，災害科学国際研究所としてグレードアップしている．今後も，多くの成果を挙げられることであろう．

本書は２冊組の書籍であり（本書評では第１巻，第２巻と記述することにする），その構成は次のようになっている．

第１巻　地震・津波のメカニズムと被害の実態
　第１部　巨大地震に備えて
　第２部　地震・津波のメカニズム
　第３部　東日本大震災-被害の実態と要因
　　１．津波と洪水の被害
　　２．建物の被害
　　３．被害の諸相
第２巻　震災と人間・まち・記録
　第１部　ひと・命・心
　第２部　防災と復興のまちづくり
　第３部　震災の歴史と記録

各部は，東北大学の研究者を主体とする執筆者による，いくつかの章からなる．各章の最初は，その章で何が語られるかを簡潔にまとめた「要旨」から始まり，読者の理解と利便性を高めている．各章は10ページ程度にコンパクトにまとめられているのでたいへん読みやすい．そして，どこから読んでもよいように，各章は独立している．「東日本大震災の○○○について知りたい」と思った時に，さっと使えるようになっている．

本書の内容は，上記の構成に示した通りであるが，それだけではその魅力を伝えきれないと思う．各部に含まれる全ての章の紹介は紙面の都合で割愛するが（興味のある方は出版社のホームページなどを参照して下さい），個人的に印象に残った内容を，やや網羅的に紹介したい．

第１巻，第１部では，東日本大震災以前に行われていた地震・津波対策の概要が記述され，それが今回の超巨大地震・津波に対しては不十分であったことが，反省とともに述べられている．第２部では，東北地方太平洋沖地震がどのような地震だったのかが，他機関の観測結果もふまえながら分析されている．特に，海底に設置された観測機器から探る超巨大地震・津波の発生メカニズムに関する記述に多くの紙面が割かれている．また，早期地震警報システムや地盤工学に関連した課題についても分析がなされている．第３部では，まず，衛星画像を用いた津波被害の実態や，映像解析による津波の流況の解析結果が紹介される．さらに，堤防，海岸林，アースフィルダム，ため池，建築物，造成宅地の被害の実態およびその分析結果が述べられている．最後に，被害の諸相として，福島第一原発の放射能汚染，交通ネットワーク被害，ロボットによる震災対応，墓石転倒率調査結果などが記述されている．

第２巻，第１部では，被災者のいのちと健康を護るためにどう備えるべきかが述べられている．具体的には，災害保健医療支援室の活動から見た救援期の支援ニーズの推移，医療現場の脆弱性と想定外対応能力，被災者のマナー，産婦人科医療・精神医療などに関する分析結果が詳述されている．第２部は復興とまちづくりに関する章からなり，仙台市および石巻市中心市街地でのまちづくり事例と東北大学のかかわりが紹介されている．また，建築家による復興支援（「アーキエイド」）や「せんだいスクール・オブ・デザイン」など興味深い活動の紹介がされ，さらに，日本の災害対策法制に関する問題提起もなされている．第３部では，最初に，地質学との関連も深い，弥生時代の津波および貞観津波の堆積物研究，慶長奥州地震津波に関する古文書分析などの結果が紹介されている．次に，被災した古文書の復旧活動や東日本大震災の経験を後世に伝えるためのアーカイブプロジェクト（「みちのく震録伝」と呼ばれている）など，意義深い活動が紹介されている．また，ウェブ情報とその解析という社会現象的な解析結果も述べられている．

東日本大震災を分析しているのは東北大学だけではない．他大学，政府機関，民間団体など様々な組織がこの震災について検討を加えている．しかし，震災域の中央に位置するという地の利を生かし，現場へ足繁く通って集めたデータによる分析や，様々な分野の研究者を抱える東北大学が総力を結集し学際的に行った分析は，たいへん多彩で奥深く，他者の追従を許さないと感じた．また，自分たち自身が被害者であるにも関わらず，これだけの研究を遂行していることに，私は感銘を受けた．見上げた研究者魂である．

唯一残念なのは，Ａ５版という本書のサイズや各章をコンパクトにまとめるという制限のためか，写真や図表類が小さく見づらいことである（評者の老眼が進んでいることも原因かもしれないが）．一部の写真・図については，別途，Web上に高解像度のカラー版が掲載されており，読者の便を図っているが，同様なサービスが他の写真・図についても期待される．

最後に，ある章に記述されているこの言葉を紹介して筆を置きたい．「今回の災害の第一の教訓は“備えがないことはできない”ということだった」．

（小嶋　智）

博物館だより

福井県立恐竜博物館

平成25年度特別展
発掘！発見！１億年の時を越えて～福井県恐竜化石発掘25年記念～

福井県は，平成元年（1989年）に日本で初めての本格的な恐竜化石発掘調査を開始し，これまでの25年の調査で３種類の新種の恐竜をはじめ，カメやワニ，貝や植物の化石など，多数の化石を発見し，研究してきました．また，タイや中国でも現地の研究機関と恐竜化石の共同発掘や調査を行い，恐竜の研究や全身骨格の復元も行っています．これらの国内外の成果を一堂に展示し，発掘の様子とその醍醐味を紹介します．

会期：７月12日（金）～10月14日（月・祝）
　ただし，９月11日（水），25日（水），10月９日（水）は休館
時間：午前９時から午後５時まで（入館は午後４時30分まで）

発掘調査によって復元された「白亜紀の福井」
©山本　匠

場所：福井県立恐竜博物館３階　特別展示室
観覧料：一般 1,200円，高校・大学生 800円，小・中学生 600円，70歳以上の方 500円（上記料金で常設展もご覧いただけます）　団体料金（30名以上）一般 1,000円，大学・高校生 600円，小・中学生 400円

関連イベント

特別展講演会「恐竜博物館の発掘」
　日時：８月25日（日）14:00～15:30
　講師：東　洋一　福井県立恐竜博物館
　場所：福井県恐竜博物館３階　講堂
　内容：勝山の発掘の歴史をひもときます．聴講無料．

特別展講演会「中国の恐竜発掘最新情報」
　日時：９月15日（日）14:00～15:30
　講師：徐　星　中国科学院古脊椎動物・古人類研究所
　場所：福井県恐竜博物館３階　講堂
　内容：中国の恐竜研究の第一人者が中国の恐竜研究の最新情報を紹介します．聴講無料．

特別展関連博物館セミナー「恐竜の島 九州天草 ―天草で発見される恐竜化石―」
　日時：10月13日（日）13:00～14:30
　講師：廣瀬浩司　御所浦白亜紀資料館

　場所：福井県恐竜博物館２階　研修室
　内容：九州の熊本県天草地域からは，国内最大級の獣脚類の歯をはじめ，白亜紀中頃から後期の恐竜化石が発見されており，現在も貴重な化石が発見されています．これらの恐竜化石についての講演です．また，九州の恐竜化石産地についても紹介します．聴講無料．

問い合わせ先：
　福井県立恐竜博物館
　〒911-8601　福井県勝山市村岡町寺尾51-11
　Tel：0779-88-0001（代表）
　http://www.dinosaur.pref.fukui.jp/

TOPIC　鳥が首岬の謎

正会員　**高山信紀**（(株) JPビジネスサービス）

1．鳥が首岬の謎

以前，米国ユタ州サンファン川（San Juan River）の「Gooseneck」や，愛媛県を流れる肱川中流の「鳥首」を訪れたことがあるが，いずれも地名は河川の蛇行を鳥の首に例えたことに由来する．

鳥が首岬は，新潟県上越市西方（糸魚川市寄り）に位置し，全国的にはそれほど有名では無いが国土地理院発行の20万分の１地形図や２万５千分の１地形図にはその名が記載されている．鳥が首岬の地名は何に由来するのだろう？国土地理院発行の２万５千分の１地形図では，鳥が首岬周辺に「Gooseneck」や「鳥首」のような河川の蛇行は見当たらなかった．また，岬を上空から見た地形も鳥の首とは関係なさそうだった．鳥が落ちたというような伝説でもあるのだろうかとインターネットで調べたが地名の由来は分からず，前から気になっていた．そこで，糸魚川・焼山温泉を巡る地質とサイクリングの旅に出かけたおり，Hさんの車で鳥が首岬を往復してもらった．しかし，それらしい地形は分からなかった．謎は深まった．

写真１「Gooseneck」（©Google earthより）

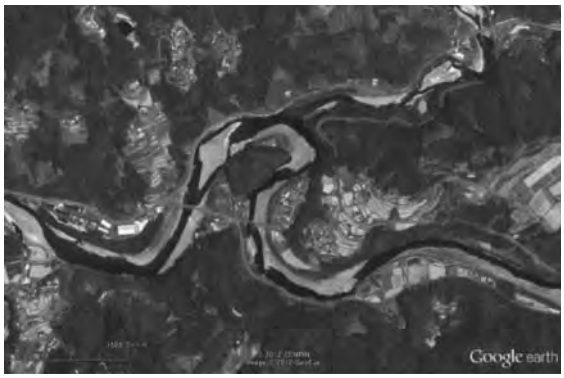


写真２「鳥首」（©Google earthより）

2．謎が解けた！

仕方がないので，旅から帰った後，上越市観光振興課に鳥が首岬の地名の由来を電話で聞いてみた．「分からないので調べてみます」ということだった．数日後，同課から携帯に電話が入っていた．翌朝こちらから観光振興課に電話したところ，「『鳥が首岬は名立川，桑取川の水源をなす粟立，三峰等の山々の尾根が北に延びて来て名立村大菅の東部で一旦標高200mに下り，更に頭を上げた様に高さを増し313m5となり下って段を作って海に入るその形が遠方より見ると鴨等の鳥の首を平らに置いたのに似ているからつけられた名称である』という文献がありました.」と教えて頂いた．また，上越市立高田図書館から，その文献は月橋正樹著『名立崩・親不知・上路の山姥』（1942年）であるとメールを頂いた．担当された方々の親切な対応に深く感謝した．

写真３「鳥が首岬」（©Google earthより）

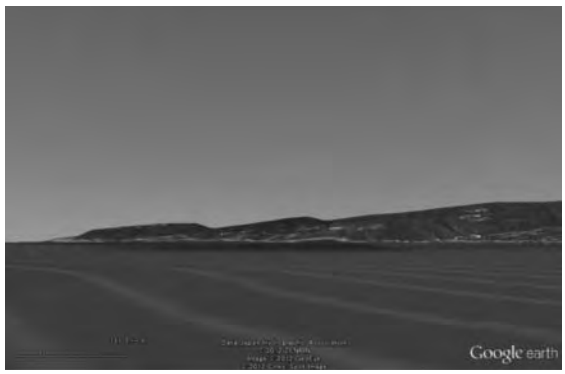


写真４　鳥が首岬（左端）の西方海上より岬方向を見た画像（©Google earthより）

その週末に©Google earthを操作してみた．本当だ，鴨が首を伸ばしているように見える！　「Gooseneck」や「鳥首」は河川の蛇行を高所から俯瞰して鳥の首に例えたのに対し，「鳥が首岬」は地形を横から見て鳥が首を伸ばしているように見たてたのだ（岬は嘴の先端）．昔の人たちにとって，鴨は季節を知らせる身近で大切な鳥で，鳥と言えば鴨を意味したのかもしれない．

「首」が頭部を指す場合もあることから，岬南方の鴨の頭部にあたる標高約300mの台を「鳥が首」と呼んでいるか図書館に問い合わせたところ，上越市名立区総合事務所に連絡して頂き，同事務所より「地元ではその台を鳥が首とは呼んでいないようです．鳥が首という地名は岬しかありません．なお，地名ではありませんが，その岬にある灯台にも鳥が首という名称がついています.」と，またも親切な回答を頂き，再度深く感謝した．なお，国土地理院発行の２万５千分の1地形図では，その台は三角点が設置され無機的に「三角台」と記載されている．

どこから見れば鳥の首のように見えるのだろう？©Google earthで見ると，陸上からでは難しいように思う．漁師などが岬西方の海上から陸地を見て鴨の姿を想い，鳥が首岬と呼ぶようになったのではないだろうか．

写真4のように首を伸ばした状態の鴨の写真をインターネットで探したが，大半は鴨が頭を上げて泳いでいる姿であった．昔の人たちは，鴨が首を伸ばしている姿（飛んでいる姿か，水に潜る直前の姿？）をよく見ていたのだろう．その観察力と想像力の豊かさを想う．

文　献

月橋正樹，1942, 名立崩・親不知・上路の山姥, p4
竹内圭史・加藤碩一・柳沢幸夫・広島俊男，1994,20万分の１地質図幅「高田」, 地質調査所

TOPIC

福島原発事故に伴う福島県の放射性物質汚染
― 汚染地域の住民から見た汚染の実態 ―（その1）

正会員　**千葉茂樹**（福島県立小野高校平田校）

The radioactive substance pollution of Fukushima Prefecture due to Fukushima Daiichi nuclear power plant accident : The actual condition of the pollution seen from the inhabitant of the polluted area（Part 1）
Shigeki CHIBA（Ono-Hirata High School, Fukushima Pref.）

1．はじめに

著者は，事故当時「福島市渡利」に居住していた．本稿では，汚染地域「福島市渡利」に居住していた人間の視点から汚染の実態を報告する．著者は今までに汚染の状況を報告してきた（千葉ほか2013など）が，本稿ではそれも含め，新たに「8．森林における放射性物質の濃集―楯状高放射線量土―」も記載する（その2原稿を参照）．この内容は，著者が知る限りにおいては報告例がなく初めての報告と思われる．発見の経緯なども含め詳しく記載する．さらに，今回，2011年6～7月の福島市渡利における地上1cmの実測値（cps）を Bq/cm^2（Bq/m^2）に換算した．驚嘆する値である．なお，原発事故直後は放射線計が入手しにくい状態が続き，著者もその入手に苦労した．その後，放射線計を買い足している．本論には多数の放射線計が登場し理解しにくい点がある．原発事故直後の混乱を考慮しご容赦いただきたい．なお，測定器毎の換算はそれぞれの項目で説明しているが，本項目「はじめに」の最後に，これらをまとめ「単位」「測定機器」「換算式」として掲示した．

また，隣接県の仙台周辺の汚染状況については石渡明氏のHP（http://www.cneas.tohoku.ac.jp/labs/geo/ishiwata/RadiationSendai.htm）が詳しいので，本稿とあわせてご覧いただきたい．

福島第一原子力発電所は，2011年3月11日の東北太平洋沖地震の直接間接の影響により，制御不能になった．1～3号炉は炉心溶融を，4号炉は火災を，起こした．更に1・3・4号炉では，建屋が水素爆発で吹き飛んだ．これら一連の事故により，放射性物質が大量にかつ広範囲に飛散した．福島県の汚染は，3月15日が特に著しい．この日，放射性物質を含んだプルームは，南東風に載り浪江町津島や飯舘村などを，更に北風に載り中通りの福島市･二本松市･本宮市・郡山市などを，濃厚に汚染した（第1図）．

放射線が人体に及ぼす影響（福島原発事故も含めて）に関しては，いろいろな見解がある．また，福島原発事故による放射性物質の汚染に関しても，多種多様な報告がある．原発事故による放射性物質の汚染および発生した疾患で最も重要なのはチェルノブイリ原発事故の報告である．しかしこれもロシア政府報告・ウクライナ政府報告のように見解が大きく分かれている．更に，福島県などの汚染地域では，原発事故の放射性物質の汚染に対して拒絶姿勢をとる方も存在する．しかし，著者は汚染の実態を詳細に記録することが極めて重要であると考えている．これは，将来（利害関係者がいなくなった段階で），放射性物質による汚染及びこれに伴う疾患の再検証が必ず行われる．その際に，汚染の実態を示す基礎データが極めて重要になると考えるからである．野外調査を行ってきたフィールドワーカーは，その特性を生かし詳細な汚染地図を作っていく必要があると考えている．

なお，本稿の中で「ホットポイント」という言葉を使用している．一般に比較的広範囲の高放射線地域を「ホットスポット」と呼ぶが，著者はこれより狭い範囲（数平方メートル以下）の高放射線点を「ホットポイント」と呼んで区別している．

・単位

cps：測定器が計測した1秒間当りの放射線量．counts/sec.
cpm：測定器が計測した1分間当りの放射線量．counts/min
Sv：等価線量．シーベルト．人体組織に対してどれだけのダメージを与えるか．組織や臓器によって異なる．皮膚組織に対しては，Sv≒Gy（物体が吸収した放射線量）．
Bq：ベクレル．放射性物質が1秒間に放出する放射線の数．
/h：1時間当り．/cm^2：1cm^{2}当り．/m^2：1m^{2}当り．/kg：1kg当り．
μ：×10^{-6}．

・測定機器

地上1cm（物体表面）の測定――GM1，LUDLUM3，CoMo170
空間放射線量（1m）の測定――TCS-172B，ИР-001，PM1703M，GammaRAEIIR

・地上1cmの実測値の換算（^{137}Csのγ線に関して）

LUDLUM 3 ＋44-9の実測値（cpm）×0.0076 ⇒ GM1の値（cps）
GM 1 の実測値（cps）×0.456 ⇒ Bq/cm^2
GM 1 の実測値（cps）×4560 ⇒ Bq/m^2

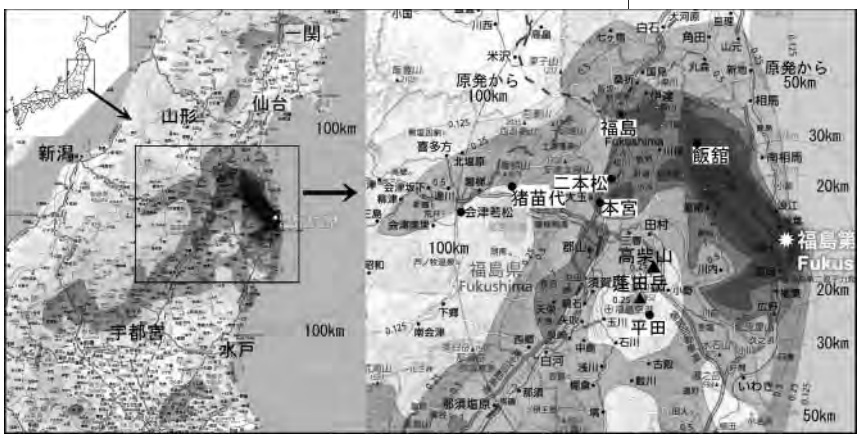
・メーカーの換算式（測定値 ⇒ ^{137}Csのγ線量 μSv/h）

GM 1 の実測値（cps）÷ 3 ⇒ μSv/h
LUDLUM 3 ＋44-9の実測値（cpm）÷ 2 ÷330 ⇒ μSv/h
（プローブをビニルで覆うとβ線も計測するので，2で割りβ線分を除く．実測ではβ線量とγ線量はほぼ同じであった．）

2．福島市渡利の汚染を体験して

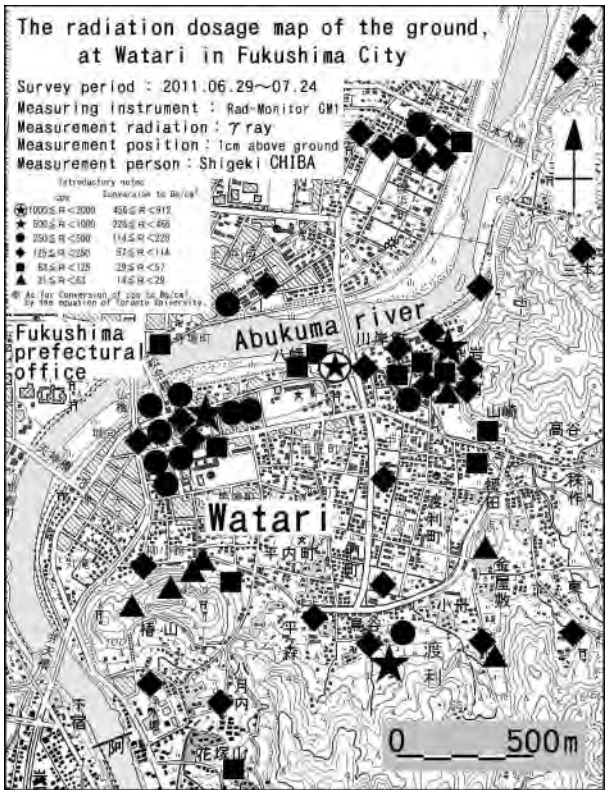
著者は東北太平洋沖地震の発生した2011年3月11日には，福島市渡利字岩崎町に居住していた．翌12日から福島第一原子力発電所の原子炉が不安定になった．著者は，12日奥羽山脈を越して猪苗代町に避難し住宅を確保した．猪苗代町への避難理由は，「放射性物質の多くは空気より数倍重いため高い山を越す量は少ないであろう」という判断であった．避難後は，仕事のため福島市と猪苗代町を行き来していた．7月30日，猪苗代町に完全に転居した．

この間の著者の体験を記載する．まず，福島市の主たる汚染は3月15日の夕方であった．著者は，この時には猪苗代町に避難していた．3月20日，避難先の猪苗代町から福島市に戻った．このとき，目と手に違和感を覚えた．翌21日，左目が腫れ上がり30日まで続いた．この間，目の洗浄を繰り返した．同じ時期，手の指先が針で突くような痛みと痒みを感じた．こちらは，



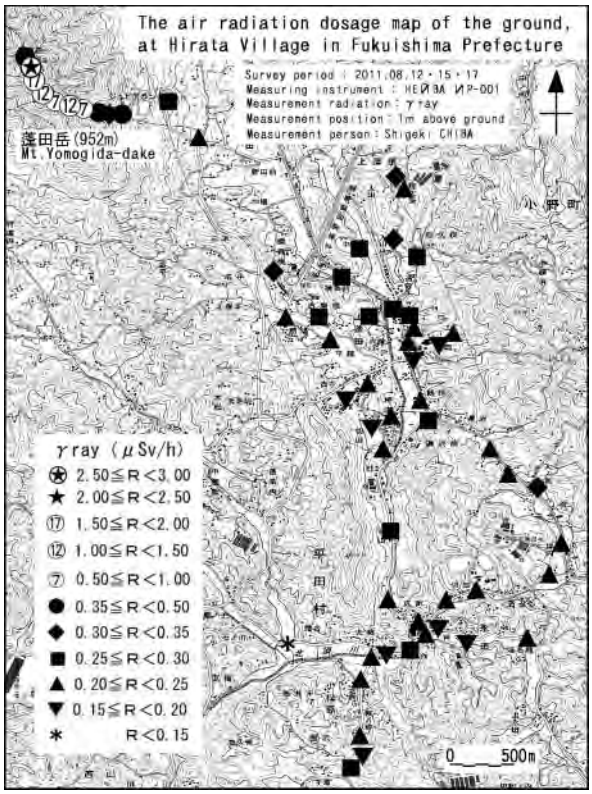
第1図　福島原発事故の放射物質の汚染状態．早川（2013）を使用した．

Fig. 1　The contamination of the radiation material Fukushima Daiichi accident. Hayakawa (2013) is used.



第２図　福島市渡利の地表の放射線量分布図．測定はRad-Monitor GM1．国土地理院の１/2.5万地形図を使用した．

Fig.2　The radiation dosage map of the ground at Watari in Fukushima City. Measurement using Rad-Monitor GM1. The 1/25,000 scale maps of the Geospatial Information Authority of Japan (GSI) is used.



第３図　平田村の地上１mの放射線量分布図．測定はHEЙBA ИP-001．国土地理院の１/2.5万地形図を使用した．

Fig.3　The radiation dosage map at 1m above the ground at Hirata Village in Fukushima Prefecture. Measurement using HEЙBA ИP-001. The 1/25,000 scale maps of the Geospatial Information Authority of Japan (GSI) is used.

なかなか治らず，５月下旬まで続いた．これらの症状は，20日に福島市に戻り放置していた乗用車を触った後からであった．なお，放射線計入手後の2011年６月にこの乗用車を測定したところサイドウインドー下の植毛部で40cps（GM１，後述）の放射線量を感知した．

更に，事故直後から７月下旬までの状況で，特に気がついたことを書く．①鳥類がいなくなった．②地面を這うように生育する「コモチマンネングサ」の葉の色の変化であった．５月中旬，福島市から南下し小野町まで行った際，葉の色が黄色から緑色に徐々に変化していった．福島市では黄色であったが，田村市船引町や小野町では緑色であった．放射線量は，福島市で高く，南下するに従い低下し田村市船引町に入ると急激に低下している．放射線計の入手前で，放射線量は公的機関発表のデータである．

乗用車の汚染について付け加える．2011年８月，著者は猪苗代町で，浪江町から避難してきた乗用車を測定したところ40cps（GM１）の放射線量であった．このほか，郡山市の自家用車からも放射線が検出された．なお，検出位置は，フロントガラスの下，サイドガラスの下，フロントグリル，タイヤハウスなど車によって様々である．2011年８月，著者は磐越自動車道（猪苗代－小野）をほぼ毎日走行したが，車の後部に溜まったアスファルト粒から微量ながら放射線が検出できた．更に，2013年４月現在，中通りを走行している車では，未だに微量の放射線が検出されることが多い．

３．放射線計

放射線計は，原発事故直後には非常に入手しにくい状況で，しかも高価であった．著者が放射線計を入手できたのは2011年６月で，しかも空間放射線量を測定する器械ではなく，放射線源を測定する「RPI Instruments製Rad-Monitor GM１（^{137}Csのγ線で校正）」であった（以下，GM１）．これを使い，福島市を中心に地上１cmの放射線量を測定した．

その後は，多種多様の放射線計を試用し，測定に適するものを選別した．主に使用した機種は，以下の通りである．空間放射線量計として「ＨＥＪＢＡ製ＩＰ-001」「日立アロカ製TCS-172B」「POLIMASTER製PM1703M」「RAE Systems製GammaRAEIIR」，地上１cmの放射線量測定用として「RPI Instruments製Rad-Monitor GM1」「LUDLUM製3型＋44-9プローブ」である．

さらに，2013年６月下旬，SEA製CoMo170を入手し，地表１cmの放射線量（Bq・Bq/cm^2）の測定を始めた．

４．放射線量計の比較・換算

空間放射線量の測定は，2011年８月からウクライナ製「ＨＥＪＢＡ製ＩＰ-001」を使用した．さらに，2012年４月からは「日立アロカ製TCS-172B」を使用した．更に常時携帯用として「POLIMASTER製PM1703M」「RAE Systems製GammaRAEIIR」も使用している．

このうち，主力として使用した「TCS-172B」と「ＩＰ-001」を実測・比較した．「ＩＰ-001」は，１μSv/hでは「TCS-172B」とほぼ同じ値，0.1μSv/h付近では「TCS-172B」の1.25倍，４μSv/ｈでは「TCS-172B」の0.75倍程度の値を表示した．

「TCS-172B」と「GammaRAEIIR」「PM1703M」の比較では，「GammaRAEIIR」は「TCS-172B」とほぼ同じ値を表示したが，「PM1703M」は「TCS-172B」の約20%低い値を表示した．

なお，「TCS-172B」「GammaRAEIIR」「PM1703M」の各機種について，２～３台で比較したが，それぞれ10%程度の個体差があった．

地上１cmの放射線量の測定には，２機種を用いた．2011年６月から測定に使用したのは，「Rad-Monitor GM1」（以下GM1）で，2011年10月からは「LUDLUM製３型＋44-9プローブ」（以下LUDLUM ３＋44-9）も使用した．2012年６月30日，飯舘村

「ニュートラックいいたて」において，上記２機種を使い「黒い高放射線土」（後述）を実測し比較した．実測値の代表的な値は，「LUDLUM３＋44-9」50000cpm，「Rad-Monitor GM1」380cpsであった．実測値から換算値を求めると「LUDLUM３＋44-9の実測値（cpm）×0.0076 ⇒ GM１の値換算（cps）」になる．

５．福島市渡利の放射線量（2011.６～７）

2011年６月中旬，「RPI Instruments製Rad-Monitor GM1（^{137}Csのγ線で校正）」を入手した．器械の特性を知るべく試の測定を２日間実施した後，地上約１cmの放射線量を測定した．調査目的を「短期間に，測定地点を多く」とし，プローブにビニルのみをかけて測定した．第１図は福島市渡利の2011年６月29日～７月24日の測定結果である（第２図）．放射線量は125～500cpsの地点が多く，500cps以上の地点が点在した．最高は渡利字八幡町の1300cpsであった．この近くには渡利小学校がある．また，これらの調査で，空間放射線量（地上１m，この時はGM１で測定）が高いところでは，地表に高放射線土が存在する場合が多かった（後述）．さらに著者の自宅の庭（土やコンクリート塀の表面）は約40cpsで，最大で130cpsのところもあった．

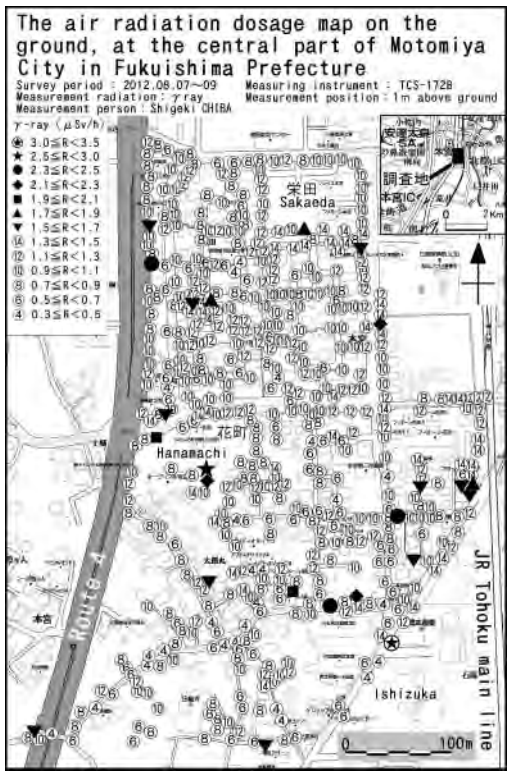
著者はこれらの実測した放射線量分布地図を講演等で話してきた．その中で，測定値の単位（cps）では「どのくらいの放射線量なのかわからない」との意見が多かった．このため測定値（cps）をBq/cm^{2}への換算することを試みた．2013年５月，飯舘村「ニュートラックいいたて」において「黒い高放射線土」を実測し比較した．すなわちプローブの覆いを（なし，ビニル，アルミ箔）の３種の状態でそれぞれ測定し．その値を比較した．その結果は３種ともほとんど同じ値であった．従って，測定に用いたGM１は「γ線のみを感知している」と見てよい．次に，トロント大学の換算式（ネット公開）で，測定値（cps）からBq/cm^{2}への換算を行った．それによれば，測定値（cps）×0.456⇒Bq/cm^2〔測定値（cps）×4560⇒Bq/m^2〕となる．なお，この値はバックグラウンドがゼロに近い場合であり，渡利の場合はバックグラウンドがかなり高いので誤差が相当量含まれる．

2013年６月末，SEA製CoMo170を購入した．高放射線土の表面をRad-Monitor GM１とCoMo170で実測し，測定値（GM１－cps，CoMo170－Bq/cm^2）の比較を行った．７月７日，飯舘村「ニュートラックいいたて」の駐車場における計測では，GM１（280cps），CoMo170（140Bq/cm^2）であった．７月10日，平田村西山の旧西山小学校のテラスにおける計測では，GM１（15cps），CoMo170（7.34 Bq/cm^2）であった．計測数は少ないが，「GM１の測定値（cps）×0.5≒CoMo170の測定値（Bq/cm^2）」となる．この値はトロント大学の換算式「GM1の測定値（cps）×0.456⇒Bq/cm^2」とほぼ同じである．トロント大学の式を用い換算し考察する．福島市渡利における2011年６～７月の地表１cmの放射線量はすさまじい値となる．まず，著者宅の庭は18 Bq/cm^2（18万Bq/m^2），最大で59 Bq/cm^2（59万Bq/m^2）となる．さらに，福島市渡利には57～228 Bq/cm^2（57万～228万Bq/m^2）の高い放射線を出す地面が至る処にあった．最高値の渡利字八幡町では593 Bq/cm^2（593万Bq/m^2）であった．放射線管理区域が４万Bq/m^{2}以上であることを考えると，汚染が如何に深刻であるかがよくわかる．

６．平田村の空間放射線量（2011.８）

平田村は阿武隈山地中央部にあり，福島第一原子力発電所から，南西約40kmに位置する．2011年８月中旬，平田村の中心部の調査を行った（第３図）．放射線計は「HEЙBA ИP-001」で地上１mの空間線量を測定した．測定結果は，平坦部（標高約500m）では0.15～0.30μSv/hであった．また，蓬田岳（標高952m）では，標高が高くなるにつれて放射線量も増加し，山頂部では2.5μSv/hであった．全体の傾向として，平坦部では放射線量は低いが，山岳部では放射線量が高かった．

１年後の2012年８月にも日立アロカ製TCS-172Bで地上１mの放射線量を測定した．その結果，平坦部の平田村上蓬田では約0.15μSv/hで，１年前より低下していた．ただし，局部的な上昇も見られ，最高値は0.55μSv/hであった．蓬田岳頂部（山頂より標高で約５m低い）では，3.16μSv/h（PM1703M）とやや上昇していた．



第４図　本宮市中心部の地上１mの放射線量分布図．ゼンリンのインターネット地図を使用した．国土地理院の承認平13東使第８号．

Fig.4　The air radiation dosage map at 1m above the ground at the central part of Motomiya City in Fukushima Prefecture. The map by Zenrin is used. The usage is approved by the GSI "H13 toshi. No.8".

７．本宮市の空間放射線量（2012.８）

著者はそれまでの実地調査から，空間線量が「狭い地域においても局地的に高低がある」ことに気がついた．このことから，高汚染地域において，高密度に測定し，局地的な放射線量の変化を明らかにする必要性を感じた．このため，2012年８月，高い汚染地域の本宮市の中心部において，高密度な調査を行った．調査密度は10m×10mに１地点程度である．測定は，放射線計「日立アロカ製TCS-172B」・高さ「地表１m」・時定数「30秒」で行った．第4図はその結果である．空間放射線量は，傾向として南西方面で低く（0.3μSv/h～0.7μSv/h）北東方向で高い（0.3μSv/h～1.9μSv/h）．地形的には，北西部が丘陵地で高く，北東部は阿武隈川沿いで低い．また，所々に1.7～3.5μSv/hの高放射線量地点（ホットポイント）が点在した．

この結果から，放射性物質は，全体として地形的に高い所から低い所に移動しているように読み取れる．また，局地的な移動・集積も読み取れる．これらの主要因は，放射性物質が雨水で移動したためと推定される．

（その２に続く）

文　献

千葉茂樹，2011，2012，2013，福島原発事故の汚染．そくほう．670，677，678，679，681，683，685,地学団体研究会．

千葉茂樹・諏訪兼位・鈴木和博，2013,福島県の放射性汚染土壌－とくに黒い物質－の野外の産状について．名古屋大学加速度器質量分析計業績報告書．ＸＸⅣ．78－96．

早川由紀夫，2013，福島原発事故の放射能汚染地図．早川由紀夫の火山ブログ．http://kipuka.blog70.fc2.com/

※なお，本原稿の全文（その１，その２，英文要旨）は，学会HPから閲覧していただけます．
http://www.geosociety.jp/faq/content0463.html

2013年度春季地質調査研修実施報告

第１図　清和県民の森の林道沿いでのルートマップ作成．周りの地層は，清澄層下部の滝つぼタフ（Ky8）からバーミューダタフ（Ky7）の間のタービダイト砂岩優勢互層．

はじめに

標記の研修を2013年５月27日（月）～５月31日（金）に実施した．今回の参加者は定員の６名（男性５名，女性１名）であった．その内訳は，地元（千葉県茂原市）の建設系コンサルタント会社（さく井所属）から土質改良出身の参加者が１名（男性）で，他の５名は，いずれも，石油・天然ガスの開発会社（探鉱所属）からの参加者で，地質出身が4名（女性１名），物探（地球物理）出身が１名であった．みなさん，入社２年目から５年目で，年齢的には25歳から29歳の若手技術者であった．講師は，産総研地圏資源環境研究部門客員研究員の徳橋秀一と産総研地質情報研究部門主任研究員の辻野　匠である．

５日間のスケジュール

各日の実施概要は次の通りである．

５月27日（月）（曇り）：JR外房線君津駅に午前11時集合後，小糸川上流の清和県民の森に移動．山ヒル対策を実施したのち，清澄向斜南翼に位置し，清澄層下部の厚いタービダイト砂岩優勢互層が分布する林道沿いで，主な凝灰岩鍵層の観察，クリノメーターを使った層理面の走向・傾斜の測定法，クリノメーターを使ったルート図の描き方などの練習を行った後，ルートマップの作成作業を実施した（第１図）．夜は清書などの整理作業を行った後，互いのルートマップを比較した（第２図）．また，研修地域の地質や地層の特徴について，配布したテキストを使って復習と予習を実施した．

５月28日（火）（曇りときどき雨）：清澄背斜北翼に位置し，黒滝不整合発祥の地の小櫃川支流猪の川（通称“黒滝沢”）の黒滝で不整合の状況を観察するとともに，沢歩きになれながら，猪の川沿いに分布する安野層，清澄層，天津層それぞれの岩相の特徴や主な凝灰岩鍵層の確認，重要な断層についての確認と断層面の走向・傾斜の測定法の習得などを行った．特に清澄層と天津層の境界付近では，前日の清和県民の森の林道（清澄向斜南翼）で，清澄層下部の厚いタービダイト砂岩優勢互層中に上下に分散しながら挟まっていた凝灰岩鍵層が，清澄背斜北翼では，順序良く産出するものの間にタービダイト砂岩が全くなく，上下に密集して産出してその間の厚さが極端に薄くなっていること（地層の背斜軸への収れん現象）を確認した（第３図）．夜は，講師の昔の野帳に書かれたルートマップなどを参照するとともに，テキストその他の資料を使いながら，こうしたルートマップづくりや凝灰岩鍵層を利用してこの地域で得られた研究成果について学習した．

第２図　清和県民の森の林道沿いで初日の午後作成したルートマップの比較図．ルートマップには，ルート図の他に，岩相の特徴，凝灰岩鍵層の分布，走向・傾斜なども記入されている．

５月29日（水）（曇りときどき雨）：猪の川沿いの安野層，清澄層，天津層の分布域のルート図を作成しながら，前日観察し確認したことがら（岩相，鍵層，断層など）を記載してルートマップを作成した（第４図）．夜は清書作業や復習などを実施．

５月30日（木）（雨ときどき曇り）：この日は強い雨が断続的に降るという予報から，林道や遊歩道沿いでの作業に予定を変更した．午前は，清澄背斜軸部近くの南北両翼の天津層と清澄層境界部付近の地層・凝灰岩鍵層を観察するとともに，北翼の三石山林道沿いでは，猪の川沿いで観察した清澄層のHkタフ（Ky21）を詳しく観察．この後，三石山に行き，三石観音のご神体となっている三石など，黒滝不整合直上の凝灰質砂礫層（黒滝層）を観察した．午後は，より新しい時代のより変形の少ない地層を対象に地層の見方を強化する観点から，養老川沿いで，上総層群の大田代層を中瀬遊歩道で，黄和田層を粟又の滝遊歩道で観察した．中瀬遊歩道では，弘文洞跡のところで，タービダイト砂岩表面をたわしでこすった上でバケツで水をかけるなどして，タービダイト砂岩層の堆積構造を浮き彫りにして詳しく観察するとともに，粟又の滝遊歩道では，一見泥岩層にみえる地層も詳しく観察するとタービダイト砂岩中の泥岩偽礫の密集体である例がたくさんあることを観察した．夜は，テキストなどを使って，研修地域の地質・地層の特徴とこれまでの研究成果について再度詳しく説明し，理解を深めるようにした．

５月31日（金）（晴れ）：まず，外縁隆起帯をなす嶺岡構造帯（嶺岡山地）を構成し蛇紋岩中に散在する代表的なブロック（層状石灰質チャートと枕状溶岩のブロック）を観察した．その後，東海岸の勝浦海中公園において，猪の川や三石山林道で観察した清澄層中部のHkタフを再度観察し，凝灰岩鍵層が広域的に連続するとともに前後の岩相が小櫃川流域とは変化していること（同時異相関係）を確認した．そして次に北隣のボラノ鼻に移り，清澄層上部のタービダイト砂岩優勢互層を直接覆う黒滝不整合を観察し（第５図），猪の川沿いで観察した安野層が，ここでは全部浸食されて存在しなとい不整合下での侵食現象を体験的に理解することができた．そしてボラの鼻からもどる途中では，それまで何度かみてきた清澄層上部のタービダイト砂岩層の直上にみられるタービダイト泥岩と非タービダイト泥岩の特徴の違いを識別できるように，観察力強化の訓練を行った．この後，勝浦海中公園の浜辺で，恒例の修了証書の授与を行い（第６図），午後４時前に外房線のJR茂原駅で解散した．

今回の研修の特徴

今回は研修３日目に関東地方が梅雨入りするなど，雨の影響で当初の予定を一部変更した．特に，研修の３日目がときどき

第３図（左）猪の川沿いの清澄層と天津層境界付近における滝つぼタフ（Ky8）からバーミューダタフ（Ky7）の間．厚さと岩相に顕著な違いがあることが，第１図との比較で明らか（背斜軸へ向けた地層の収れん現象）．第４図（右）猪の川沿いでのルートマップ作成の様子．ルート図をつくりながら，岩相，凝灰岩鍵層の位置，地層の走向・傾斜，断層などの情報を記入する．

雨，４日目が強い雨混じりの天気という予報が出たために，安全と作業内容を考慮して，例年２日目から３日間かけて行っていた猪の川沿いでのルートマップづくりを２日間で終えるようにやり方を一部変更した．代わりに，雨の日でも実施可能な地層観察用の資料を事前に用意し，４日目は上総層群の代表的な地層を養老川の遊歩道沿いで観察するなど，地層の見方，観察法を充実する形で，雨による影響を最小限にとどめるようにした．

昨年は潮の引きがもうひとつ弱かった上に波が強くて，東海岸のボラの鼻先端の黒滝不整合を真正面から観察することができなかったが，今回は潮の引きもよく，先端部まで行って迫力があることで知られるボラの鼻の黒滝不整合をまじかに観察することができた．また４日目には，三石山山頂（三石観音）付近でも黒滝層を観察するなど，黒滝不整合前後の地層を３ヶ所で観察したことになる．

今回，３日目，４日目は，雨混じりのなかでの作業となったが，雨の中での作業も可能なように，傘と雨合羽を用意しておいたこともあり，それなりの作業を実施することができた．また幸い，風邪を引く人も怪我をする人もなく，無事終了することができた．

山ヒル対策

山ヒルの被害が少しあったので，ここで簡単に言及しておく．昔は清澄寺周辺にしかいなかったシカの分布域が周辺に広がるにつれ，山ヒルも房総のかなり広い範囲に生息するようになった．研修中の山ヒル対策としては，最近は，地元の看板などで推薦されている方法に習って，毎朝長靴とズボンの間をガムテープ（布テープ）でぐるぐるまきつけるとともに，山ヒルが付着しそうな場所での行動に気をつけ，その都度互いにチェックし，付着を発見した際には速やかに塩を振りかけて落とすことが定番となっている．山ヒルは，草むらや湿地のところに好んで潜んでいることから，川の中から林道に上がる際や林道脇で作業する際に長靴に付着しやすく，その都度よくチェックし付着していた際には塩を振りかけて落下させた．このように布テープと塩の準備が大切である．特に布テープによるぐるぐる巻きは，長ぐつの中への山ヒルの侵入防止のみならず，川歩きの際の水の混入防止にも役立つとともに，布テープ同士の継ぎ目のところに山ヒルが閉じ込められトラップされることも多いことから一石三鳥である．また，付着した山ヒルに塩を少し多めにかけるとナメクジと同じく急速に収縮して落下する．山ヒルは雨の日に特に活発化することもあって，今回は塩の出番が多かった．これまで被害者が出てもひとり程度であったが，今回は２人が山ヒルに１ヶ所ずつかまれた．ただ見つけるのが早かったためか，幸いあとに尾を引くことはなかった．このように，事前の準備と必要な注意をしていれば特に怖がることはないといえる．

おわりに

研修実施中は，参加者はルートマップづくりなどの作業に追われ，写真を撮っている時間がないことから，参加者への記録と復習になることを第一に，今回も講師が撮った写真をもとに研修中の出来事を日づけごとにパワーポイントにまとめ，それらに簡単な説明を加えた上で，研修の次の週末には参加者に届くように送った．研修参加者がこれらのファイルを参照して復習していただくならば，また会社での報告などの際に，適宜編集しながら活用していただければ，本研修への理解はさらに広まり深まることが期待される．

本研修実施にあたり，毎回のことながら，研修の主現場として利用させていただいた東京大学千葉演習林の関係者の方々をはじめ，関係機関・関係者の方々に厚くお礼を申し上げたい．今年は秋にも実施予定であり，関心のある方は是非参加を検討していただきたい．なお，紙面の都合から，本報告では割愛したより多くの写真が地質学会のHP上で掲載されていますので，関心のある方は是非ご参照ください．

（徳橋秀一・辻野　匠）

第５図（左）東海岸の勝浦ボラの鼻先端部の黒滝不整合．清澄層上部のタービダイト砂岩優勢互層を削り込んで，上総層群最下部の黒滝層が覆う．
第６図（右）勝浦海中公園をバックにした地質調査研修修了証書受理後の記念写真．参加者には，この他に，技術者継続教育単位（CPD）40単位が与えられる．

2013年地質の日記念イベント

街中ジオ散歩in Tokyo「石神井川がつくる地形の移り変わりと地質」

今春，日本地質学会は日本応用地質学会と共同で，関東支部の協力の下，地質の日記念行事として標記の徒歩見学会を開催しました．

昨年の地質の日行事の徒歩見学会は東京千代田区内で実施しましたが，今回は北区の石神井川の河川争奪と地質をテーマに実施しました．

日時：2013年５月12日（日）
参加者数：39名（うち小中学生２名）
コース：10:00JR田端駅北口前集合→谷田川→中里貝塚→飛鳥山公園（昼食）→逆川→石神井川沿い音無さくら緑地（露頭）→名主の滝公園16:30解散（図１）
講師：池田　宏氏（深田地質研究所）
　　中山俊雄氏（防災科学技術研究所）
幹事：中澤　努，伊藤谷生，細矢卓志，細根清治，方違重治，加藤　潔，緒方信一，長谷川貴志，原　弘
主催：日本地質学会・日本応用地質学会
共催：深田地質研究所
後援：東京都地質調査業協会
協力：日本地質学会関東支部

街中ジオ散歩の状況

当日は雨上がりの晴天に恵まれ，参加者一同，楽しく出発しました．午前中は，昔，石神井川だった広い谷筋（谷田川）の凹みに驚き（写真１），また中里貝塚が縄文貝加工工場だったことに感心し（写真２），川と海の両方によって形造られた地形を足で感じながら歩きました．午後は石神井川が荒川に短絡後，逆に流れるようになった逆川跡の“へび道”を歩き（写真３），石神井川旧蛇行部での東京層の泥岩と砂岩の露頭（写真４）からの岩清水に風情を見，ゴールは名主の滝で涼を得て，１万５千歩にも及ぶ，盛りだくさんの会でした．

参加者の方々の声

今回のゆるい？企画は，参加者の皆さんにどのように映ったでしょうか．参加者の皆さんにアンケートをお願いしました．

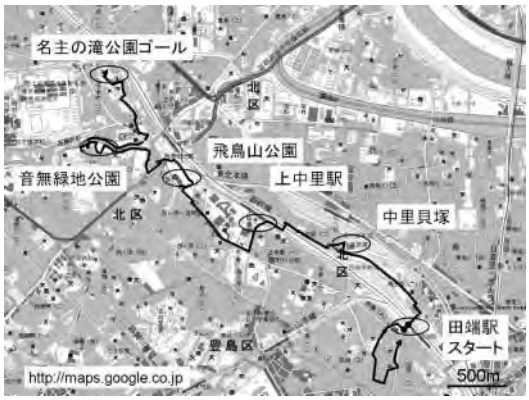


図１　街中ジオ散歩　徒歩ルート

アンケート結果

１）今回の「街中ジオ散歩」を知ったきっかけ　今回のイベントを知ったきっかけとして，学会からの案内，メール，SNS，地図中心，ジオスクーリングネット，ネット検索，との回答がありました．今後，イベント等は，キーワードを考えて，早期に学会HPに掲載することが大切と思いました．

２）そのほか，感想など　参加者からの感想によると，歩いて地形・地質を感じながら時間を遡ってロマンに浸る今回の企画は，総じてとても良かったようです．ただ，皆さんから１）スタッフを含めて50名もの大勢が狭い道を歩くことでのきめ細かな見学と安全との両立，説明について少人数のグループ分けをするなど，参加者がより満足できる体制づくり，２）熱中症対策，３）雨天時の昼食場所対策，などについてご意見を頂き，スタッフも身にしみて感じましたので，今後改善したいと思います．

【参加者の感想】今回，念願の「地質の日イベント」に参加することができました．というのも，私の職場は博物館．つまり「地質の日イベント」を行っている側にいるため，自身のイベントの日と重なるなど，これまでなかなか参加の機会が得られずにいました．また，今回のイベントに参加申し込みをした段階では，私はキャンセル待ちであったこともあり，この「地質の日イベント」は，かなり人気であることが伺えました．「地質の日イベント」に参加する側になるというのは新鮮で，非常に楽しみでした．

イベント当日は晴天に恵まれ，５月にしては暑いぐらいの，

写真１（左上）田端駅上の台地にできた川跡の凹地
写真２（右上）中里貝塚での説明
写真３（左下）くねくね逆川の“へび道”
写真４（右下）音無さくら緑地露頭前で記念写真

絶好の巡検日和．集まった参加者は約40名と，ちょっと多人数で大丈夫かなと思いましたが，講師の池田先生と中山先生以外に，9名ものスタッフが同行しており，大勢の参加者にも目が行き届くような配慮がなされていることには感心しました．また，このイベント中は，参加者のみなさんが講師の先生方やスタッフのみなさんに気軽に質問をしやすい，いい雰囲気であったことが印象的です．

講師の池田先生は，小学校へ出向いて子どもたちに授業をされているということもあり，その話の仕方は，易しい言葉を使っていてとても解りやすく，しかも情熱に満ち溢れており，聞いていてとてもワクワクしてくるものでした．特に，「氷期には川が元気になる」という表現が心に残っています．

普段，地図上ではよく見ていて，知っているつもりになっている場所も，実際に現地に赴き，地形を体感し，説明を受けながら歩くことで，新たな発見や気付きも生まれました．歩いている場所の，頭のずっと上をかつて川が流れていた時のこと，すぐ近くで磯の香りがしていたであろう時のことなどを想像しながら歩くと，東京の街中でも，壮大な地球の営みの感じることができました．やはり，フィールドに出て学ぶのはいいものだと，再認識させられました．また，今回のルートにあった貝塚は，いわゆるゴミ捨て場の貝塚ではなく，貝工房跡であろうという話を聞くなど，地形や地質にとどまらない幅の広い話を聞くことができた点も良かったです．

この「地質の日イベント」を通して，多くの参加者の方も，これまで以上に地質への関心や理解を深められたのではないかと思います．私も，自身が行う同様のイベントでは，参加者の方にそう思って頂けるような努力をして参りたいと思います．今後また機会があれば，このようなイベントに参加し，勉強させて頂きたいと思います．最後になりましたが，講師の先生方とスタッフのみなさまに，この場を借りてお礼申し上げます．

（埼玉県立川の博物館　杉内由佳さん）

謝辞　この徒歩見学会の開催にあたって，講師の池田　宏氏，中山俊雄氏，公益財団法人深田地質研究所，一般社団法人東京都地質調査業協会の皆様には大変お世話になりました．また日本地質学会関東支部幹事会の皆様，日本応用地質学会の幹事の皆様には当日スタッフとして運営にご尽力いただきました．心から感謝申し上げます．

（文責：**緒方信一**）

北海道支部記念展示

豊平川と共に―その恵みと災い

標記展示を北海道大学総合博物館・日本地質学会北海道支部・日本応用地質学会北海道支部・北海道応用地質研究会・北海道地質調査業協会・（独）産総研地質調査総合センター・（地独）北海道立総合研究機構地質研究所・札幌市博物館活動センターとの共催，（財）宇宙システム開発利用促進機構・北海道大学附属図書館・北海道大学文書館などの協力により，北海道大学総合博物館企画展示として4月23日（火）から6月2日（日）まで開催しました．同館で行われたこれまでの「地質の日」記念展示は以下のようで，今年で第6回目となりました．

・ライマンと北海道の地質（2008年）
・支笏火山と私たちのくらし（2009年）
・わが街の文化遺産「札幌軟石」‐歩いた！探した！見つけた！（2010年）
・豊平川と私たち－その生いたちと自然（2011年）
・私たちの生活を支える金属鉱床―札幌周辺の鉱山を例に―（2012年）

この一連の企画では，地質学が私たちの身の回りの自然や暮らしにいかに関わっているかを，北海道のフィールドを通じて紹介しています．今回のテーマは『豊平川と共に―その恵みと災い』です．札幌の街は豊平川扇状地に建設され発展してきました．豊平川はその豊富な河川水と伏流水・地下水によって，札幌の水源として飲料・水運・動力源などで大きな役割を果たしてきた札幌の母ともいうべき川です．しかし，一方では豊平川は明治以来たびたび札幌の街に大水害をもたらしています．網状河川である扇状地に形成された街の宿命でもありました．参観者のアンケートによると，現在の護岸された豊平川からは想像しにくい（？）かつて起こった大洪水の様子に興味をもっていただいたようでした．

写真1　展示会場の写真．左側に映写立体模型．

写真2　北大植物園での市民巡検の一コマ．

今回の展示では，下記8項目のサブテーマに沿って，パネルを中心に展示しました．

＊開拓時代の豊平川とその利用の歴史
＊運河の開削
＊豊平川（札幌）の地名とアイヌ語
＊豊平川の洪水とその対策
＊札幌の水道の歴史
＊豊平川の古流路とメム
＊豊平川にまつわるいろいろ
＊札幌の市街地の変遷

展示の目玉の一つは，新たに作成した豊平川扇状地の立体模型の上に，古流路と市街の変遷を映像で映し出す装置で，動きの乏しいパネル展示の補強に威力を発揮しました（写真1）．また，豊平川扇状地を際立たせるように，範囲や方向・伏角を工夫した斜め鳥瞰衛星画像は広域の平面図と合わせて印象に残ったものでした．

また，5月18日（土）には「札幌のメムを訪ねる」と題した市民対象の地質巡検を行いました（写真2）．メムとは，アイヌ語で湧泉池を意味しています．定員30名に達する老若男女の参加者となり，中高年が目立ちました．当日は13時に北大植物園前に集合し，周辺の豊平川扇状地を示す古地形の様子や見学

コース全体の説明を聞いた後，札幌市博物館活動センターの古沢 仁さんと道総研地質研究所の鈴木隆広さんの案内により，まずは植物園の中を見学しました．折しも満開となった桜に歓迎されながら，湧き出す水の流路とほのかに残る地形の変化に気をつけながら植物園を後にし，偕楽園～北大構内と水になった気持ちで古流路をたどり，雪山の相当残る北大ポプラ並木のふもとで15時に解散となりました．

さらに，関連の「市民セミナー」が２回開催されました．一回目は５月11日（土）に北海道大学総合博物館１階「知の交流」コーナーで開催されました．講師としてお招きした札幌市立柏中学校教頭の前田寿嗣氏には，「豊平川がつくりだした自然景観」についてお話しいただきました．立ち見が出る100名を越える聴講者は，前田氏が自ら現地で調査し撮影したわずかな起伏や段丘として残る旧河川跡などの映像により豊平川がつくりだしたサッポロを実感したようでした．二回目は５月26日（日）に同じ場所で開かれ，定員70名がほぼ埋まりました．講師にはサッポロビール博物館館長の松澤和則氏をお迎えし，「開拓使が造ったサッポロビール」について語っていただきました．豊平川扇状地の地下水利用と開拓使のお雇い技師アンチセルによるホップ発見のエピソードを交え，実際のホップの香りも体験できた講演に，喉が鳴く？ものとなりました．

（北海道支部：在田一則・石井正之・中川　充）

近畿支部「地質の日」イベント　報告

地球科学講演会「大阪平野の地盤環境と地盤災害」

５月12日（日）に，大阪市立自然史博物館講堂を会場に，大阪市立自然史博物館，地学団体研究会大阪支部との共催で，地球科学講演会を実施しました．地球科学講演会は毎年１回の行事ですが，今年で30回目となりました．今回は，一般財団法人地域地盤環境研究所の北田奈緒子主席研究員を講師にお招きし，「大阪平野の地盤環境と地盤災害」というタイトルでご講演いただきました．事前申し込みの必要な講演会であったにも関わらず，135名もの参加がありました．なおこの講演会では，参加者の希望により手話通訳を行いました．

講演では，まず大阪堆積盆地の地盤の特徴について説明していただきました．大阪堆積盆地には，300万年よりも新しい礫・砂・泥の地層が厚いところで3,000mもたまっていること，その上部に間氷期にたまった海成粘土層が十数層あることが，大きな特徴です．このような地盤環境が，高度経済成長期に問題になった地盤沈下や，兵庫県南部地震での液状化現象による被害，東北地方太平洋沖地震での長周期地震動による高層ビルの被害などの地盤災害の大きな要因となりました．そして，膨大な量のボーリング柱状図を元に書かれた地質断面図や，地盤の特徴を表す図を数多く使いながら，大阪平野の地盤がどのよ

うな姿をしているのか，旧河道や上町断層の位置などについて，紹介していただきました．大阪の市街地には活断層である上町断層があり，不安に思っている人も多いのですが，地震の周期性を考えると，南海トラフ地震に備えるほうが現実的だ，とのコメントもいただきました．

参加者からの質問も多く，市民の皆さんが高い関心を持っていることがうかがえました．大阪平野の地盤について，わかりやすい言葉でまとまったお話を聞くことができ，非常に有意義な講演会となりました．

（文；近畿支部　石井陽子，写真；近畿支部　塚腰　実）

平成25年度「地質の日」企画開催報告

市民向けイベント『身近に知る「くまもとの大地」』

去る５月11日（土）に「地質の日」企画として，市民向けイベント第５回『身近に知る「くまもとの大地」』が開催された．これまで，多くの市民の方々に「地質」に興味を持って頂くために，熊本地区の地学関連機関が合同で「地質の日」企画として市民向けイベントを開催してきたが，本年度も同様のイベントを実施した．これらの企画は，日頃，地球科学の啓蒙普及に腐心し，またジオパーク運営に尽力している博物館の学芸員の方々，毎年自然災害の防止に努力している地質調査業の方々，あるいは理科離れ，特に縮小され続ける地学教育に憂慮している地学教育関係者の，「地質を身近なものとして感じ，理解して欲しい」という願いが一つになったものである．開催にあたっては，『「地質の日」くまもと実行委員会』を設立し，熊本大学，日本地質学会西日本支部，天草市立御所浦白亜紀資料館，御船町恐竜博物館，熊本市立熊本博物館，（公財）阿蘇火山博物館，熊本県松橋収蔵庫，熊本地学会，熊本県地質調査業協会，阿蘇ジオパーク推進協議会，天草ジオパーク構想推進協議会，（公財）肥後の水とみどりの愛護基金，菊池川自然塾が共催して，実施された．

イベントは，これまで開催していた繁華街中央の「びぷれす広場」が確保できなかったため，今回は市内のバスの発着拠点であり，またデパートが隣接する交通センターの「センター

コート」で催された．新たな会場はこれまでの2倍近くの面積を有し，展示コーナー，体験コーナー，情報・物販コーナーの各コーナーはゆとりを持って展開された．展示コーナーでは，阿蘇火山・化石・熊本の地質・自然災害と防災を中心に展示がなされ，化石エリアでは，御所浦白亜紀資料館所有の全長4.5mに及ぶプロバクトロサウルスの全身骨格を中心に，アンモナイト・イノセラムス・その他の貝・哺乳類など，県内外で採取された多くの貴重な化石が展示された．また御船町恐竜博物館の展示では，御船町で採取された多くの化石が展示された．阿蘇火山エリアでは，阿蘇火山博物館を中心にカルデラの形成実験，火山灰の実体鏡観察が，また熊本の地質エリアでは，熊本県地質調査業協会が，ボーリングコアを中心に，社会を支える地質調査業の仕事の内容について紹介をし，一部のコアは無料配布された．さらに自然災害と防災エリアでは，熊本大学のスタッフが，地すべり災害を中心にパネルを展示し，地下地質を探る手法としての電気探査の簡単な実験や，昨年の九州北部豪雨を受けて，熊本県の自然災害に関するパネルも展示された．さらに今回は，（公財）肥後の水とみどりの愛護基金が新たに参加して，熊本が誇る水資源に関するDVDの放映などを行なった．

一方，体験コーナーでは，子供向けにアンモナイトのレプリカ作成，微化石の観察，恐竜の折り紙やぬりえ教室，水簸による鉱物や砂鉄の採取などが行われ，情報・物販コーナーでは，各博物館の案内や企画展についてのリーフレットの配布やオリジナルグッズの販売がなされた．また阿蘇ジオパークならびに天草御所浦ジオパークの紹介コーナーも設けられた．

当日は天候が心配されたが，展示に支障を来すほどにはならず，無事開催することができた．巨大な恐竜を見上げる人や熊本の地質について詳しく質問される方など，多くの方々にくまもとの大地について興味を持っていただけたようである．また体験コーナーでは，小さな子供たちが，目を輝かせながらレプリカづくりに熱中したり，長時間にわたって真剣に鉱物採取を続けたりする姿が見られた．しかし，一つ残念であったことは，今年は幟を新調して集客に務めたにもかかわらず，会場が交通センターの市民の動線から外れていたのか，開場時間中（10～16時）の来場者数は，例年の半分程度の250名程度にとどまった．

企画・準備・運営にあたっては，実行委員，事務局，博物館ボランティア，熊本県地質調査業協会の会員の方々，ならびに熊本大学学生諸氏に献身的に動いていただき，大きなトラブルもなく開催することができた．来年度の開催については，市内のイベント会場の確保が難しくなってきていること，ならびに今回の反省を踏まえ，各博物館を会場としての共同開催やイベント期間の延長など，新たな方向性を検討していく予定である．なお開催にあたって，NPO法人熊本自然災害研究会，熊本県地質図編纂委員会，くまもと地学教育研究会，熊本県高等学校教育研究会地学部会，阿蘇地域振興デザインセンター，御所浦アイランドツーリズム推進協議会，熊本日日新聞社，熊本放送にご後援いただいた．この場を借りて，深謝いたします．

（「地質の日」くまもと実行委員会）

支部コーナー

☆関東支部　報告

第３回関東支部ミニ巡検
房総・三浦研究サミット関連巡検
第１弾『房総半島南東部夷隅地方における正断層群』

2013年５月25日（土），26日（日）の２日間に渡り，日本地質学会関東支部が企画した標記巡検が総勢20名で開催されました．25日午前10時に千葉市中央区蘇我駅東側の通りに集合し，参加受付の後３台の車両にそれぞれ分乗して見学地に向かいました．

今回の巡検の目的を，2013年４月10日本会からの案内から抜粋すると，房総半島南東部夷隅地方の上総層群・三浦層群中には南北走向の正断層が密集していて，その詳細な記載と構造解析は衣笠ほか（1969），小断層解析グループ（1973）などに既によってなされ，その後の研究によってこの正断層群は房総半島東岸付近を南北方向に走る鹿島房総隆起帯（中里・佐藤，2001）との関連が注目されるようになり，さらに近年の反射法地震探査結果によれば，この隆起帯はおよそ100万年前に活動を開始し，総隆起量は1500mに達すると推定され，房総半島のテクトニクスを考察するうえで欠かせない要素の一つと認識されるに至っている（浅尾，2008）．このことは３月９～10日に開催された第１回房総・三浦研究サミットでも報告され，調査の必要性が強調されたことを受けてのものでした．

写真：黒滝不整合を前にした参加者の面々（提供：加藤　潔）

案内者は　衣笠善博氏・小玉喜三郎氏（元地質調査所），宮内崇裕氏（千葉大学），岩本広志（関東天然瓦斯開発（株））の4名で，衣笠さんと小玉さんは40年余前に実地で断層の構造解析を研究されたこと，宮内さんは東北地方太平洋沖地震直後に，誘発して発生されたとされる福島県いわき市直下でMj7.0（Mw6.6）の内陸型正断層型地震の推定活断層（活断層研究会編，1991；中田・今泉編，2002）の一部に沿って出現した地表地震断層と比較して，第四紀を通じて同じような背景にあると目される，房総半島上総丘陵東部の南北性の正断層群が同じものであるかどうか，またその断層活動の可否について，活構造なのか組織地形かの判断で，地形学的観点から現地露頭での議

論を提供．また，地元の岩本はコース・宿泊地のナビゲーターを兼ねて，地質図オーダーで表現できる大規模断層を案内しました．

コースと見どころを以下のようにまとめてみました．

１日目

①睦沢町大上瑞沢川西門橋（北緯35°20´43.6″，東経140°17´30.2″）

南北性の東落ち上芝原-碇谷断層（茂原油田ガス田図10，1971）の延長上の川面に見られる湧出ガスの噴出．断層を介して地下に賦存する水溶性の遊離メタンガス流体の湧出し口．地表面に現れたメタンガス湧出ガスの特徴を配布資料にて説明しました．地点は上総層群の国本層と梅ヶ瀬層の境界部に相当します．

②いすみ市文化とスポーツの森（北緯35°17´12.4″，東経140°18´4.1″）

丘陵頂部に設営された運動場他の施設への取り付け道路は，U字型の切割で，地層の空間的な位置関係と伸びの観察に絶好の場所となっていて，この場所はしばしば地層観察の教材としても用いられています（千葉県地学教育研究会，石油技術協会特別見学会地質編）．泥勝ち砂泥互層を呈する上総層群大田代層下半部で，特に火砕質鍵層O16を指標として，並走する２本の南北性東落ち断層（落差14m，４m）のオフセットや落差を容易に観察できます．14m断層とその上盤側のO16の板状凝灰岩で露頭表面に暗緑灰色を呈したメタンガス噴出の痕跡．

③紙敷川（北緯35°15´45″，東経140°12´44.1″）

大田代層上半部の特徴的な鍵層O7 とその下位のO11とO12を目印に紙敷川沿いの露頭で，目で追える数m規模の南北系断層を観察するも露頭状況が悪く，10数年前との差異を主張する案内者（岩本）の悲観性を打ち消すべく，参加者の努力で西落ちの断層を掘り出し，案内者かろうじて面目を保ちました．

③平沢川（北緯35°14´1.3″，東経140°13´21.8″）

落差が地質図から100mと見積もられる黄和田層の中の南北性の東落ち大規模断層．傾斜角60°のシャープな面を境して下盤側は落差が目で追える３～４m程度．一方上盤側はシャープな面を境して100m規模の落差に及んでいる．平沢川は厚層の泥岩を主体とする黄和田層が綺麗に川底に露出していて，滑りやすいことを除けば非常に気持ちの良い，地層観察や川遊びにも絶好な場所ですが，この辺りにも20年前には居なかったヤマビルがいて，参加者数名の靴下・衣服の中に潜んでいたものの，独特の痒みや出血で衣服を汚されることはなかったようです．

この平沢ではタケノコ料理で有名な民宿で宿をとり，夜遅くまで懇親会が繰り広げられました．

２日目

④御宿岩和田海岸（北緯35°11´13.2″，東経140°22´53.9″）

上総層群勝浦層を切る南北-東西系の小断層と南北系東落ちの大断層（落差25m）．砂浜に面した露頭面がほぼ南北で，露頭面を直交する断層が東西系となります．観察に適した露頭は今回の大潮時で海面上に露出していました．露頭上部からの崩落に注意しながらの観察です．シャープに勝浦層を切る25m断層は，崖面の谷埋堆積物を変異させることはなくこの断層が活構造であることはないとの事ですので，他の南北系の断層群も活構造である心配はないようです．

⑤勝浦海中公園～ボラの鼻（北緯35°8´7″，東経140°17´6.1″～北緯35°8´11.9″，東経140°17´22.5″）

大潮の日曜日ということで，勝浦海中公園に至る波食台には多くの人々が居ました．

Hkタフの粗粒スコリアが非常に目を引きます．最初の観察露頭には落差が20m程度と見積もられる大断層．波食台を北側に進んで清澄層を上位に見ていきます．吉尾漁港の対岸側に有名な黒滝不整合の露頭が見えてきます．泥岩礫や安山岩他の硬質礫を伴う黒滝層はこの場所で下位の三浦層群の清澄層を削剥して，より西側には徐々に削剥量を減じ，房総半島西部では下位の安野層とほぼ平行にその上部の欠層を伴って不整合関係で接しています．

黒滝不整合の象徴・アナロジーはやはりこの露頭です．果たしてこの黒滝不整合が東京湾側の地下に存在するのか？対岸の三浦半島の陸上に追跡できるのか？は今後の更なる検討が待たれることで，私たちを含め現役世代の露頭観（勘）が鈍らないうちに黒滝層（あるいは黒滝不整合）を対象とした房総-三浦横断巡検を希望してみたいものです．

最後にトイレ休憩を兼ね，４月に開館した「大多喜町天然ガス記念館」を訪れ，天然ガスの歴史にも触れられるとともに，近接するいすみ鉄道大多喜駅での鉄道趣味に興ずる方も居られ，２日間を十分満喫されたものと感ぜられ，準備に当たられた関東支部幹事の方共々，案内者として有難かったことを書き添えておきます．

（文責：**岩本広志**）

【参加者の感想：ミニ巡検に参加して】

今回の巡検に参加して特に感じたことは，学部生として講義の一環で行くそれとは大きく異なるという感覚でした．基礎知識や，対象地域についての理解を深めるためという点では同じですが，そこに留まらず，観察できた事象に関して議論するところまでを，目標としていた巡検でした．私は基礎知識に乏しく，実際にフィールドをこの目で見ながら基礎知識を高めようという心持ちで参加したため，議論に参加することは出来ませんでしたが，参加した方々が，それぞれ深めてきた知識を基に熱く意見を交わしている姿を見ることができただけでも大きな収穫です．

実際に回った地点も，ガスの湧出場，小断層系から落差100m級の大断層，そして有名な不整合（黒滝不整合）と，観察していて非常に面白いところばかりで，先々で他の参加者の方々から詳しい説明もいただけた結果，大変有意義な時間となりました．

現在私は，卒業研究として，上総丘陵東部の断層系と地形の関係性について研究していく予定です．東日本大震災後の余震として見られている福島県浜通りの地震ですが，これは正断層型による内陸地震であると考えられます．東北日本孤前弧域が，大震災後に瞬間的に伸長場となり，推定活断層とされていた湯ノ岳断層と井戸沢断層が誘発されて起こしたものと思われます．そこで，似たような環境を持つ上総丘陵東部の断層系は，似たような状況において内陸地震を引き起こしえるのか，これについて，地形変動の観点から解き明かしていく研究をしていきたいと考えています．

今回はその足掛かりとなるものを多く見ることが，そして学ぶことが出来て，参加させてくださった皆様，そして分かりやすく丁寧に，多くの説明をしてくださった皆様には大変感謝しています．本当にありがとうございました．

（千葉大学学生，**高橋将道**）

2013年「Project A in 伊豆下田」参加報告

宮本和輝（４年）・蓑和雄人（M２）
九州大学地球惑星科学部門

2013年３月５～９日にかけて「Project A in 伊豆下田」（以下ProA）が開催された．（株）ウインディーネットワークと伊豆半島ジオパークの共催により河津桜が咲き乱れる南伊豆で行われた．主な参加者は，学生28名，教員７名，研究員５名の計40名で，九州大学，東邦大学，東京大学大気海洋研，東京大学地震研，鹿児島大学，高知大学，茨城大学，広島大学，国立極地研究所，産業技術総合研究所と多彩な顔ぶれとなった．今回のテーマが「地球全史：ジオパークはタイムマシーン」ということもあり，室戸ジオパーク・伊豆半島ジオパーク推進協議会の協力のもと，一般シンポジウム，参加者全員の研究発表会，野外巡検が行われた．また，ウインディーネットワークの杉本憲一社長は，歴史や自然科学を独自で勉強されており，自前でそろえた海底探査機器で十和田湖や沖縄，インドネシアなどさまざまな場所の海底調査を大学や産総研と行っている．現在は震災後の仙台湾の地形調査を行っているそうだ．数年前より九大グループが取り組んでいる薩摩硫黄島周辺域の海底地形図や硫黄島博物館のジオラマ・３D映像も手がけており，新しく研修施設ができたという意味で，ProA開催に協力していただける事になったようである．

ProAの全日程において，ウインディーネットワークの小川専務をはじめとし，会場設営・巡検中の送迎・カメラ撮影をして下さった社員の皆様，露頭で丁寧な解説をして下さった伊豆半島ジオパーク推進協議会の鈴木雄介さん，食事・宿泊場所の準備をして下さった地元のお母様方など，たくさんの方々のバックアップが感じられた．皆様の協力なしでは，充実した５日間を過ごすことはできなかっただろう．

【シンポジウム】

３月５～６日の夕方約2時間，一般向けのシンポジウムが行われた．講演は「地球の歴史とタイムマシーン」清川昌一先生（九大），「宇宙からのメッセージ」尾上哲治先生（鹿児島大：４月から熊本大），「カルデラ噴火の脅威」前野深先生（東大・地震研），「室戸世界ジオパークの３つのヒミツ」柴田伊廣先生（室戸世界ジオパーク推進協議会），そして「世界ジオパークに向けて－伊豆半島」鈴木雄介先生（伊豆半島ジオパーク推進協議会）の５つの話があった．

シンポジウムでは，地球の歴史を紐解ける地層や岩石には様々なメッセージが含まれており，それを引き出すのが地質学者の役目であること，例として，初期地球の記録や宇宙からのシグナルをどのように地層から取り出すか，また人々に影響を直接的に及ぼす火山やカルデラ噴火の成因とその影響がいかにすごいかを聞くことができた．具体的なものとして，過去十数万年にまで遡ると，カルデラ噴火は九州や北海道で数千～数万年に１回程度の頻度で繰り返しおきているそうだ．人々は平然と大地に立って生活しているが，このような時間スピードの違う自然の動きに対応していかねばならないこと，地球惑星科学の時間スケールをきちんと理解することの重要性を感じた．また，実際に地球上で起こっている自然現象を地道に一般の人に教育・普及させていく必要があるのだろう．

尾上先生の話は，講演を聴いた一般の方が飲み屋のお姉さん方に話をしたくなるというロマンチックなものであった．地層から宇宙を紐解き，身近なたとえから隕石衝突のすごさについてまで，具体例や語り・見せ方も上手くて感動した．夜空にきらめく星は伊豆半島の懐中電灯のあかりを100km先の房総半島で確認できるぐらいの明るさらしい．人の目の観察力のすごさを感じた．地層に残っている宇宙塵はまさにきらめく星を実際にみているのである．

一方，学生参加者の多くはジオパークに関する知識はほとんどなく，どのようにジオパークができたか，街ぐるみの協力体制など普段聞けない興味深い話が聞けた．私たちが研究中の薩摩硫黄島もジオパーク認定を目指しており，その活動を知る上で興味深かった．ここではジオパークを活用した防災や地域学習の発展，ガイドの重要性・育成など，地域の町おこしで地質学を題材に多くの人ががんばっていることを知った．講演の休み時間に食べたジオ菓子は地層や岩石を再現したもので，見た目はともかく，味はすごく美味しかった．まずは人々にジオの用語を覚えてもらうための努力を感じた．

室戸世界ジオパークの柴田先生の話は，田舎の町で人々を巻き込みながらどのように大きなプロジェクトを作っていくかのノウハウを教えていただき，室戸が成功した秘訣を垣間見ることができた．Keywordはスモール円卓会議！大会議場では参加者は座っているだけだけれど，スモール円卓にすると圧倒的にいろいろな意見が出やすく，参加した気がする．意見が出すぎてまとめるのに苦労するほどだという．

また，伊豆半島の地元の人の関心度に驚かされた．地域住民含め約100人もの聴衆者が集まり，下田プリンスホテル内の会場を埋め尽くした．これは，伊豆半島ジオパークの鈴木さんや杉本社長のご尽力と，地球科学に対して興味を持つ地域の方々が多いためだろう．南伊豆からは伊豆大島の噴火などがきれいに見えていたらしい．

【発表会】

６～７日にかけて参加者全員の発表会を行った．シンポジウムは夕方だが我々はその後も朝から夜中まで缶詰で様々な研究発表を聞くことになった．発表会では各自の研究内容を中心に15～20分程度の発表を行った．ProAでは毎回全員が発表しなければならず，そのコンセプトは，全く違う分野の人や初心者にいかにわかりやすく話ができるかである．つまり，自分の専門だけでなく，広範囲の研究分野に触れ勉強するとともに，議論を通して様々な分野の人達との交流を深めることを目的としている（図１）．

朝から夕方までは研究者の方々や大学院生の研究成果発表が行われた．東大大気海洋研の山口あすかさんや高知大の藤内智士さんは，付加体やテクトニクスの話，昨年まで東北大にいて現在大気海洋研でナノシムスを扱う石田章純さんは20億年前の環境変動の話をしてくれた．産総研の後藤さんは硫黄島の温度データについての話であった．初期地球から現在まで，テクトニクス・火山・環境変動と話が多岐にわたり，学部生の私には少々キツかったが，地球科学の広さとアプローチを学ぶことができた．

今回の発表会で，１）人に聞いてもらうにはどうした良いのか，２）興味を持ってもらうにはどうしたら良いのか，について学んだ．図の配列，文字の大きさ，声の大きさ，話の展開，たとえ話の仕方など，自分が聞いていて，おもしろい，わかりやすいというものは，どんどんまねて取り入れていこうと思った．

私（宮本）も「火山と噴火」について勉強したことを話した．面識のない人達の前での発表は初めての体験で，かなり緊張した．声の大きさや時間配分，図の使い方など反省すべき点は多くあり，かなり落ち込んだが，今度は全面改定でがんばろうと思っている．

院生コーナー

左から写真１：Project A 発表会場　リフレッシュスポット　風未来玄関前．写真２：爪木崎の柱状節理にて．写真３：堂ヶ島の水底土石流堆積物．

【巡検】

巡検は３月７～８日に行われた．伊豆半島には，およそ2000万年前から現在までの火山岩類を主体とする地層が露出しており，その露頭から海洋性島弧の火山活動の歴史をたどることができる．伊豆半島ジオパークを巡る本巡検はまさにタイムマシーンのように海洋性島弧で起こった海底火山活動と海底地質の歴史をさかのぼる内容であった．

巡検初日，我々は最初の観察ポイントである柿崎弁天島に到着した．弁天島は伊豆弧衝突により隆起した海底堆積物が見られる．火山灰が海流によって運搬・形成されたものであり，所々に火山角礫がみられた（大きいものは直径約５cmもあった）．他にも明瞭な斜交層理や数えきれないほどの生痕化石が見られ，当時の海底環境が生物に富んでいたのだと思った．爪木崎では，海底に流れ出した溶岩，シル，柱状節理を観察した．俵磯では六角や五角の一面にひろがる石畳と等温に沿ってダイナミックに立ち並ぶ石柱のような柱状節理に感動した（図２）．

恵比寿島では島１周で水底土石流と海底に積もった火山灰と軽石の２種類の地層が観察できる．水底土石流層には直径0.5-1mの岩や自分の身体より一回り以上大きい岩がたくさんあり，落石の心配を他所に大きな岩が運搬される土石流の規模に想像を膨らませていた．地層以外にも島の南方に平らに広がる侵食と隆起が織りなす海食台の千畳敷や，島の頂上付近の恵比寿島遺跡など，自然と文化の二面で観光できる見所満載の場所であった．その後，石が波で転がりながら岩を削ってできた竜宮窟と，傾斜30度，幅100mの巨大な天然の砂堆のサンドスキー場を楽しんだ．夕方には，伊豆半島南端部，石廊崎まできていた．遊覧船に乗って迫力のある火山砕屑岩の広がる断崖を一望した．帰りがけ，逢ヶ浜で大小様々な溶岩で足元が不安定な中，ハイアロクラスタイトや神々しい扇形になった岩脈を観察した．

２日目は石廊崎千畳敷で貫入岩体を観察した．ポイントまで約1時間の遊歩道を進むと迫力のある露頭が眼下に現れた．今回の巡検の最も注目すべき場所だ．火山性砕屑物の層理と巨大な貫入岩体が３次元的に見られた．海岸線は隆起したのだろうか，広い海食台が広がり，白黄色の堆積岩を貫く黒い貫入岩が見事であった．午後，我々はドラマ“とんび”の舞台である雲見に到着する．昼食後，数百段ある直登階段を一気に登り，烏帽子山の頂上にふらふらになりながらたどり着いた．とんがった山頂には神社があり，西伊豆の海岸線の山々が一望できた．

次に，堂ヶ島を目指した我々は水底土石流，水冷自破砕溶岩，バイモーダルな火成活動の堆積物を観察した．ここでは巨大な斜交層理（幅約10m，層厚１-２m）が見られ，下位には火山岩類がきれいな級化層理をなして堆積していた（図３）．この露頭をみながら，海底火山噴火で噴出物がばらばら飛び散り堆積する様子を頭に描いた．

本巡検の最終地点である西伊豆町一色で枕状溶岩を観察した．20 Maの伊豆半島最古の岩石であり，内陸のため想像以上に風化していたが，地元の方の整備で露頭が保存されチルドマージンや岩石内部の鉱物も確認できた．実は，丁度弘前大学の植田先生のグループが先客として巡検しており鉢合わせした．伊豆半島は地質的に大事な場所なのだと感じた．

【生活】

今回，学生は静岡県賀茂郡南伊豆町にある公民館「手石公会堂」，先生方は「リフレッシュスポット風未来」で４泊５日宿泊させてもらった．この間，ウインディーネットワークの社員の方々が総出でバス送迎やケアをしてくれ，スムーズに移動できた．非常に感謝している．学生は公民館１つの大広間で皆が過ごす形で，他大学の学生と打ち解けた．食事は地元のお母さん達が毎食作ってくれた．通常ProAは自炊が基本とのことであったが，我々が宿舎に行くといつもいいにおいがしており，地元でとれた食材が豊富でどれも非常においしかった．最終日の晩はウインディーネットワークの社長のご厚意により，伊勢海老やホタテなどの豪華料理を振舞ってくれた．これで巡検費も含めて会費が１万円というのは本当だろうか．心からお礼を申し上げたい．

また６～８日はみんなで温泉に入った．６日は「みなと湯」，７日は「銀の湯」，８日は「金谷旅館仙人風呂」に入った．開催地が伊豆ということもあり，個人的には楽しみの１つであった．ちなみにProAは必ず温泉が付くらしい．他大学の学生らと話が盛り上がり，１時間近く入っていた．とても気持ちよく，巡検での疲れがとれた．最終日の夜は参加者全員での飲み会が開かれた．これまであまりお話する機会がなかった先生方やポスドクの方々とお話しすることができた．研究者になった経緯や研究，学部生の頃の話などについて聞かせてもらった．

９日の朝９時に下田を出発し，最終目的地である神奈川県立生命の星博物館に着いた．館長の斎藤靖二先生の計らいで昼ご飯をいただき，地球の歴史標本が充実する博物館を眺めた．地球史を示す見事な標本にボーゼンとなった．飛行機の関係で駆け足になったが，太古代の地層を研究対象としている私としては，もう少しじっくり見学したかった．

博物館の玄関で次回のProject Aミーティングで会う約束をし解散した．次回は2014年の３月，薩摩硫黄島で行うらしい．最高の温泉を楽しみに，来年すばらしい研究発表ができるよう１年間がんばろうと決意した．次回薩摩硫黄島でお待ちしています．

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の４名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

yhamada@eps.s.u-tokyo.ac.jp　濱田洋平（東京大）
gsc421511@s.okayama-u.ac.jp　湯川弘一（岡山大）
12ND404L@mcs.ibaraki.ac.jp　細井　淳（茨城大）
3SC12024G@s.kyushu-u.ac.jp　佐藤峰南（九州大）

追　悼

追悼　鈴木尉元　氏

鈴木尉元氏は平成25年５月13日，心不全のため市川市のご自宅で逝去されました．享年79歳でした．最近ときたま体の不調を覚えることはあったものの日常はいたってお元気で，前夜も研究ゼミの準備をされていたとのこと，あまりに急なご逝去は，周囲の関係者にとってもすぐには信じられないほどの驚きで，残念でなりません．ご遺族のお悲しみはいかばかりかと心から哀悼の意を表します．

鈴木氏は昭和10年に東京でお生まれになり，東京大学理学部地質学科を卒業後，昭和33年に通産省工業技術院地質調査所に入所，燃料部石油課に配属され，平成元年に地質情報センターに異動，同センター長をへて平成7年に定年退職されました．この間，昭和45年に北海道大学で理学博士号を取得されています．退職後は地熱技術開発株式会社で資源地質・構造地質等の幅広い知見を活かして活躍されました．

鈴木氏はこれまで200編ちかい研究論文を内外の学術誌に報告，８編余の著書（共著・共同執筆を含む）を出版，その他ニュースや解説等，多数の文章を公表されています．地質調査所からは「東京湾とその周辺地域の地質」（特殊地質図20），「那古地域の地質」（５万分の１地質図幅）など７編の地質図類を出版しています．鈴木氏の研究分野は，層序・構造地質学，地球化学，測地・地震学など実に幅広く，多くは共著論文として公表されていますが，とりわけ様々な分野の研究者との共同プロジェクトのリーダーとして，その成果を総合的な研究報告，論集，著書等にとりまとめておられます．

地質調査所で行われた特研「第三系堆積盆地の研究～新潟堆積盆地～」では，共同研究者とともに油田・ガス田における褶曲構造研究の歴史的総括と問題点を分析，南関東で確立された火山灰鍵層対比による層相層厚法を適用して層序，層相・層厚変化，地質構造を詳細に把握する構造地質学的研究を行ない，地質調査所報告第250号1,2（1974）にまとめました．とくに鈴木氏は，深部構造研究の重要性を主張し，当地域の褶曲構造のうち軸長が30km以上の第1級背斜は翼部が急傾斜する箱型褶曲であること，その運動は地層堆積時からはじまり最新期にまで及ぶこと，急傾斜翼部に火山活動に関連する地層を伴うことから，その構造単元はブロック化した先新第三系基盤の運動の反映であることなどを指摘，さらに堆積盆地内に発生する地殻内地震の震央分布が基盤構造と対応していることを同報告書付図「地震構造図　東京・新潟」（50万分の１）で示し，地表からモホ面いたる断面図でその関係をはじめて指摘しました．これらの成果は鈴木氏のその後の研究の中核となりましたが，本特研では層序学的研究をはじめとして構造地質，実験構造地質，測地学，地震学，地球化学など，これまでにない多元的なアプローチによるプロジェクト研究を推進した点でも，鈴木氏の卓越した指導力が発揮された研究でした．

関東地震から50周年に当たる1973年に鈴木氏らによって企画されたシンポジウムでは，地質学，地形学，地震学などのさまざまな分野から関東平野の第四紀以降の変動と地震に関する学際的討論が行われ，その成果が「関東地方の地震と地殻変動」（垣見・鈴木編，1974）にまとめられました．さらに堀口万吉氏らとの共同研究である総研「関東地方の震源分布の地質学的意義」では，震源分布と地質構造，特に測地学的変動や第四紀後期の段丘変形との関係を詳細に研究し，その成果を地質学論集20号「関東平野の地震と地質」（1981）に公表し，総括リーダーとしての指導力を発揮されました．

地質構造と測地学的変動・地震活動との密接な関連についての研究は，その後日本全国を対象に展開され，その成果が著書「日本の地震」（1975）や「新版・日本の地震」（1985）にまとめられました．この中で鈴木氏は，地表に見られる第１級の地質構造は地殻内の浅発地震のみならず深発地震やコア・マントルの構造とも垂直的に関連していることを一貫して主張し，そのことから必然的にプレートテクトニクスの理論は受け入れられないと批判しています．これらの主張には異論も多いところですが，今日，地球内部の地球物理情報が詳細な地震観測や地震波トモグラフィーにより飛躍的に明らかにされる一方，その解釈がますます複雑となっているとき，表層部で観察される歴史的拘束条件の重要性をいち早く指摘した鈴木氏の卓見は改めて注目されるものと思います．

鈴木氏は当初から地質研究者がもっと測地学や地震学など現在の地殻活動の研究に関わることを推奨し，とくに地域の詳細な地質単元にこだわる研究の重要性を主張し続け，熱心に研究者の指導や共同研究を進めてこられました．その成果が実り現在では多数の後継者が誕生しています．また，各地の大学から卒論生・修論生を毎年多数受け入れて指導され，その数は100名ちかくにのぼります．その際に，常に研究の原点に立ち返る必要性と先達による業績の正確な評価が重要なこと，その上に立ってこそ新たな展開がはかられるとする基本姿勢を指導して来られました．実際，鈴木氏のすべての研究や活動はこの基本的姿勢の上にあったことを改めて思い，後進にとっての大切な教訓になったと考えます．

学会関係の活動では，日本地質学会評議員を1978年から６期12年務められ，この間執行委員として編集，国際交流，庶務を担当されました．特に日本地質学会100周年を迎えるにあたり編集委員長として「日本の地質学100年」を編纂された業績は高く評価されています．また，地学史編纂委員会では主要メンバーとして活躍，地質学史懇話会（JAHIGEO）の第３代会長，1990年からは国際地質学史委員会（INHIGEO）委員として，国際会議INHEGEO-2011（豊橋）開催に当たっては準備委員長として尽力されました．また，New Concepts in Global Tectonics学会の日本代表（1996-2012年）として国際的にも活躍され，多数の欧文論文を発表されています．

鈴木氏は文学や音楽，絵画など多彩な趣味をおもちで，つくばでは古典音楽合唱団に所属され，また市内の合唱団でもバッハなどの古典の演奏を楽しんでおられたと伺っています．学会や調査にでかけるときは常にスケッチブックを携えてゆき，身の回りの風景や植物のデッサンを楽しまれていました．

最後に，これまでの多年にわたるご指導に深く感謝し，心よりご冥福をお祈りいたします．

（小玉喜三郎）

CALENDAR

2013.7～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
★印は，日本地質学会行事．

2013年

7月　July

○第50回アイソトープ・放射線研究発表会
日本地質学会　共催
７月３日（水）～５日（金）
場所：東京大学弥生講堂
http://www.jrias.or.jp/

○GSJ第21回シンポジウム「古地震・古津波から想定する南海トラフの巨大地震」
７月10日（水）
場所：秋葉原ダイビルコンベンションホール
http://www.gsj.jp/researches/gsj-symposium/sympo21/index.html

○国際火山学地球内部化学協会2013年学術総会
日本地質学会　後援
「IAVCEI2013 Scientific Assembly」
７月20日（土）～24日（水）
場所：鹿児島県鹿児島市
http://www.iavcei2013.com/

8月　August

○第14回地震火山こどもサマースクール in 伊豆半島
日本地質学会　共催
８月３日（土）～８月４日（日）
場所：静岡県下田市「あずさ山の家」

○室戸ジオパークサマースクール2013 来るならきいや南海地震，土佐はうちが守るきね！
日本地質学会　後援
８月８日（木）～９日（金）
http://ss.muroto-geo.jp/

○第６回地殻応力国際シンポジウム
日本地質学会　後援
８月20日（火）～22日（木）
場所：仙台国際センター（宮城県仙台市）
http://www2.kankyo.tohoku.ac.jp/rs2013/

○第28回HKTワークショップと第６回チベット高原に関する国際シンポジウムの合同大会
８月22日（木）～24日（土）
場所：Tübingen University, Germany
http://www.tip.uni-tubingen.de/index.php/en/hkt-istp-2013-tuebingen

9月　September

○第57回粘土科学討論会
日本地質学会ほか　共催
９月４日（水）～６日（金）
場所：高知市文化プラザかるぽーと
http://www.cssj2.org/

○2013年度日本地球化学会年会
日本地質学会　共催
９月11日（水）～13日（金）
場所：筑波大学第一エリア１Ｄ１Ｅ棟
http://www.geochem.jp/index.html

★第４回・第５回津波堆積物ワークショップ
日本地質学会・日本堆積学会　共催
日程：９月14日：第４回ワークショップ
　　９月18日：第５回ワークショップ
場所：仙台（東北大学）

★日本地質学会第120年学術大会（仙台大会）
９月14日（土）～16日（月・祝）
場所：東北大学ほか
事前参加申込締切：８月20日（火）
巡検申込締切：８月９日（金）

○第30回歴史地震研究会
９月14日（土）～16日（月・祝）
場所：秋田大学
http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/menu7.html

○2013 International Association for Gondwana Research (IAGR) and 10th Gondwana to Asia, in collaboration with IGCP 592.
会議・シンポ：９月30日（月）～10月２日（水）
巡検：10月３日（木）～４日（金）．
発表要旨締切：７月31日
参加登録締切：８月31日
場所：韓国Daejeon，KIGAM
http://iagr2013.kigam.re.kr or
http://www.elsevier.com/locate/gr

11月　November

○ International Biogeoscience Conference 2013
11月１日（金）～４日（月）
場所：名古屋大学
http://www.info.human.nagoya-u.ac.jp/~sugi/Site/Biogeoscience_Conference_2013.html

○第67回日本人類学会大会・総会
11月１日（金）～４日（月・祝）
場所：国立科学博物館筑波研究施設ほか
http://anthropology.jp/activity/annual.html

○第29回ゼオライト研究発表会
日本地質学会　協賛
11月27日（水）～28日（木）
場所：東北大学片平さくらホール
http://www.jaz-online.org/index.html

12月　December

○地質学史懇話会
12月23日13:30～
場所：北とぴあ803号室（東京都北区王子）
・長田敏明「戦前の満州の科学博物館の活動について（仮）」
・小野田滋「地質工学の開拓者・渡辺貫とその周辺（仮）」

2014年

4月　April

○日本地球惑星科学連合2014年大会
2014年４月28日（月）～５月２日（金）
会場：パシフィコ横浜会議センター（横浜市西区みなとみらい）
予稿集原稿投稿募集：2014年１月８日（水）～２月12日（水）
http://www.jpgu.org/

学　会　記　事

一般社団法人日本地質学会の議事録を掲載しています．

一般社団法人日本地質学会
2013年度第１回理事会議事録

日　時：2013年５月18日（土）15:30-16:40
会　場：北とぴあ　第二研修室　（北区王子１-１）
出席役員　理事（35名）：天野一男　安藤寿男　伊藤谷生　井龍康文　石渡　明　市川八州夫　ウォリス・サイモン　永広昌之　小山内康人　笠間友博　狩野彰宏　川端清司　川辺文久　清川昌一　小嶋　智　坂口有人　斎藤　眞　佐々木和彦　柴　正博　高木秀雄　竹内 誠　田村嘉之　高橋正樹　内藤一樹　中澤 努　西　弘嗣　久田健一郎　平田大二　星　博幸　松田達生　松田博貴　向山　栄　山田泰広　山本高司　渡部芳夫
監事（１名）：青野道夫
欠席役員　理事（15名）：伊藤　慎　太田泰弘　大津 直　芝川明義　竹下　徹　藤林紀枝　藤本光一郎　保柳康一　宮下純夫　宮田隆夫　村田明広　矢島道子　山口耕生　山路　敦　脇田浩二
監事（１名）：山本正司
その他出席者　事務局：橋辺

＊成立要件：理事総数50名の過半数26名，本日の出席者　35名で本理事会は成立．
＊議決：出席者の過半数　18名

＊書記２名の選出：狩野彰宏理事と市川八州夫理事が選出された．

報告事項

１．執行理事会報告

１）2012年度第10回執行理事会議事録要点及び2013年第１回執行理事会要点ほか（斎藤常務理事）

2013年４月及び５月の執行理事会議事録等に基づき，要点が報告された．

２）その他

・Island Arc 編集状況等の報告（伊藤理事代理：井龍理事）

雑誌名称変更の件について，2012年第４回理事会で報告した3候補の中から，編集委員等による投票の結果，「Island Arc」が継続された旨の報告があった．

編集状況について，2013年３号の予定７編に対し，現状１編の受理にとどまっており，会員からの活発な投稿が要望された．

２．理事からの報告

・125周年事業準備委員会の立ち上げに向けて（矢島理事代理：斎藤常務理事）

現在までに，永広昌之，宮下純夫，佐々木和彦，天野一男の各理事の委員就任の内諾をいただいており，仙台大会までには委員会を立ち上げ，事業内容の概要について検討・提案したいとの報告があった．

３．その他

・原子力規制委員会の「発電用軽水型原子炉施設の地震・津波に関わる規制基準」策定に係わり、「敷地内及び敷地周辺の地質・地質構造調査に係る審査ガイド（案）」の「断層活動性評価」と「断層破砕物質」に関する記載に対して，構造地質部会の協力を得て日本地質学会としてパブリックコメントを提出した．

・清川理事より学生会員学会費の引き下げに関する要望があり，会員年齢構成と会費収入に関する影響を精査し，検討することとなった．

審議事項

１．理事会議長・副議長の選出

安藤寿男前理事会議長の進行により，2013年度の理事会議長と副議長を選出した．

議　長　松田　博貴理事
副議長　久田健一郎理事

＜以下の議事は松田議長により進行＞

２．各賞に関する規則改正案の確認並びに選考委員会への申し送り事項(斎藤常務理事)

懸案事項であった各賞選考の運営規則第16条２項並びに２項３号・各賞選考規則７項２号および９項２号の改正案と各賞選考委員会への申し送り事項が再提案され，全会一致で承認された．

３．執行理事職務分担の変更について（斎藤常務理事）

保柳康一執行理事の編集出版部会兼務について提案があり，全会一致で承認された．

４．その他

１）名誉会員の制度のあり方と選考プロセスに関する申し合わせ（ウォリス・サイモン副会長）

ウォリス副会長から提案された申し合わせ事項が審議され，２項「教育現場や企業で」を「教育現場や企業等で」と文言の追加修正した案が，全会一致で承認された．

２）選挙規則の改正およびそれに伴う選挙細則の改正について

理事会に先立ち開催された2013年総会において選挙規則改正が議決承認されたことに伴い，既に理事会において改正案承認済みの関連選挙細則の改正が全会一致で承認された．

以上，この議事録が正確であることを証するため議長および出席理事・監事は次に記名，押印する．

2013年６月18日

2013年度
第１回執行理事会議事録

期　日：2013年５月18日（土）10:00～12:00
場　所：北とぴあ　第２研修室
出席者：石渡会長　ウォリス副会長　渡部副会長　斎藤常務理事　井龍　坂口　高木　中澤　内藤　西　平田　星　松田　山本，（事務局）橋辺
欠席者（委任状提出あり）：伊藤　保柳　山口　山路

＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者14名，委任状４名，合計18名の出席．

Ⅰ　審議事項

１．前回の議事録が確認され，承認された．
２．各賞に関する規則改正案の確認並びに選考委員会への申し送り事項改正案と申し送り事項が提案され，これを理事会に諮ることとした．
３．ロンドン地質学会との学術交流協定について

協定文案が提案され，執行理事会として承認した．理事会に諮ることとした．

４．総会運営の確認

Ⅱ　報告事項

(1) 全体的報告

１．地質・地盤情報活用促進に関する法整備推進協議会　進捗報告（小嶋理事，代理斎藤）
２．原子力規制庁へのパブリックコメントの提出
３．第２回G-EVER国際シンポジウム，第１回IUGS・日本学術会議国際ワークショップ

アジア太平洋地域の災害とリスクマネジメント: 沈み込み帯の地震・津波・火山噴火・地すべり

両会議について協力を依頼されていることが報告されたが，連続日程ではあるものの，それぞれ別の会議として扱うこと，また協力内容も具体的に示してもらうこととなった．

４．中期ビジョンWG委員の立ち上げ

１）委員氏名：伊藤喜宏（東北大）内野隆之（産総研）亀高正男（ダイヤコンサル）須藤　斎（名古屋大）須藤　宏（応用地質）高桑祐司（群馬県立自然史博物館）田村嘉之（千葉県環境財団）棟上俊二（福岡教育大）西川　徹（海洋研究開発機構）丹羽正和（原子力開発機構）藤原　治（産総研）渡来めぐみ（茗渓学園）井龍康文（東北大学）坂口有人（山口大学）山本高司（川崎地質）

２）今後の予定：～９月：メール会議，９月：小集会（仙台）

秋以降：中間報告と会員からの意見収集
未定：提言書提出．総会での報告

５．地惑連合の学協会長会議議長（＝大会委

員長）は現在，石渡会長であるが今大会で交替となり，次期は順番で地球生命科学セクションの古生物学会長になる予定．

6．広域的な火山防災対策に係る検討会による「大規模火山対策への提言」（2013/05/16）について

社会的に重要なテーマであり，かつ検討会メンバーに会員も参加しているので注視し，バックアップしていく．

(2) 運営財政部会：総務委員会（西・山本）

＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞

1．群馬県立自然史博物館第43回企画展「甦れ！カミツキマッコウ　古代ゾウ～巻頭に眠る太古の生き物たち～」（7/13-9/1）の後援を承諾

2．「第6回地質の日記念」&「南紀熊野ジオパーク応援」イベント，下記の2件の後援を承諾宇久井ビジターセンター「知玉の浜のオーソコーツアイト探し」（5/11）

近畿地方環境事務所「ジオパークをめざして川舟で下る熊野川」（5/12）

3．第四紀学会よりの国際第四紀学連合（INQUA）第19回大会（2015，名古屋）の共催依頼を承諾

4．2013年度日本地球化学会第60回年会（9/11-13，筑波大学）の共催依頼を承諾

5．科学教育研究協議会よりの「第60回全国研究大会」（8/2-4，岩手県北上市）後援依頼を承諾．

6．日本科学技術振興財団の「青少年のための科学の祭典2013」（5/19-3/31）後援依頼を承諾．同祭典，2012年の事業報告あり．

7．尾瀬保護財団より「第17回尾瀬賞」の募集（4/1-8/31まで）→News誌，HP，geo-flashに掲載

8．山田科学財団より，国際学術集会開催助成：募集期間4/1-2014/2/28，会議規模150名以内，助成金額700万円以内→News誌，geo-flash, HPに掲載

9．文科省，「一家に1枚」ポスターの企画募集（6/13〆切）

広報委員会で検討する．

＜その他＞

1．石油技術協会の80周年記念式典・講演会へのご招待（6/25，経団連ホール）

渡部副会長が出席する

2．JABEE総会開催通知（5/27，建築会館ホール）事務局が出席する

3．「知識基盤社会における学問的誠実性保証に関する国際比較研究グループ」（代表東北大学教育支援センター長羽田貴史）よりの「研究活動における倫理に関する調査」に回答した．

4．海上保安庁より海底地形名称の提案募集→HP, geo-flashに掲載

5．石灰石鉱業協会役員交代挨拶

＜会員＞

1．今月の入会者（11名）

正会員（3名）：岩見崇弘，竹内真司，佐藤恭一

正（院割）会員（7名）：中野龍二，山口千尋，並木由香，片岡達也，八木雅俊，安藤佳凛，白井孝明

正〔学部割〕会員（1名）：山上　諒

2．今月の退会者

正会員（7名）高橋奈津子，小谷綾香，伊藤康人，瀧井喜和子，北村重浩，筒井正明，石田光男

3．今月の逝去者　（3名）

正会員：三谷　豊（2012年12月5日）　竹内清和（2013年5月6日）　鈴木尉元（2013年5月13日）

4．2013年1月末日会員数

賛助：26　名誉：69　正会員：3781（正会員：3682，正（院割）会員：98，正（学部割）会員：1　合計　3876（昨年比 -108）

＜会計＞

・会計監査を5月15日に行った．

(3) 広報部会：広報委員会（内藤・松田）

・HPの英語版の充実を図る一環として，会長のご尽力により，歴代受賞者の掲載，役員欄に執行理事の役職を英語で掲載した．

・ジオルジュ3号を刊行した．

(4) 学術研究部会：行事委員会（星）

・仙台大会のセッションとシンポジウムは他学会との共催が決定．オフィオライトの国際シンポジウムおよび岩石鉱物関係のセッションは日本鉱物科学会と共催．堆積関係レギュラーセッションは日本堆積学会ほかと共催．

・2014年の鹿児島大会は日程が9/13-15に決定．巡検は9コースの予定で，案内書の編集は山口大が担当．

・2016年大会（関東支部担当）は，会場と日程を検討中．

(5) 学術研究部会：国際交流委員会（井龍）

・大韓地質学会2013年10月に年会（済州島）への招待を受け，ウォリス副会長，高木理事を派遣することとした．

・タイ地質学会との合同シンポジウム開催（於バンコク）の意向打診があり，久田理事が担当する．

(7) 編集出版部会：地質学雑誌編集委員会（山路）

1）編集状況報告（4月1日現在）．

・2013年度投稿論文　総数35編［論説17（和文16　英文1）・報告3（和文3）・口絵3（和文2，英文1）・巡検案内書12］

・査読中34編（巡検案内書を含む）

・受理済み18編（うち通常号6　特集号9　案内書3）

2）掲載状況

・119巻5月号：通常号（約60頁：5/20校了予定）

・119巻6月号：通常号（約60頁：入稿準備中）

(8) 編集出版部会：Island Arc編集委員会（伊藤）

・編集状況報告

・誌名変更の件は検討の結果Island Arcを継続することとなった．このプロセスを通じて立ち位置の再確認ができた．

(9) 編集出版部会：企画出版委員会（山口）

5）電子出版関係

・「白滝ジオパーク」および「地学を楽しく」の原稿の校閲終了．修正待ち．

(10) 社会貢献部会（高木・平田・中澤・保柳）

1）地質の日本部事業，街中ジオ散歩実施報告：定員を超える参加者があり盛会であった．

2）2013年度春季地質調査の研修の実施：5/27-5/31，参加者は定員通り6名の予定

以上

2013年6月8日

一般社団法人日本地質学会執行理事会

会　長（代表理事）　石渡　明

署名人　執行理事　　斎藤　眞

2013年度
第2回執行理事会議事録

期　日：2013年6月8日（土）13:00～16:40

場　所：地質学会事務局

出席者：石渡会長　斎藤常務理事　伊藤　坂口　内藤　平田　松田　山路　山本，（事務局）橋辺

欠席者（委任状提出，未記入議場委任）：ウォリス副会長　渡部副会長（石渡会長）井龍（斎藤常務）　高木　中澤　西　星　保柳　山口

＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者9名，委任状9名，合計18名の出席．

＊前回議事録の確認　小修整の上承認された．

Ⅰ　審議事項

1．学術大会講演申込異議申し立てに関する処理機構規則の改正

任意団体からの規則を法人の規則として，条文中の以下の文言を修正変更する．

日本地質学会→一般社団法人日本地質学会：規則名称，第1条，第2条

規約→規則：第1条

評議員会→理事会：第4条1項・2項2号・4項・5項

付則追加：法人の規則として一部改正

上記了承し，理事会に諮ることとした．

2．選挙管理委員候補者ならびに立会人の選出

・選挙管理委員5名（役員，代議員以外の正会員）

執行理事会で候補者案を作成し，理事会のメール審議に付す．

6月末までに決定→7月選挙管理委員会→9月号News誌告示

・立会人　2名→執行理事会選出につき，候補者を選出する．

3．地質学雑誌投稿編集規則の改定：図版の廃止について（山路）

現在では紙質も向上し，図版として別頁扱いする必要がない，図版の利用も減り，かつ編集の手間のみかかることから，廃止することで編集委員会の意見がまとまったことが編集委員長から説明され，廃止が了承された．

4．第２回G-EVER国際シンポジウム，ならびに第１回IUGS・日本学術会議国際ワークショップについて，改めて共催の依頼があり了承された．

5．文科省，「一家に１枚」ポスターの企画提案について

内藤広報委員長より原案の提案があり，一部修正のうえ応募することが了承された．

6．HPへの掲載事項の検討，英語HPの項目検討について

内藤広報委員長より原案提案があり，修正のうえ外部委託するなどして進めてもらうことで了承された．

7．その他

1）原子力規制委員会の評価会合に関して

学会推薦の委員から学会に対するコメントと要望が寄せられた．学会として断層調査の現状について情報交換の場を設けることなど，仙台大会での実施を検討する．

2）各賞に関して

2012年度の各賞選考検討委員よりコメントが寄せられ，とくに学会賞ほか三賞のあり方について議論した．

Ⅱ　報告事項

(1) 全体的報告

1．原子力規制委員会の評価会合について（斎藤常務）

学会から推薦した藤本理事からコメントと要望が寄せられた．

2．各賞，とくに３賞に関して

2012年度各賞選考検討委員からコメントが寄せられた．→審議事項へ

3．地質・地盤情報活用促進に関する法整備推進協議会，WGの委員推薦（斎藤常務）

利活用WG：松浦一樹会員（ダイヤコンサルタント），広報WG：澤口　隆会員（東洋大）

(2) 運営財政部会：総務委員会（西・山本）

＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞

1．ゼオライト学会より，第29回 ゼオライト研究発表会（11/27-28）の協賛依頼→承諾．

2．新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館より企画展示「微化石展―地層の中の小さな芸術品―」（７/17～８/30）の後援依頼→承諾

3．室戸ジオパークサマースクール2013実行委員会（８/８-８/９）より，同サマースクール（小中高生対象）への後援名義使用の依頼→承諾

4．第11回高校生科学技術チャレンジJSEC 2013の後援依頼（作品募集期2013/９/１-2013/10/上旬）→　例年通り承諾

5．文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学賞受賞候補者の推薦（〆切７/17，学会，〆切７/５）→HP, geo-flash　掲載

＜会員＞

1．今月の入会者（15名）

正会員（6名）：時実良典，髙橋利宏，濱田真理，角谷大輔，服部恵子，亀山　瞬

正（院割）会員（７名）：大野卓也，松井浩紀，飯塚亮太，酒向和希，藤井美南，仁田　彩，内村仁美

正〔学部割〕会員（２名）：熊谷祐穂，大関　萌

2．今月の退会者

正会員（１名）後閑友裕

3．今月の逝去者（３名）

正会員：西木敏夫（１月30日）沢野　弘（５月９日）福田　理（６月３日）

4．2013年１月末日会員数

賛助：26　名誉：69　正会員：3784（正会員：3679，正（院割）会員：103，正（学部割）会員：２　合計　3879（昨年比 －119）

＜会計＞

・講師ならびに担当理事からの要請により，研修会講師の謝金について検討した．

・朝日新聞出版社分冊百科編集部より，地球史をテーマにした分冊百科シリーズ（週刊全50冊）の読者プレゼントとして，地質学会とのコラボでフィールドノートを配布したい（予定部数１万～１万５千），価格単価は200円未満でとの要請があった．現在，要望の価格に見合ったものが提供できるかどうか，印刷所との間で紙やページ数，製本の装丁などを検討中，近々に同社に提案する見込み．

(3) 広報部会：広報委員会（内藤・松田）

1）学会HP日本語ページに「名誉会員」ページを追加

2）英語HPの項目検討→審議事項へ

3）「一家に一枚」ポスター，自然災害をテーマに原案作成→審議事項へ

4）仙台大会プレスリリース特筆すべき研究成果推薦の依頼．行事委員会と相談して効果的な方策を練る．

5）ジオルジュの博物館ストアでの販売を交渉中

(4) 学術研究部会：行事委員会（星）

(5) 学術研究部会：国際交流委員会（井龍）

(7) 編集出版部会：地質学雑誌編集委員会（山路）

1）編集状況報告（６月４日現在）．

・2013年度投稿論文　総数39編［論説18（和文17　英文１）・総説１（和文１）・報告４（和文4）・ノート１（和文１）・口絵３（和文２，英文１）・巡検案内書12］

査読中34編（巡検案内書を含む）

受理済み17編（うち通常号３　特集号11　案内書３）

2）掲載状況

・119巻６月号：通常号（約60頁：45頁校正中）

・119巻７月号：特集号「東北日本弧における活火山の長期活動評価」

・仙台大会巡検案内書：119巻８月号へCD-ROMを添付するため，受理になった原稿から順に入稿作業を開始した

3）その他

1．投稿原稿が不足気味，呼びかけが必要

2．イレギュラーな投稿者への対応

2．地質学史に関する原稿への対応　取扱い方法等を編集委員会で検討中．

(8) 編集出版部会：Island Arc編集委員会（伊藤）

・編集状況ほか報告　特集号が２件新規提案あり進行中．IFが近いうちに発表される．

(9) 編集出版部会：企画出版委員会（山口・保柳）

・電子出版物「地学を楽しく」の再提出原稿，チェック中（井龍理事校閲担当）．

・たんけんマップ「富士山・青木ヶ原」，編集担当を協議中

・超地球史年表，２名に査読依頼，うち１名から査読結果提出済み（状況変わらず）

・自然公園財団から依頼されたリーフレット紹介記事（斎藤常務理事執筆）は國立公園713号に掲載された．

(10) 社会貢献部会（高木・平田・中澤・保柳）

・2013年度春季地質調査の研修（５/27-５/31）は，事故なく無事終了したとの報告があった．

(11) ジオパーク支援委員会（高木）

・第14回地震火山こどもサマースクール（８月３日～４日）：伊豆半島ジオパークで開催．高木理事に代わって，川辺理事が参加予定．

(12) 地学オリンピック支援委員会（平田）

・支援委員会第７回の議事録

・「地学オリンピック予選試験問題評価と要望」を提出した

以上

2013年６月20日

一般社団法人日本地質学会執行理事会

会　長（代表理事）石渡　明

署名人　執行理事　斎藤　眞

日本地質学会会員名簿作成アンケートの実施について

日本地質学会では，学会員相互の交流と親睦を図る目的で，会員名簿を発行することを運営規則にうたっております．2013年はその発行年にあたり，本年11月末日発行の予定で準備を行っております．

名簿の発行様式は前回と同様で，全会員を収録します．本会としては，個人情報保護法の制約はあるとしても，会員の皆様が上記の目的に沿って利用できるような，従来規模の名簿を作成したいと考えておりますので，調査の実施にご理解とご協力をお願いいたします．

また，名簿作成時の会員以外は配布対象とはせず，会員も含めて発行後の販売は一切行わないことはこれまでどおりです．

名簿作成までの手続きを次のように行います．

1．①「名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更･登録カード」を提出していただく，もしくは，②学会ホームページから「会員のページ」へログインし，ご自身の情報を訂正・変更してください．

①名簿掲載アンケートを提出する場合：本アンケートは名簿掲載に関する確認も兼ねています．訂正，変更の有無に関わらず，名簿掲載選択項目について**掲載を拒否する項目**がありましたら，必ずアンケートの書き方の指示に従って掲載拒否の意思をお示し下さい（アンケートの書き方の詳細は後段を参照）．

②Web画面上から更新する場合：「会員のページ」へログイン後，会員メニューの「会員登録情報」画面でご自身の情報を確認し，情報の訂正・変更をして下さい．編集画面下側に会員名簿（冊子）への掲載について確認する項目がありますので，**掲載を拒否する項目には『□非掲載』にチェック（✓）をつけて下さい．**チェックのついていない項目は掲載承諾いただいたものとします．

①，②いずれの場合でも，掲載を拒否する項目がある方は必ず意思表示してください．チェックのついていない項目については掲載承諾いただいたものとします．なお，アンケートの返送のない会員（Web画面上で更新のない会員）については前回の名簿作成時と同様に「推定承諾」とみなし，2011年版会員名簿に掲載されている項目に準じて掲載いたします．

2．アンケート提出およびWeb画面更新締切：2013年10月4日（金）とします．

2013年6月
運営財政部会会員担当　山本高司

「名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更カード」記載について

本アンケート用紙（本誌別掲）は，基本的にWeb画面上で更新しない方に提出していただきます．アンケートには，会員として登録されている（登録できる）基本項目を，すべて挙げてあります．各項目の内容について訂正や変更がある場合には記入してお出しください．なお，会員名簿にはこれらの項目のうち，下記の名簿掲載項目（必須，選択）を載せます．選択項目については，個人の希望によりますので，選択項目について**掲載を拒否する項目がある場合には，該当する項目の□欄にチェック（✓）を入れ，**掲載拒否の意思をお示し下さい．チェックのついていない項目は掲載承諾いただいたものとします．

なお，アンケートの返送のない会員については「推定承諾」とみなします．

1．名簿に掲載できる項目：※氏名（ふりがなつき），出身校，卒年，※所属先，所属部課名，所属先電話，FAX番号，連絡先住所＝自宅住所または所属先住所，自宅の場合は自宅の電話，FAX番号，メールアドレス（所属先または個人のどちらか一方）

2．名簿に必ず掲載する項目：上記の※印つき項目，氏名，所属（ない場合は掲載しない）

3．名簿掲載を選択できる項目：上記の※印のない項目すべて

4．選択項目のうち掲載を拒否する項目がある場合：選択項目の□欄にチェック（✓）を入れてください．✓印がない項目は掲載承諾いただけたものとします．

5．名簿に掲載されない項目：会員番号，生年月日，興味専門分野，専門部会

6．掲載様式例

氏　名	出身校	卒業年	勤務先	〒	連絡先住所<e-mail>
地質（チシツ）　学（マナブ）	地質大環境	71	地質調査（株）地質部Ⓣ 03-5823-1150 Ⓕ 03-5823-1156	101-0032	東京都千代田区岩本町2-8-15 <main@geososiety.jp>

＜会員名簿の訂正・変更・登録についてのお願い＞

◎誤記・変更・追加などありましたら，楷書ではっきりと，アパート・下宿等は忘れずに書いてください．団地名など省略できる場合は省略形でお願いいたします．会員番号は雑誌の宛名ラベル左下の7桁の数字です．

◎名簿に必ず掲載する項目は※印つきの項目(氏名、所属〔ない場合は掲載しない〕)です．

◎名簿掲載を選択できる項目は※印のない項目全部についてです．

名簿への掲載を拒否する項目がある場合には，選択項目の □ 欄にチェック（✓）を付けてください．

◎基本的には郵便物の受け取り先が名簿に掲載される住所です．受け取り先が勤務先のかたはできるだけ，郵便物が確実に届く範囲（部課名）までご記入願います．受け取り先を変更する場合は，欄外の受取先のいずれかに〇をつけてください．

日本地質学会事務局　御中

FAX：03-5823-1156

E-mail ： main@geosociety.jp

※印の項目(氏名、所属)は掲載必須項目です．**掲載を拒否する選択項目には □ に チェック（✓）をつけて下さい．**

会員番号	（　　年　　月　　日届） **名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更・登録カード**				
ローマ字表記 ※　氏　　名		生年月日	19　　年	月	日生
出身校	最終学歴について掲載を**拒否する場合**には左側の項目**「□ 最終学歴」にチェックを**，在学中のかたは，所属先の身分（学生・院生・研究生等）について**掲載を拒否する場合**には**「□ 所属先の身分」にもチェック**を付けてください．				
□ 最終学歴 □ 所属先の身分	学校　　年　月　卒・在学 大学　　学部　　年　月　卒・在学 大学　　研究科　修士課程 ・博士課程　　年　月　修・在学 大学　　研究生・その他（　　）				
※　**所属先** 所属先部課名まで記入					
□ 所属先部課名	**所属先は郵便物が確実に届く範囲（部課名）までをご記入下さい**（掲載の可否に関わらず）． 所属先部課名について掲載拒否を希望する場合には左側の□にチェックを付けてください．				
□ 所属先住所	〒				
□ 所属先電話・FAX	代表 ・ ダイヤルイン TEL　　－　　－　　．FAX　　－　　－				
□ 自宅住所	〒				
□ 自宅電話・FAX	TEL　　－　　－　　．FAX　　－　　－				
□ E-mail Address	自宅・所属先のどちらかを登録．				

郵便物の受け取り先（いずれかに〇）　**自宅　・　所属先**

＜＜専門部会と興味専門分野について＞＞（該当する項目に〇印を付けて下さい）

◆　**専門部会への登録をお願いします．所属希望の部会を３つまで選択することができます．**

1. 地域地質　2. 層序　3. 堆積地質　4. 現行地質過程　5. 海洋地質　6. 構造地質　7. 岩石
8. 火山　9. 応用地質　10. 環境地質　11. 情報地質　12. 古生物　13. 第四紀地質　14. 環境変動史

◆　**あなたの興味専門分野を教えてください．３つまで選択することができます．**

1. 層位　2. 堆積・堆積岩　3. 古生物　4. 構造地質　5. 火山・火山岩　6. 深成岩　7. 変成岩　8. 鉱床地質（金属・非金属）
9. 鉱床　10. 鉱物　11. 燃料地質　12. 地熱　13. 第四紀　14. 環境地質　15. 都市地質　16. 土木地質　17. 土質工学
18. 水文地質　19. 探査地質　20. 土木工学　21. 情報地質　22. 地震地質　23. 海洋地質　24. 地球物理　25. 地球化学
26. 地質年代学　27. 地理　28. 地学教育　29. 考古学　30. その他　40. 地球惑星

出 版 物 在 庫 案 内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください．なお，2冊以上のお申込みにつきましては送料をお問い合わせください．
現金書留または郵便振替　00140－8－28067
40号以前の論集については，一部在庫がございます．院生・学生4割引，正会員2割引で販売しております．ご希望の方は学会事務局までお問い合わせ下さい．No. 40以降の論集：院生・学生のみ2割引

地 質 学 論 集

第40号　中央構造線のネオテクトニクス―その意義と問題点―．岡田篤正ほか編，250pp., 1992年12月刊，会員頒価3,200円，〒340円
第42号　西南日本の地殻形成と改変．小松正幸ほか編，357pp., 1993年4月刊，会員頒価3,100円，〒340円
第43号　浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学．村岡洋文ほか編，177pp., 1994年4月刊，会員頒価2,000円，〒340円
第44号　島弧火山岩の時空変遷．周藤賢治ほか編，335pp., 1995年11月刊，会員頒価2,800円，〒340円
第45号　~~シーケンス層序学―新しい地層観を目指して．斎藤文紀ほか編，249pp., 1995年8月刊，会員頒価2,500円，〒340円~~（**売り切れました**）
第46号　火山活動のモデル化．佐藤博明ほか編，162pp., 1996年9月刊，会員頒価1,900円，〒290円
第47号　日高地殻―マントル系のマグマ活動．荒井章司ほか編，323pp., 1997年4月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第48号　Cretaceous Environmental Change in East and South Asia（IGCP350）Contributions from Japan―　岡田博有ほか編，188pp.，1997年6月刊，会員頒価2,100円，〒340円
第49号　21世紀を担う地質学．新妻信明ほか編，232pp.，1998年3月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第50号　構造地質　特別号―21世紀の構造地質学にむけて―．狩野謙一ほか編，263pp.，1998年7月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第51号　地震と地盤災害―1995年兵庫県南部地震の教訓―．岡田博有ほか編，162pp.，1998年3月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第52号　オフィオライトと付加体テクトニクス．宮下純夫ほか編，316pp.，カラー10pp.，1999年9月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第53号　本州弧下部地殻と珪長質マグマの生成・活動システム．加々美寛雄ほか編，401pp.，1999年11月刊，会員頒価3,900円，〒450円．
第54号　タフォノミーと堆積過程―化石層からの情報解読―小笠原憲四郎ほか編，197pp.，1999年12月刊，会員頒価2,900円，〒340円．
第55号　~~ジュラ紀付加体の起源と形成過程．木村克己ほか編，221pp.，2000年1月刊，会員頒価2,800円，〒340円．~~
（**売り切れました**）
第56号　古領家帯と黒瀬川帯の構成要素と改変過程．高木秀雄ほか編，253pp., 2000年3月刊，会員頒価2,900円，〒340円．
第57号　砕屑岩組成と堆積・造構環境．公文富士夫ほか編，240pp., 2000年9月刊，会員頒価2,800円，〒340円．
第58号　~~地震イベント堆積物―深海底から陸上までのコネクション―藤原　治ほか編，169pp., 2004年12月刊，会員頒価~~2,900円，〒340円．
第59号　沖積層研究の新展開　井内美郎ほか編，212pp.，2006年5月刊，会員頒価2,400円，〒340円．

リーフレットシリーズ
大地の動きを知ろう―地震・活断層・地震災害―　1995年4月発行　会員価格200円（非会員300円）
大地のいたみを感じよう―地質汚染Geo－Pollutions 1997年2月発行　会員価格200円（非会員300円）
大地をめぐる水―水環境と地質環境―　2001年5月発行　会員価格300円（非会員400円）
日本列島と地質環境の長期安定性　2011年発行　会員価格500円（非会員600円）

国立公園地質リーフレットたんけんシリーズ（**20部以上購入の場合割引あり**）
1．箱根火山たんけんマップ―今、生きている火山　2007年5月発行　会員価格300円
2．屋久島地質たんけんマップ―洋上アルプスは不思議な地質がいっぱい―　2009年3月発行　会員価格300円
3．城ヶ島たんけんマップ―深海から生まれた城ヶ島―　2010年9月発行　会員価格300円

国立公園地質リーフレットシリーズ
1．箱根火山　2007年7月発行　会員価格1,000円（**20部以上購入の場合割引あり**）

下敷き：「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」（英語版）1枚200円（非会員300円）

講演要旨集ほか
第118年見学旅行案内書（2011年水戸）　会員頒価2,800円，〒500円
第117年学術大会講演要旨（2010年富山）　会員頒価4,000円，〒500円
第117年見学旅行案内書（2010年富山）　会員頒価2,800円，〒500円
第116年見学旅行案内書（2009年岡山）　会員頒価2,800円，〒500円
第115年見学旅行案内書（2008年秋田）　会員頒価2,500円，〒500円
第114年学術大会講演要旨（2007年札幌）　会員頒価4,000円，〒500円
※このほか，大会講演要旨は，2002年新潟，2003年静岡，2004年千葉，2006年高知．見学旅行案内書は，2003年静岡，2004年千葉，2005年京都に残部があります．

フィールドノート：学会オリジナル．12×19cm．ハードカバー．レインガード使用　会員頒価1冊500円．

広告募集

ニュース誌に広告を掲載しませんか？

ニュース誌の掲載広告を募集しています．学会直接取り扱いになりますので、カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます．是非ご利用ください！

	価格（白黒）	版下作成	カラー印刷
表4	60,000	+10,000	+10,000
表2	50,000	+10,000	---
表3	40,000	+10,000	---
本文頁	35,000	+5,000	---

（単位：円）

【お得な割引価格も設定しています！！】

掲載位置・サイズにかかわらず，
4回掲載一括注文：10％割引
6回掲載一括注文：15％割引
※一年度内（4〜3月）もしくは一巻内（1〜12月号）で一括注文頂いた場合に限ります．

申込・問い合わせ：一般社団法人日本地質学会 事務局
電話　03-5823-1150　FAX03-5823-1156
e-mail: main@geosociety.jp

広報誌ジオルジュ　一括割引購入のご案内

日本地質学会では広報誌「ジオルジュ」を発行しています（年2回発行．定価250円）．

博物館・学校・研究機関などで，イベントでの配布物，友の会へのプレミアグッズ，ストアなどでの販売物として，ジオルジュを利用してみませんか．部数に応じて割引価格を設定しておりますので，是非ご検討下さい．

【割引価格例】
100部：20,000円（定価2割引）
300部：52,500円（定価3割引）
これ以外についてもご希望に応じてご相談承ります．

毎号各地のジオパークの特集記事の掲載も企画しています．ジオパークの広報の一環としてもご活用ください．

最新号（2013前期号）発行！

申込・問い合わせ：一般社団法人 日本地質学会
電話　03-5823-1150　FAX03-5823-1156　e-mail: main@geosociety.jp

地質情報展2013みやぎ

大地を知って明日を生かす

2013年 9月

14土 15日 16月・祝

14日 13：00～16：45
15日 9：00～16：45
16日 9：00～12：30

入場無料
※常設展入場は有料です

会場：スリーエム仙台市科学館
仙台市青葉区台原森林公園４番１号

主催：独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター・
一般社団法人日本地質学会
共催：スリーエム仙台市科学館
後援：宮城県、宮城県教育委員会、朝日新聞仙台総局、毎日新聞仙台支局、読売新聞東北総局、河北新報社、NHK仙台放送局、一般社団法人全国地質調査業協会連合会、日本ジオパークネットワーク

宮城および周辺地域の地質をはじめとして、最新の地質学の成果や地震・津波・地盤災害の起こるしくみをわかりやすく体験的に"展示・解説"します。小学校入学前のお子様からお年寄りまで、皆さんに楽しみながら「地質」を学んでいただけるイベントです。

また、さまざまな"体験学習コーナー"を用意しており、実験や実演を通じて地質学をわかりやすく学ぶことができます。

ぜひ、「地質情報展2013みやぎ」にご来場ください。

【問い合わせ】
独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター 地質情報展開催事務局
E-mail: johoten2013jimu-ml@aist.go.jp / TEL: 029-861-3687
URL: http://www.gsj.jp/event/2013fy-event/miyagi2013/index.html

「地質情報展 2013 みやぎ 大地を知って 明日を生かす」は、平成25年度科学研究費補助金研究成果公開促進費補助事業です。

Ⓒ一般社団法人日本地質学会 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F 電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156 E-mail：main@geosociety.jp ホームページ http://www.geosociety.jp